明治二十七年八月二十五日第三種郵便物認可

November 20th 1909.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 212

大日本蠶絲會報

第貳百十二號目要

▲優等賞の光榮を擔へる 越陽館▼
▲優等賞の光榮を擔へる 澁川英太君▼
●我優等生絲は何故に歐洲に輸出せられぬか 生絲檢査所技師 今西直次郎
●桑の介殼蟲被害の實例と其驅除法 農學士 明石弘
●製絲の道如何 鹿島製絲株式會社々長 波多野鶴吉
●乾燥の方法及其原理 蠶業講習所技手 小松豐作
●甲州流の桑園整理法 群馬縣蠶業試驗場技手 早川文太郎
●桑園と綠肥 菊地助松
●屹度當る蠶の見方 中谷桑實
●屑物整理 本會事務囑託 吉永信
●開墾地の蠶業 重富三男三
●飼育上競進社は如何なる點に注意せるか 競進社長 浦部良太郎
●如何にせば蠶絲を低廉に生産し得るか 學務委員 八田達也
●中米及南米視察談 法學士 岡實
●蠶絲業と冷氣 マンベリー蠶業講習所長 エフ、ランベール
▲優等賞の光榮を擔へる 上村伊左衛門翁▼
▲蠶業狂と呼ばれたる 刈部豐一翁▼

TOKYO.
The Association;
No. 18 Nishikicho Sanchome, Kanda, Japan.

特許中原式

煮繭器（乾燥器）
佛國伊第三國出願
九三三二九三
號中

實力と効果とより打算すれば現代に於て最も廉價にして亦最も安全なる乾繭器なりとの好評嘖々たる

中原式乾燥器は

壹回一石五斗入り三石入の火熱式あり

壹回六石入よりは火熱式蒸汽式の二樣あり

詳細は說明書に記載せり

東京市本所區德右衛門町三四

特許中原式合資會社（電話浅花二千二百二十六番 振替貯金口座壹六五〇四〇番）

伊藤公を弔す

維時明治四十二年十月二十六日樞密院議長從一位大勳位公爵伊藤博文卿薨去せらる哀悼痛惜何ぞ堪へん抑も公は眞實國家の元勳にして國民一般の敬重する所海外諸國も亦平和主義進歩主義の大政治家として信賴するもの頗る厚かりしに悠々自適老後の閑日月を送るに忍びず一片耿々國に報ずるの精神より老軀を提げて滿洲の地に臨み測らずも兇手の奇禍に罹りて殉國の終焉を遂げらる眞に公の爲に悲むべく又國家の不幸なりと謂はざるべからず然れども公等の當初參畫せられたる開國進取の國是は今や中外に宣揚せられ憲政の基礎内に成り富强の勢力外に伸び國運隆々國家の前途亦憂ふるに足るものなし公其意を安んじて瞑目するに足らん殊に公の凶報一度傳はるや　天子深く震悼あらせられ待つに國葬の特典を以てし且つ優渥なる誄詞并に幣帛を賜ひ特に廢朝を行ふて哀悼の震衷を表じさせ賜ふ斯の如きは從來殆んど其例を見ざる所にして公の榮譽亦大なりと云ふべきなり謹んで公の英靈を弔す

明治四十二年十一月

大日本蠶絲會

大日本蠶絲會報　第二百拾貳號

目次

●大日本蠶絲會新潟支會第二回總會並に品評會褒賞授與式の光景
●大日本蠶絲會新潟支會第二回總會に於て一二等有功章を授與せられたる諸氏の肖像
●大日本蠶絲會新潟支會第二回品評會褒賞授與式に於て優等賞の光榮を擔へる諸氏の肖像

叢要記事……一—一四

●蠶病豫防並に繭質統一に關する答申及建議……四—一五

論議

●我優等生絲は何故に歐洲に輸出せられぬか　生絲檢査所技師　今西直次郎
●桑の介殼蟲被害の實例と其驅除法　農學士　石田明弘
●製絲の道如何　郡是製絲株式會社長　波多野鶴吉
●乾燥の方法及其原理　蠶業講習所技手　小松豐作……一五—三三

集芳

●甲州流の桑園整理法　群馬縣農事試驗場技手　早川文太郎
●桑園と絲肥　菊地助松
●當る蠶の見方　中谷桑實
●乾度穴貯藏　渡邊義
●蠶種に死卵を生ずる原因　本會事務囑託　吉永重信
●屑物整理　富三男
●開墾地の蠶業……三四—四五

叩門

●飼育上競進社は如何なる點に注意せるか　競進社長　浦部良太郎
●繭の仕入と一つの理想　郡是製絲株式會社長　波多野鶴吉
●如何にせば蠶絲を低廉に生產し得るか　學藝委員　八田逢也
●中米及南米視察談……法學士　岡實……四六—五六

心影

●優等賞への光榮を擔へる諸氏の肖像　越陽館
●優等賞への光榮を擔へる諸氏の肖像　川英太君
●優等賞への光榮を擔へる諸氏の肖像　上村伊左衛門翁
●蠶業を狂と呼はれたる故刈部豐一翁

遠響

●蠶絲業と冷氣……エンペリー蠶業講習所長　エフ、ブンペール……五六—五七

實務

●桑園年中行事……愛媛縣立農學校教諭　池田榮太郎……五八—六〇

絲況

●横濱市場……馬場太由……六一—六四

問答

●蠶病消毒に就き質問並答（一件）●得桑實生に就き質問並答●結繭せざる蛹に就き質問並答……六五—六六

會務彙事

●新潟支會第二回總會並に第一回品評會●下野支會第十回品評會●諮問に關する調査會●評議員會●故伊藤公爵の追悼●製絲工女救護會規程●支會の設置及支會職員の嘱託●特別會員の推薦●本會役員の出張●會員一行の出發紀行……八〇—八六

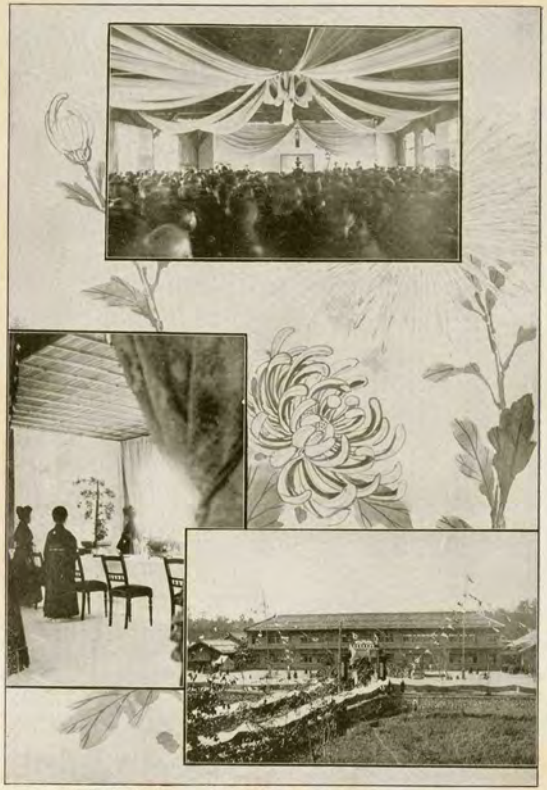
蠶桑雜觀

●皆倫の新特繭法●京都蠶業講習所十週年記念式●世界生絲產額●八田氏功績表彰會●生絲檢査所月報●文藝●蠶海漫筆

大日本蠶絲會新潟支會第二回總會並第一回品評會褒賞授與式の光景

Cérémonie de la distribution des prix à la deuxième Assemblée générale et au premier concours agricole et industriel de notre succursale de Niigata.

式場の光景



會場に當てたる小千谷小學校　　來賓休憩所

次號目次

●植物細胞學上より見たる桑　理學士　田原正人

●桑の肥料に就て　農學士　芳賀權四郎

●本年の生絲相場に就て　農學士　足立元太郎

●蠶種雪圃貯藏の成蹟　北越蠶業試驗所技師　小野陽次郎

●クツワ掛病蠶に就て　御岡縣立農事試驗場技手　金子保

●蠶業改良の根本義　鳥羽久吾

●信州エキストラ絲　六工社長　羽田桂之進

●生絲合同販賣の模範組合　大里忠一郎

●田邊式桑園仕立法　田邊佐藤

●乾繭の方法及其原理　蠶業講習所技手　小松豐作

謝禮廣告

拜啓秋冷の候各位益々御健勝の段奉大賀候陳ば小生等先般貴縣下へ出向致候節は一方なら㕝御厚情を蒙り深謝の至りに御座候其後豫定の通り無事歸京致し候に付乍他事御安意下されたく右紙上を以て御禮申上度如此に御座候　敬具

練木喜三
八田達也

島根鳥取兩縣下蠶絲會員
幷に有志者御中

大日本蠶絲會新潟支會第一回品評會褒賞授與式に於て優等賞の光榮を擔はれたる諸氏の肖像

Messieurs les exposants honorés du grand prix au même concours.

鶴陽館と其社長小池與惣太君

藤川英太郎君と其蠶室

上村伊左衛門君

大日本蠶絲會新潟支會第二回總會に於て有功章を授與せられたる諸氏の肖像

Messieurs les exposants honorés du premier prix au même concours.

伯爵清棲家教君

深町練太郎君

大日本蠶絲會報　第貳百拾貳號

重要記事

蠶病豫防竝に繭質統一に關する答申及建議

本邦蠶絲業の一大發展を圖らんと欲せば現に施行せられつつある蠶病豫防法の効果をして更に一層適切ならしめ、又從來雜駁に流れたる繭質を統一するの急務なることは何人も之を認むる處なるが、農商務大臣亦深く此點に留意せらるゝありて、曩に本會に對し左の件を諮問せられたり。

諮問事項

蠶病豫防法の効果を增進せしむる方法如何

蠶病豫防法の實施以來既に五年を閲して近時施行の狀勢を見るに製種及消毒上の監督に於て或は母蛾檢査に於て往往遺憾の點少しとせず之れ原種漸增の爲府縣に於て蠶病豫防の膨脹に苦むに原種の製造額を制限し或は檢査手數料を徵するも亦一法たるが如し依て其利害得失に鉤し一層蠶豫防の効果を顯著ならしむるの方法に付意見を問ふ。

繭質統一の程度に並に其方法如何

輓近蠶繭の進歩は著しく精良生絲の消費力の增進せるを以て供給の地位にある本邦製絲業者は之に應ずるの方針に出づると同時に勞銀の騰貴に伴ふ生產費の省略に努めざるべからず繼も現在の如き區々たる品位の蠶繭に依り可及的繭質の統一を圖り內製絲業の經營を容易ならしめ外需要の輿望を充すは實に今日の急務なりと認む依て繭質の統一の程度並に其方法を問ふ。

右諮問事項は極めて重要問題なるを以て、本會は大に愼重の態度を取り、全國より斯業に關する學者及實業家の臨席を求めて、去月二十五日より同三十日迄熱心に調査を爲したる結果を、更に本月一日評議員會に於て審議し、本會々頭より左の答申を大浦農商務大臣に提出したり。

答申

繭質統一に關する方法

繭質統一は本邦蠶絲業上の重要問題にして刻下の急務に屬

せり依て政府は中央に蠶種試驗所を置き地方適當の場所に之が支所を設け種類の試驗を行ひ其成蹟により原々種の製造を爲し之を系統的に飼育せしむるを以て繭質の統一を計るの捷徑にして目下の事情に適當する方法なりと信ず。倘種類試驗は之を繼續し更に優良種の選出に努め品位優良のものを得たる時は之を以て原々種に當つる方法を取り其改良を怠らざるものとす。

其施行の大要を擧ぐれは左の如し。

一、政府は蠶種試驗所を中央に其支所を全國適當の場所に設置し蠶の種類試驗を行ひ且つ原々種の製造をなすものとす

二、製絲用種は原種を、原種は原々種を用ゆるにあらざれば之を製造することを得ず

三、原々種は無償を以て原種製造者に附與す

四、原種は蠶種製造者中左の資格を具備する者に限り之を製造せしむ
但し其製造の方法は別に之を定む

資格
一、五ヶ年以上蠶種製造に從事せる者又は蠶業に關する乙種程度の學校及之と同等以上の講習所等を卒業し三ヶ年以上蠶種製造に從事せる者
二、特に原種の製造に供すへき蠶室蠶具を所有する者
三、特に原種用の飼育に供すへき桑園を準備する者

五、製絲用種は蠶種製造者をして之を製造せしむ

六、自家用蠶種は此の方法に依り製絲用種を製造する時より製造することを得す

七、蠶種試驗所に商議員を置き蠶の種類選定を行ふ
商議員は官民中蠶絲業に堪能なる者に就き農商務大臣之を囑託す

八、二化性及多化性蠶種は越年する者に限り此の方法を適用す

九、試驗所、講習所、又は學校に於て試驗の結果優良なりと認むる蠶の種類を得たるときは蠶種試驗所に提供することを得

十、政府は明治四十三年度より第一項の試驗を開始し、明治四十六年度より原々種を製造し原蠶種製造者をして明治四十七年度より原種の製造をなさしむ

十一、蠶病豫防法中之に牴觸する條項は改正を行ふこと

附記

一農商務大臣は蠶種試驗所に於て原々種の製造を爲す以前に在りては訓令を以て地方長官に蠶種々類の整理を爲さしむる事

二政府は明年度より大規模を以て在來の優良種より原々種を製造し之を地方の有志者に配付し其繭の少許を採り試驗を爲し繭質統一の進捗を期する事

三原々種を製造するには安全なる方法を以て種類の善良なるものを選むは勿論飼育中の經過最も良好なるものより採種すへきこと

蠶病豫防に關する方法

蠶病豫防法の效果を增進せしむるには左の方法を實行するを以て必要なりと認む

一、蠶種製造業者の原種製造額は製造に供用すへき種繭一斗每に三枚を以て制限とす
但蠶種製造者に於て必要あるときは制限外に原種を製造することを得

二、前項但書の原種に對し檢査を施行したるときは檢査手數料を徵收す檢査手數料の額は全國均一とす
母蛾の處理に付不正の疑ありと認むるときは地方長官は卵の對照顯微鏡檢査を行ふことを得
前項檢査の結果母蛾檢査の成蹟と符合せさるものに對しては原種用の證印を取消す
但製絲用種に變更することを得

三、左記の場合に於ては製絲用種に對し卵の顯微鏡檢査を行ふ
但其實行は明治四十四年度よりとす
(一)前年の原種檢査に於て病毒多き原種を供用したるもの
(二)飼育中の蠶兒に就き病毒多しと認めたるもの
(三)前二項の病毒步合は調査の上適當に之を定むること

右各項は現行蠶病豫防法及其施行上に對し修正を加へ以て之が效果を顯著ならしめんことを期す抑々蠶絲業は國家重要の物產なるを以て之に對し國家は一層の保護を加へ斯業の改善發達に最も緊要なる蠶病豫防費の如きは全部國庫の支辨と爲すを以て洵に當然のことなりと信ず然れども帝國目下の財政上止むを得ざるものありと認むるを以て暫く現行法に依りて調査を爲せり希くは財政の許す限り速に國費を以て支辨するに至らんことを望む

* * * * *

倘右答申をして實際に適用し、其趣旨の貫徹を期せんには斯業に關する各種團體の力を藉るの緊要なるを認め、右答申に左の建議を附し農商務大臣に提出したり。

建議案

蠶病豫防法の趣旨を貫徹し之か效果を全ふせしめんと欲せば蠶種製造者及飼育者の斯業に關する智識を高め德義上の制裁を緊張せしめざるべからず此が指導方法も蓋し一にして足らざるべきも前者に對しては先以て豫防法を活用し得る程度に蠶病に關する智識を普及せしむるを目的とし之がために或は各種教育機關を利用し或は講習會等を盛ならしむるを切要とすべく後者に對しては蠶種製造者飼育者共に夫々團體を結びて德義と信用とを基礎とし團體相互間の自治的活動に待つを最有效と認められ候

例之は蠶種製造業者は適當の範圍に於て便宜組合を結び其組合の內に嚴重なる規約を設け苟も豫防法の規定に背かざるは勿論力めて精良の蠶種を製造する樣組合相互に制節し若し不德不法の形跡を發見したるときは組合に於て制裁を加へ以て該組合の信用を高むることを努むべく飼育者即ち蠶種需用者に於ても團體を組織し團體の名に依りて最も信用ある蠶種製造業者と特約を結び和互有利なる條件の下に確實精良なる蠶種を得ることゝなるべし

之が團體は或は本會の支會委員部又は婦人部、農會會員等の一部又は本會の支會委員部又は蠶業組合を組織し組合の需用額を概算し一括して蠶種製造業組合に賣渡し申込むことなるも亦一方法たるべしと被認候此の如くして蠶種製造者、養蠶者共に安心して斯業に從事することを得べく從て豫防法の效果を大ならしむる上に種繭（不捻）と被認候

本件に關しては本會に於ても實行の方法を講ずべく候へども特に主務大臣より詳細なる細目を發せられ當業者を勸奬し關係諸官公衙をして周到に督勵せしめられんことを希望し候

右及建議候也

蠶絲業は賤民の仕事か

北海道第二回蠶絲品評會の褒賞授與式場で淺羽氏とやら云ふ人蠶絲業に從事せるものは本邦各階級に於て最も賤民である賤民の業であると謂はれたさうだ実りとは餘りに蠶絲業者を侮蔑した言ではあるまいか皮想の管見チト慎しむ處ありては如何

我優等生絲は何故に歐洲に輸出せられぬか

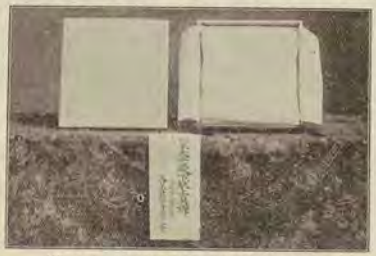
學士 蠶業講習員
生絲檢査所技師 今西直次郎

我日本絲は土耳其絲と同格

去る明治廿年前後我優等生絲は歐洲諸國絲に佛國向として多く輸出せられたのであるが、爾來米國の販賣著く擴張せられて より、歐洲向は里知市場にて唱ふる、一番生、即ち我上一番格以下のものが多く輸出せられて居る、今同市場に於て最も多く取引せらるる、各國生絲の一等に屬する最近の公定相場に就て、之れを比較して見るに大要次の如くである。

佛蘭西　五二法　乃至　五三法　伊太利　五〇法－五四法　伊太利　五一法－五三法　墨西哥　四六法　ヒマラヤ　四九法　支那（上海）　四八法－五〇法　墨東　三四法－三七法　日本　四二法－四八法

此比較によれば佛蘭西、伊太利及び匈牙利の如きは最上の位置を占めて居る、其次は支那上海であるが、其飛切物としては世界生絲中始終最高の位置を占めて居る、而して我日本の生絲は前表中四十八法とあるは細絲に對する相場で四十二法とあるは太絲に對する相場である、此相場にも生絲需要の關係により多少の差を生ずるものなれど、先づ「ブルース」の「相場に接近して居る樣である、此「ブルース」と云ふ國は土耳其に屬して內外人共著く其實況を調査して居られ國であるが、同國は從來佛國と交際上の關係により、總て佛式によるものが多い樣である、蠶種も自國の「バグダード」一種を除くの外、日本、海白種も多く飼育して居るが、多くは佛國黃繭種を用ひて居る、然るに此地方は文物未だ開けぬ場所も多き爲め乎、原料繭は可なり見るべきものがあるが、其生絲に至ては細太共に伊佛の優等とは、其しき懸隔ある樣である、其價格と云ひ其需要と云ひ、本邦生絲と其狀態を同ふして居ると云ふも敢て過言でなかからうと思ふ。



富山市八會支店尾人組員　りよ郎　桑太郎下賜子上献に奉し上献れ繭

我生絲の經絲に使用せられぬ原因

歐洲諸國に於ける我生絲の地位は土耳其絲と同格とすれば中等の品位より輸出せられぬものと言はんけれども、而して我日本の生絲は上等品及び優等品が需要せられぬは、抑も何の原因であるか、將來其發展の見込は容易に決せられぬものか我生絲賣場の發達を圖るに於て大に研究を要するものと信じて居る、其原因の詳細に至ては種々の事情もあらんかなれど、余の見る所を概觀する處によれば、米國機業の形態は歐洲のそれに比して、其規模も廣大に原料の取引も隨て多く、且つ賃銀も總て生活の度が高くて職工の賃、銀の如きも歐洲に比すれば數倍である、故に米國は最初其織物の發達を期せんに概ね機械力を增し、生産力を增し、製品を比較的安直に仕上げるの方針を取つたのである、然るに其力織機に適合する原料絲は、纖度の均一なるは勿論殊に強靱なる絲質を要するものであるから、其直段は高くも其適當である、我製絲家もこれに準じて成るべく好原料を撰別して、彼れの嗜好に應ずる樣製絲の技術を上達し、食を加へつゝある、今後益々蠶絲業上の革新を圖らんければならぬ、而して歐洲向細絲としては全然經絲に使用せられたと云ふ譯ではないが、尤も米國向の生絲とも優等品は其差異いのであるから、今後益々蠶絲業上の革新を圖らんければならぬ、而して歐洲向細絲としては全然經絲に使用せられたと云ふ譯ではないが、

其數量は甚だ僅少で、殊に優等の繭絲としては絶無の狀態に在り、其繰糸法は未だ進歩せられて居らぬ、何故に之れに使用せられぬか、近年歐米共に機業の經濟上「ダンタレビエス」と名づけて生絲の撚糸を上げて機之れを練り、之れを染める反物が大に流行して居る其絲糸は多くは一本絲にして撚糸を生じて生産力を非常に減ずるものである、然るに我日本の生絲中には之に適するものが最も強靭でなければ、屢々切れ斷絶を生じて生産力を非常に減ずるものである、然るに我日本の生絲中には之に適するものが稀、之れに反して伊、佛、墨、伊太利等の繭絲は安那上海等の國々に優等の繰絲は是れ飛切物は頗る之れに適當して居るものである、而して繰糸の如きは繊物の種類にもよるが、多くは其生絲を合せ之れに撚りて施し練つて染めて織立つるものであるから、絲質が多少軟弱で作業上切斷等の缺點を少くし得らるものである、之れが爲めに我日本を始め支那等の上一番格位のものは、格安により紙如せられて居るのである、要するに歐洲諸國の機業家は相互いに廉價に仕上ぐる練糸を爭しつゝあるから、遠き將來は兎も角、近き將來に就ては我生絲を優等繭絲に使用することは至難の業であると評する者が多いのである。

經絲販路の擴張と繭質統一との關係

歐洲諸國に於ける本邦生絲の地位は斯の如き始末である、今之れを思へば我生絲に改良を加へて容易の業でなかれば、今日の如く我蠶絲業の著しく增進するに至らざるべからざるに至らんかと氣遣ふのである、故に其販路を擴張する力策を講ずるは刻下の急務である、蓋し其方法は種々あれど優等の原料繭を準備せんければならぬ、慨ふに是蚕養蠶及び製絲の改良を圖りつゝあるも、如何なる繭質が製絲に適するや將た其統一を要する點の如きは、相互の意志合致して居らぬ爲めに、製絲家は各々其流儀の蠶種を製造して當春伊國人パイニー氏が來朝されて數月間細心に我蠶業に上意見を交換した際に、同氏の曰く伊國は近年米國に於て迚も日本米には及ばぬが、繭質は日本の方が區々で種子劣なるものが多い樣に感じた、之れを改良せらるゝには日本に掛合せて施さるゝことは得策であらうと兎に角我繭質の改良と統一は、故に中今當業者間にも之れが一大問題として其方法を討議しつゝあるが、余は從來の我白繭種の改善を圖ると同時に伊佛に行はるゝ黄繭種をも普及せしむるを得策と考へて居る、抑も黄繭絲の特質は黑蚕に最も適當して伸度も亦最も富んで居る、又蚕年續々伊佛より米國に輸出せられて居る譯である、是れ伊佛の繰糸は最も富んで居る、近年續々伊佛より米國に輸出しつゝあるも、其絲質が機業家の嗜好に適合する爲めである、之れを要するに繭質及び繰糸の改良及び其統一を圖るに在て其改良と統一を圖るに在ては我生絲質は上最大の急務であるに、而して其改良と統一を圖るに在ては我生絲質は上適當な蠶種の極準を定むるも、伊佛とは必ず同一の方策を講ずるが必要であることは勿論であるが、其標準を定むるに、主として製糸經濟に適する者を撰擇するが肝要である、今や我製絲業は伊佛に比して生産費は多少安きが如くであるが、戰勝後年々騰貴しつゝあるから、之に適する繭質即ち形狀、粒數、厚薄一定し、假令ば其繊度も二デニール、乃至三デニール、乾繭の粒數百メートル以上のものを標準として、撰擇するを必要とす若し果して斯の如き繭質を得らるゝ樣なれば機業の經濟にも必ず適するに至るは、伊佛の黄繭絲の實例に徴して明かなることである。

桑の介殼蟲被害の實例と其驅除法

農學士　明石弘

加害の激甚なるは介殼蟲

桑樹の害蟲六十餘種種々なる時期種々なる方法に於て加害を逞しつゝあるが、其被害の直に吾人の眼に映ずる所のものは、剌合に注意せられ、其驅除も亦實行せられて居る、例へば星菱に於ては尺蠖の如き、晩秋に於ける蚕蛹の如き、即ち是れである、然るに介殼蟲は體軀微小にして容易く害敵の目を免れ、隱微の間甚しき侵害を擅にして居る、桑樹を害する介殼蟲は既に知られたるもの七種に及べども、其加害の激甚なるものは、實に桑の介殼蟲 Diaspis pentagona Targ. Tozz. なのである。

樹勢の衰へた桑樹にのみ寄生するのではない

桑の介殼蟲は體軀微小であるが爲め、個體に依る被害程度は決して著しいものではなかれど、繁殖力實に強大にして一二年の注意を怠るあらば、忽ち介殼を以て枝條を蔽ひ、此狀態に到達すれば桑樹は既に其勢力を殺減せられ、新芽の伸長不良となり、芽葉の發育亦た圓滿を缺く、是に於て當業者は、初めて介殼蟲の寄生を認めて其害の甚しきに驚くと雖も既に遲く、故に當業者は往々枝條結死の運命を彷徨するの除儀なきに至るのである、桑樹のみ寄生するものなるが如き誤想を抱かしむるが如き誤想を抱かしむるが介殼蟲は決して勢力衰へたる枝條を好むものにあらずして反てよく枝葉の繁茂した風通射光を適當せしむるが如き、桑園に於て其繁殖に好適するものである。

觀察して一驚又一驚

去月蠶絲業視察の公務を帶び、關東東北地方を巡視したが秋田山形に至るに及んで、一般當業者が此害蟲介殼蟲に就て多くの智識を有するに驚いた、即ち桑の害蟲は必ずしも介殼蟲なりと云ふ答が異口同音であつた、併しながら實地調査するに及んで、再び其被害の著しきに驚き、桑園を踏査するに、桑

家の脳裏に介殼蟲なる印象の浸込んだのは無理ならぬことゝ感じた、此地方は高木仕立が多く、介殼蟲の繁殖に適して居る故に、介殼蟲の繁殖は明かなる事實なるも、此慕延せる區域の尤大なる被害の源其なるは想像外であつた、即ち之れが桑の枝條の衰弱せるは勿論往々枯死に瀕し大々的黄定を必要とするものも亦少くなかつた。

又郡馬縣に於ても各郡介殼蟲の被害ありと稱し、其被害の著しき碓氷郡に於ける狀況を視察せるに、同郡安中町字古屋に於けるが如きは約五町歩の桑園此小蟲の寓めに殆んど全滅に至らんとし、(枝條の枯死せるは云ふも更なり、全株の枯死を招きしものの點々)それを認むるの慘狀にあり、此他同郡原市町東横野等に於て被害少からぬことを聞いたり、以上は最近に目撃した實例に過ぎぬが此他各府縣に於ても本種の被害を見ざるは殆んど稀なりと云ふも過言であるまいと信ずる。

介殼蟲は伊太利にも……

斯の如く介殼蟲は我邦蠶業上に多大の損害を與へつゝあるが、之れ獨り本邦のみに止まらず、近時外國雑誌の報ずる所に依れば次の様な記事がある。

「伊太利セリ」(略)「チュレンヒ市の西部ヴィラ、ノバ、ディ、ポンテ、ポンテ、ヴェネツィアの農業會議所に於て桑蠶家及び枝術者の官吏を召集し蟲害の防禦策として本年(一九一四年)月廿四日政府の補助金を受け、桑の介殼蟲の性質に就き教授すること、(略)介殼蟲の性質に就き教授すること、(略)」

以上の事實を以て推察するに伊國に於ける介殼蟲の被害は以上の如くなるしかも想像するに難くない。伊佛は昔て微粒子病に就き吾人に其若き無驗を示したり、然るに「蠶病研究法」の施行と當業者諸君の精勵とにより、本邦は今日伊國は吾人に倒つて再び桑園の運命を発れたが、今日伊國は吾人に倒つて再び桑園の運命を懲害の實例を示めして居る、吾人は須く昔日の微粒子病に對して拂へる注意と覺悟とを以て、之れが驅除に努めざるべからず、若し此際之れを忘るあらば後日臍を噛むも既に遅しである。

凍死と……繁殖

介殼蟲は冬期嚴寒の爲め凍死するものも少くない、即ち去四十年東京府下西ケ原に於て其死亡率を調査したことがあるが、往々過半に達し平均三割餘に當つた、斯の如く介殼蟲は冬期凍死するの他、ヒメカタントウムシの食害と殺菌の害とを受けて死滅するものも少くなく、故に冬期に於ては幾分其繁殖を抑制せらるゝあるが、尚ほ一年三回の繁殖をなすものであるから、春夏の候著しく其數を增加するのである、而して冬期に於ては餌に死滅し、受精した雌が介殼の下に越年して翌春産卵し加害を開始するものである。

ドウして驅除するか

介殼蟲を驅除するには其孵化時即ち未だ背面に介殼を構成せざる間に於て行ふを最も容易なりとするが、同時期には桑の枝葉が繁茂して之れを覆するも又驅除液を撒布するにも甚だ都合が悪い然るに冬期に於ては桑樹は落葉して枝條を露出し枝幹は其發育休止して藥液等に對する抵抗力を增加し介殼蟲の驅除を行ふに最も利用して有力なる方法としては荒刷毛の如き清殺するものを以て枝幹を磨擦し、介殼蟲を殺滅するもよいが、驅除液を使用して殺滅を計れば効果が一層確實で仕事も容易である。

冬期介殼蟲は既に述べたるが如く介殼の下に潜伏して居るから、驅除液でも可なり濃厚な強度のものでなくては其効果がない、而して驅除液の使用法は理屈から云へば果樹等に行ふが如く、噴霧器を以て桑樹全體に撒布するのがよいが、介殼蟲は割合に薬効が若しくは之れに近い枝條の下部に集合して抜息するものであるから、濃厚にして價格の廉ならざる薬液の浪費を防ぐ爲め、寧ろ殺害部に刷毛の類で除抹するが便である。

今噴霧器を以て撒布するとすれば石油乳劑が一番廉價であるが、原液の五倍稀釋液より稀薄では効果が少く、五倍液を用ゆるも全部を殺すことは困難である、約十番目に於ては九割内外の死亡率である、又刷毛を以て石油若くは重油を殺害部に塗抹する場合には、前者に於ては九割内外後者に於ては常に、全部死滅して居る、而して從來驅除液として石乳劑を使用するのは、骨業を損せざる爲めと水を以て稀釋し得るとの利益あるに反し冬期に於ては骨業を損傷する憂なく、又五倍位では稀釋し得ると云ふ利益が割合に少く、加ふるに其製法に相當の熟練を要するものであるから冬期介殼蟲の驅除に對つては餘り賞賛は出來ない。

重油は其殺蟲の効果が完全にして其價格廉なれば、其れを手に入れ易き地方では之れを使用するがよからう、但し重油は濃厚にして結晶し氣味がある爲め、塗抹には稍面倒であつて枝條の内側等には中々塗るのに骨が折れる、且嚴寒の候發育の停止して居る際に使用すれば、發芽

皇太子下賜子爵台覽あらせられたる富士山麓の桑園

桑の介殼蟲被害の實例と其驅除法

に何等の支障もないが、時期を過つて枝條の發育を初めたる後之に除抹すれば屬發芽を害することがある、東京府下西ケ原に於て試驗した成績に依れば、十二月及び二月に於て除抹したものには何等發芽に影響がなかつたが、三月十日に除抹したものに於ては發芽に稍〻影響を及ぼした。

石油は殺蟲の効果重油には及ばぬが、赤蟲實に近く且除抹に際して其表面の性質が延すあるから、其作業に甚だ容易である、又重油の如く發芽を阻害する憂が少い、但し石油と雖も芽の發育が初まつて後之に除抹すれば、發芽を侵害するのは勿論で、只其害が重油程激しくないと云ふに止まるのである、即ち三月十日に於ては重油は發芽を害したにも拘らず、石油では害がなかつたのである、若し四月になつて石油を除抹したならば、害があつたかも知れぬ、要するに石油と雖も成るべく嚴寒の候に使用するが宜しいのである。

以上驅除液に對する得失を論じたが、予は使用法の容易に於て危險少く、而かも殺蟲の効果確實に近い石油除抹を冬期に於ける分蟲驅除の適法として勸めたいのである。

近頃分蟲驅除の激烈なる實例を目擊し且伊國に於ける慘害の猛烈なる陽しし其驅除の一層緊急なるを覺えたが爲め、北驅除時期に向はんとしつゝあるに際し、之れが稿を草して當業者諸君の實行を希望する次第である。

製絲の道如何

郡山製絲株式會社社長　波多野鶴吉

近來製絲經營難の聲が斷へず高まつて來たが、之は一體其道が明かでなくて徒らに敗路に彷徨たるが爲めに外ならぬであらう、左れば余は本題に對し論路の一節を引用して之が答案を試み、以て大方諸士の批評を請ひたい思ふのである、即ち其は外ではない、論語の顏淵第十二の中に左の一節がある、

子貢問政子曰足食足兵民信之矣子貢曰必不得已而去於斯二者何先曰去兵子貢曰必不得已而去於斯二者何先曰去食自古皆有死民無信不立

右の問答は孔子の弟子なる子貢が先生に向つて國を治むるには如何にすれば宜しきやとの問を出した處が、孔子が之に答へて曰るるには、食物を不足なきやうにすること兵備を充分にすること人民が擧つて主宰者を信じて其施政方針に倚藉し、毫も離反する處がなかつたならば、國は泰平に治まるものなりとのことであつた、然るに子貢は更に問を續いて曰ふには斯の如く三項とも揃ふたならば結構であるが、若し已むを得ずして此三項を缺くことが出來なんだならば、先づ何ずれを去るべきかとの問を出した、處が孔子が之に答へて曰はるゝには兵備を去るべしと、そこで子貢は又更に問を續いて曰ふには、若し已むを得ずして此二項を缺くことが出來なんだならば、先づ何ずれを去るべきかとの問を出した處が孔子が之に答へて曰はるゝには食物を去るべし、元來人間は食物がなくては一日も生活は出來ぬものである、けれども古より誰れでも一度は死ぬるものである、故に食物が缺乏して來て死ぬるのは已むを得ぬ譯で諦めることも出來るが主宰者に對し國民一般の信賴心が缺けては、國家は一日も存立することの出來るものにあらずとの結論を與へられたのである、此意味を以て余は製絲の道如何との問題に對し左の如く答へんとするのである、即ち、忠實なる資本と、善良なる繭と、優秀なる職工と、善良なる繭の智識と職工に富み天下の製絲家として唯ちずとの自覺（自擔にあらず）を有し、社會からも職工からも十二分の信用を得たる經營者其人があつたならば製絲業は慥かに成功の出來るものである、然るに若し已むを得ずして斯の三項を缺くことの出來なんだならば、先づ何を去るべきかと云へば資本を去るべしである、何となれば資本は何處からでも配達の得るものである、又若し已むを得ずして殘る二項を缺くことが出來なんだならば先づ何を去るべきかと云へば繭を去るべしである、何となれば繭は何處からでも輸入することの出來るものであるから、

新潟縣蚕業試驗場二階會議室に於て會員に會評品三種蠶及繭を出品した時の實驗

資本なんだならば、先づ何ずれを去るべきかとの問を出した處が孔子が之に答へて曰はるゝには食物を去るべし、元來人間は食物がなくては一日も生活は出來ぬものである、けれども古より誰れでも一度は死ぬるものである、故に食物が缺乏して來て死ぬるのは已むを得ぬ譯で諦めることも出來るが主宰者に對し國民一般の信賴心が缺けては、國家は一日も存立することの出來るものにあらずとの結論を與へられたのである、此意味を以て余は製絲の道如何との問題に對し左の如く答へんとするのである、即ち、忠實なる資本と、善良なる繭と、優秀なる職工と、善良なる繭の智識と職工に富み天下の製絲家として唯ちずとの自覺（自擔にあらず）を有し、社會からも職工からも十二分の信用を得たる經營者其人があつたならば製絲業は慥かに成功の出來るものである、然るに若し已むを得ずして斯の三項を缺くことの出來なんだならば、先づ何を去るべきかと云へば資本を去るべしである、何となれば資本は何處からでも配達の得るものである、又若し已むを得ずして殘る二項を缺くことが出來なんだならば先づ何を去るべきかと云へば繭を去るべしである、何となれば繭は何處からでも輸入することの出來るものであるから、

忠實なる職工の上に適當なる經營者其人があつたならば、一株の桑樹のなき土地にも桑園は出來る、第二に開墾なるものであるが、忠實なる職工の上に適當なる經營者其人を缺きては、一時何程豐かなる資本を備へて居つても、又如何程善良なる繭があつても、其人を得ざるが爲め、損に損を重ねて遂には破產の已むなきに陷るものである、故に製絲の道は第一が忠實なる職工の上に適當なる經營者其人を得ること、第二は善良なる繭を得ること、第三は豐かなる資本を備へることである、然るに多くの製絲金業者は、其順序を誤り、或は資本を第一に置き、或は繭を第二に置き、忠實なる職工の上に適當なる經營者其人を得ることを疎かにし、左れば善く此道を明かに悟へて、徒らに敗路に彷徨たるやうにすることが肝要である、尙終りに臨んで製絲家其人たるの人格を紹介して此稿を結ばんと思ふのであるが、抑も製絲家其人としては如何なる人格を要するかと曰へば、蓋し至誠の人に外ならぬのであ

ろうと思ふ、然るに世間には往々至誠を誤解するものが多き爲め、此に少しく辯明して置く必要があると思ふ、或るものは愚直方正を以て至誠とし、或るものは小慶曲琢を以て至誠とし、或るものは言必ず果、徑ち然りとして小人なるかなと云へるが如きも亦至誠となし、未だ高潔美麗、廣大光明、清明、上天を抱き下地を包み内自ら安く外人を愛し妙用無礙、神と倍に働く、至誠を解するものが少ない、此至誠を以て神を愛し、此至誠を以て人を愛し、此至誠を以て義を行ひ、初めて善果を結ぶであらう、是れ眞の至誠である、而して製糸家たるの人格は富に此れ至誠を基礎として信仰と希望と愛業との心は富きものならんことを要する然るに今日我邦蠶絲業の一大發展を期するの時に際し、善く斯の如き人格を有する製糸家果して幾人ありや、我同業者幷に後進者は宜しく猛省して修養に努め、以て其本分を盡くさんことを望むのである。

乾燥の方法及其原理（前承）

農商務省蠶業講習所技手　小松豐作

吸氣口は排氣口よりも小さくしたのが良いか又は大きくした方が良いか

吸氣口の無い乾燥器にどんなに大きな排氣筒を附けたところで換氣の行はれる理由がなく、又排氣口の無い乾燥器にどんなに大きな吸氣口を附けたところで是れ又換氣作用の行はれる理由がない、して見ると排氣筒の大さとは或る均合が必要であるらしく見える、從て題目に掲げた様な問題が起る。

吸氣口の大小は換氣力を消長する力が尠い

排氣の速度が定まつて居り又排氣筒の高さが定まつて居るならば、乾燥室の排氣力は排氣筒の切斷面積に比例して排氣力が消長するかと云ふに、決してさうは行かない、吸氣筒の切斷面積が一平方尺あるのに、吸氣筒の切斷面積が其半分即ち二分の一平方尺としたならば、其排氣力は吸氣及排氣筒の變方切斷面積等しき場合の半分になるかと云ふに、切斷面積の二倍になつたからと云ふても、排氣筒の切斷面積が二倍になると云ふ樣な事もない、なぜなれば吸氣口から吸入される空氣の量は排氣されるだけを補へば良いので、吸氣口が多少小さいと云ふことろで遮へて行く空氣の速度は或る程度迄増す事が出來る、又吸氣口が大きければ這入つて行く空氣の速度が減ずる事である、要するに乾燥室の換氣量を支配する主働機は排氣筒にあるので、吸氣口の大小は、極端なる場合を除くの外換氣力を消長する力は尠いと云ふて宜敷いけれども、然し

吸氣口が小さ過ぎると弊害がある

排氣筒の割合に吸氣口が小さ過ぎると、吸氣口を通過する空氣の速度が増すと云ふものゝ、吸氣口の周圍にも摩擦が伴ふから速度にも増し得る一定の限度があり、よしもし排氣を補ふに足るとしたところで給氣は排氣を補ふに甚だ忙しい譯である、するとして室内の氣壓が多少稀薄になり易い、從て吸氣口室の周圍の間隙等から冷風が這入り込んで徒らに乾燥室内の温度を低くする恐れがある、乾燥室へ這入つて行く空氣は必ず發熱室を通過させる事は燃料の節約を計る上に於ても傳熱器を保存する上に於ても、是非とも必要なる事である、吸氣口は寧ろ排氣口よりも少しく大きな割合にして故障なく給氣の出來る樣にした方がよい。

吸氣口は何處に附けるが最も良いか

吸氣口から這入つて來る空氣は傳熱裝置に觸れて熱空氣となすべきものであるから、吸氣口も其目的に適ふべき位置に附けねばならない、火熱乾燥器であるならば尤も高熱を發する可き火爐の周圍にして空氣に觸れしむる事は尤も必要なる事である、なぜなれば傳熱量は傳熱面と空氣との温度の差に比例して増大するのであるから、吸入する空氣を通過させるのは、傳熱の効率を増すのみでなく、此部分の熱を奪ふ氣流が無かつたならば、徒らに火爐の周圍を、赤熱して之を損傷する事を免れない。

ツマラヌ誤解から損をして居る實例を見た

前年地方に出張したとき、某農家の乞ひに應じて其家の乾燥器を建設して見た、其時主人公の云ふに『自分のところの乾燥器は最も損傷するのは火爐である、殆んど年々取換へねば使用に堪へないけれども、ドウか丈夫に火爐を作る工夫はあるまいか』との問ひであつた、私は其損傷した火爐を見せて貰つた、ところが之れは非常な高熱によつて殆んど溶解し點に達し變形し損傷するものと見たから、直ちに乾燥器の吸氣裝置に注目した、ところがその筈である、吸氣口に蓋をして結束して張りがしてあるから何故にこんな事をするのであるかと聞いて見ると、こんな處から冷風を入れて發熱室を冷却すると、燃料が損で室が冷へて乾燥に時間がかゝると思ふたとの事であつた、よつて、熟々其不合理である事、火爐の損傷する訳はなを説明した、ところが『なる程理屈を聞いて見れば御尤もである』と感心して居つた、其外各地に於て吸氣口を無考へに附けてあるのが尠くない。

汽熱乾燥器の場合の吸氣裝置、各地の乾燥器も其點に注意したものが尠い

汽熱乾燥器にあつては蒸汽管を多く使用し、廣き傳熱面によつて空氣を熱するのであるから、此場合には火熱式のときの如く、特に高熱を受くる可き部分とはないから、傳熱管の全部になる可く平等に空氣の觸れる樣に吸氣裝置をするのが

良いのである、蒸汽管を多數使用しある割合に、室の温度の登らないのは多くは只單に一部分から吸氣し、傳熱管を有効に働かせない爲めであると思ふ。

一つの考案が有る

火力乾燥器にありては火室中に旋風羽根を裝置し、水汽熱式にあつては傳熱管の下もしくは間に、旋風羽根を裝置して空氣を反復傳熱面に觸れさせたならば、燃料の經濟を計る事が出來るのみならず、火力式にあつては火爐を損傷せしめず、汽熱式にあつては蒸汽管の傳熱力を大に增進する事が出來る事と思ふから近日實地調査をする積りである。

熱とは何か熱源は何

熱と云ふものは御存知の通り色もなければ臭もない、勿論形もなく重さもない、吾々は感覺で知る事の出來る至極奇々妙々のものである、物理學者は物體の分子の振動如何によつて、冷熱の差を生ずると云ふて居るが、それは如何のものであるか見る事が出來ないから判らんが、さて此熱と云ふものは此世の中に色々の現象をなすなるもので、乾燥と云ふ働きも此熱が原因としての現象である事は申すまでもないよつて乾燥の原理を說くには此熱と云ふものについて、少しく吟味する必要があると思ふ。

さて熱の源となるものは何であるかと云ふに、大體は勿論地球上に熱を與へる熱源の內壹番大きなものであるが、其外熱を發するものは廣く物質と云ふ樣な化學的の作用もある。燃料の燃燒によつて發する熱は重に燃料中の炭素の如き元子と、空氣中の酸素等が化合して生ずる際に發する熱源である。

火熱裝置より發する熱と汽熱裝置より發する熱と、熱に違ひが有るが如く考ふるは誤つてをる。

凡そ熱源の何であるのを問はず同じ量の熱が同じもの同じ狀態に働いたならば其働きに於て異同はない、火熱裝置より發する熱と汽熱裝置より發する熱と、熱の者に違いがあるが如く考へて居る人が有るが、之れは誤つて居る、火熱裝置の場合は燃料の燃燒によつて發する熱を以て直ちに乾燥に使用する可き空氣を熱する裝置であつて、汽熱裝置の場合は、鐵の如きものを使つて燃料の燃燒によつて發する熱を一度水に吸收せしめ、之れを水蒸汽として之れを發熱室に導き熱を放出させて乾燥用空氣を熱するのであるから、前者と後者と異なるところは、後者は只熱の媒介者として水を使用する迄の事である、後者は、水と云ふ媒介物を經過する爲めに、其熱は水と云ふ媒介物を經過する爲めに、其性質が變化するものではない、其働きが強くもならなければ弱くもならない、矢張同量の熱は火熱であらうと、汽熱であらうと、又は太陽熱であらうと、其他何等の熱源より取らうと同じ働きをさせる事が出來るのである、火熱裝置より發する熱は乾き居るが如く、汽熱裝置より發する熱は濕れるが如く考へて居るのも大なる誤りである、猶火熱乾燥器と汽熱乾燥器の得失に付ては順を追ふて述べやう。(未完)

第二回品評會に於ける埼玉縣農事試驗場出陳品

熱裝置の場合は燃料の燃燒によつて發する熱を以て直ちに乾燥に使用する可き空氣を熱する裝置であつて、汽熱裝置の場合は、鐵の如きものを使つて燃料の燃燒によつて發する熱を一度水に吸收せしめ、之れを水蒸汽として之れを發熱室に導き熱を放出させて乾燥用空氣を熱するのであるから、前者と後者と異なるところは、後者は只熱の媒介者として水を使用する迄の事である、後者は、水と云ふ媒介物を經過する爲めに、其性質が變化するものではない、其働きが強くもならなければ弱くもならない、矢張同量の熱は火熱であらうと、汽熱であらうと、又は太陽熱であらうと、其他何等の熱源より取らうと同じ働きをさせる事が出來るのである、火熱裝置より發する熱は乾き居るが如く、汽熱裝置より發する熱は濕れるが如く考へて居るのも大なる誤りである、猶火熱乾燥器と汽熱乾燥器の得失に付ては順を追ふて述べやう。(未完)

閑居秋夕　尾島雅門

一人すむ庵の秋の夕こそ
物のさびしさ限りなりけり

甲州流の桑園整理法

特別會員　早川文太郎

蠶業經營の上に於て、大なる關係を有するものは桑園である、少なくとも桑園はあらゆる蠶業問題中の最大なる一である、蓋し桑園の良否は蠶種蠶繭の良否に關係し、病害の多少と契合し、又收獲の多少繭の長短等によりて經營上の損益に大關係を有する、左れば桑園をして善良なるものとなすは一面に於て蠶業の改良であると言はざるを得ない、余が今茲に際べんとす欲する桑園整理法は、單に其名の示す如く桑樹栽培上の一技術に過ないのであるが、深く思ひを廻らして見れば、此一技術は決して閑却すべき問題ではないことが判る、即ち此桑園の整理は、一桑葉の繁否、二桑肉の熟否、三蚕の多少、四桑病の輕重等に直接關係することであるから、又以て桑樹栽培上一重大なる業務であると言ふべきである、既に桑園整理法の良否と蠶業との關係は右の如し

とすれば、甲州流の桑園整理法を問ふは、多くの蠶業問題を解決するに、遠からぬ神益を與ふるものと信ずるのである。

一、甲州東部の桑園整理法

甲州蠶業の本場たる東部一帶即ち東八代郡及東山梨郡に、一般行はれて居る桑園は殆んど根刈仕立ての桑株を刈取るのに、多少世間に行はれて居るものと異なる點がある。即ち世間では蠶が二飼頃より稍條全部を刈取り、即ち株直しと稱して其切株を埋へ且つ直すものであるが、我甲州に於ては、冬季より春一二月頃にかけて株根に出て居る毛の如き者を取去り、成る可く養分を強健なる稍條に注ぎ、無益に消耗せざらしめ、次で四月頃發芽すれば其芽を蠶に與へ二飼三飼となる頃には、一株に最も立派な稍條が五六本位出て居るのである。此方法は久しき以前より行はれて居るのであるが、其起原を知らない位である。而して此刈取方法は一部有志者間にのみ行はれて居るのかと云ふに決して然らず、東部一帶知何なる養蠶家も行ふて居るのである。之を見ると、其起原は頗る古いことが判ると同時に其利益をも認めて居ると言はねばならぬ、余は無論此方法を取る一人であるが、又此刈方法に大なる利益あるを認める一人であるが、此方法を採る者は殆んど見ず、常に遺憾に思ふことであるから、其利益を挙げて此方法を奬勵したいと思ふのである。

二、桑葉は繁茂す

發芽前に其毛の如き四五寸乃至一尺位の稍條を取る時は、地中の養分は殘餘の比較的強健なる稍條にのみ吸收せらるゝことになるから、其利益は少なくなくして、扨て之を行ふことの勞力如何と云ふに、之は多少手數の掛ることであるけれども、比較的閑散な時季に之を爲し得らるゝことであるから、大した費用が掛ると云ふ譯でも無い、それから蠶飼と共に小さき稍條を刈取って行くのであるから、稍條を念、小數の稍條に集注する、而して此幾して行く處の稍條こそは、凡ての稍條中に於て最も發達能力を有するものであるからして、空への伸長は言ふに及ばず、其葉も亦大きくなるのである、左れば其收獲量も多くなることは論なき處で、而して其葉質も亦良好となる可きは疑ふ可からざる處である、之は近來行はれて居る處の密植桑園が、著るしく稍條の伸長が悪いのと、且つ其根元の葉が使用に堪へざるにて、證據立つることが由來る。

三、葉質を善美ならしむ

種類既に善良なら仮、而して肥培其宜しきを得るならば如何なる稍條も善良なる芽を發する處のものも善良である、然れども殆んど無限に發展能力を有する大稍條と或限度に留まる小さき稍條と、此兩者に於て摘葉の時期によりては葉質に大關係がある、即ち前者は遠く遠く良好であるけれども後者は時を經るに從つて、巡化する、然るに上記の刈方を行ふ時は、發伸能力を有することなく、且つ巡化することの速かなる葉芽を最も良好なる時に給與することが出來るから、蠶の發育上に利益あるのみならず、葉質の充實たる桑葉を與へねばならぬ四五齡に、蠶の爲に良いことは言ふ迄もない、又單に葉質の上から言ふても短かき稍條を切去る時は桑園内の風透しが良くなるから、根元の葉より稍に至るまで葉質を善美ならしむる、而且其葉を一斉に熟せしむることであるから之が、直に蠶の結果に影響して其繭は美はしくなり又蠶種家としては其病蠶を減少せしむる效を奏す、桑園は繁茂し葉質は良好となる收穫は多くなる甲州流の刈方も隨分效能の多いものではあるまいか。

四、蚍害は減少す

蚍蟻の性質は陰闇を喜んで風の流通良き處を好まず此は今時の養蠶家に知らぬものはない、我甲州流の刈方は前に言ふ通りに蚍の巣が丁度卵を產む頃になると、桑園には一株の稍條僅かに七八本乃至五六本しか無いのであるから、風透しの良いことは無論である、從つて風透しの良いことは必然の結論であり、又單に蚍に於ても蚍が來ないのは、斯る桑園に來ないは必然の處である、我甲州東部一帶の如くに蚍に取ては其だ多いと言ふ迄もなく、蚍害の上に於ても此刈方を奬勵しなければならぬが、其蚍害の多い地方に於ては此刈方を採用するのは急務中の一つであらうと信ずる。

瑞玉會支部第二回品評會生糸陳列の光景

五、桑病は殆んど皆無

桑園が繁茂して風透しが巡くなれば色々の病が發生する彼の桑の赤銹病だの綿しらみだの云ふ疾病は、御ら桑園内の風透しが巡い爲に起るものである、從て我甲州流の刈方を行ふ時は、之等の病を稀る恐れはない、殊に根刈桑園に尤も多い處の萎縮病の少ないことは著明なことで從來、我地方には萎縮病が、其だ少なかつたのである、近時學者の研究によれば萎縮病の原因は一時に其稍條を刈取る爲に其救

清及び鹽防法は三本五本と漸次刈取り行くにあると云ふことであるが、我甲州に於ては既に此事は何十百年の昔より行ふて居るので、而して其萎縮病の少なかつたのは、之に原因し居たのであるけれども、學問上の說明を缺いて居たのであるに例令萎縮病に就て、學問上の說明を爲す能はず、又此刈方が萎縮病との關係を知り得なかつたにしても、學者十年の研究によりて、我甲州流の如き刈方を行ふを以て、萎縮を豫防する最良なる方法なりとの結論を得たとすれば、我甲州は知らず〳〵の中に最良なる萎縮病豫防法を實行して居たものと云ふも過言ではない、兎に角我甲州流の刈方を行へば赤蟲病桑しらみ病及び萎縮病を免れ易いことであるから、此點に於ても其効力の偉大なることを認めねばならぬと思ふ、又桑や向此上に蛆害を少なからしめ、葉肉を良好ならしめ、又桑葉を繁茂せしむるに於てをやである。

六、結　論

我甲州流の桑園整理法は、桑樹栽培上極めて簡單なる一技術に過ぎない、然れども其關係する處は前來陳述したる如くに重大であつて見れば、整理上の畧假令耳目を驚かすに足らずとするも、蠶業家諸君の觀過すべからざる一大問題であると思ふ、技術は隊畜に屬するも之を行はざれば役をなさない我甲州に於ては十百年の歷史を有し、多大の利益を得つゝあつたのであが蠶業學術の進歩によりて其理由が明瞭となつたのである、諸君幸に我既に知れりと誇らずして必ず行ふて種々の利益を得られよ。

桑園と綠肥

農學會員
群馬縣農事試驗場技手　菊池助松

近時農業の發達と共に農學殊に肥料學の應用の稍々普及したのは斯業の爲め慶賀すべきことである、然りと雖ども之に伴ふ金肥の需用は愈々多きを加へ、農家經濟上至大の關係を有するやうになつた計りでなく、金肥は比較的有機物の含有少なきものが多いから土性を惡變する傾向のあることは大に警戒すべきことである、故に堆肥製造の奬勵、綠肥栽培の普及は、目下斯界の最大急務たるを信ずるで、當場は數年來桑園に就き之れが試驗調査に着手したが其成蹟の稍々見るべきものがあるから記して參考とせう。

試驗の成蹟には格別の差がない

……得易き種類の選擇が得策

桑園には如何なる綠肥用植物を栽培するのが最も有利であらうかといふことに付き、昔宿、大豆（鬼裸）、蠶豆、豇豆、四種を畦間五尺に栽植せし桑園に、昔宿は九月十日の種子五升宛を畦間に播種し、大豆及豇豆は五月一日、各種一反歩當り昔宿は六月十日、蠶豆は六月二十日、大豆及豇豆は七月十五日に收穫せしに、二ヶ年間の平均反當總收量最も多きは、蠶豆の三百二十三貫八百五十匁であつて、大豆の二百三十貫百十匁、昔宿の二百一貫六百五十匁、豇豆は僅かに六十二貫、五百〇五匁で、最も少かつた、然るに蠶豆は桑上不便が少ない計りでなく所合窒素の割合より見れば大豆の最も有効なる種類が綠肥として最も適當なるやに付き、支那大豆（鬼裸）黑大豆（鬼裸）黑大豆（利根郡）産（〇）の四種を、各種一反當五升宛を四月三日に畦間五尺に栽植し、桑園の中央に、基肥として反當木灰十貫目、過燐酸石灰二十五貫目を施す、播種し、七月十五日に收穫した、三ヶ年間の平均反當總收量の最も多いのは黑大豆の〇〇二匁であつて、鬼裸の二百九十六貫四百四十三匁、刈豆の二百八十七貫五百二十八匁、之に順次大豆の二百七十七貫五百二十八匁、支那大豆の二百七十七貫五百二十八匁、其柔の極めて少いのを以て見れば、其地方に於て最も得易き種類を選擇するを得策とするのである。

埼玉支支部第二回品評會許可光の所陳列

綠肥用大豆と播種期

綠肥用大豆を播種するに際し、其適期を知らんが爲め前記同一樣の桑園に同一の方法を以て、鬼裸大豆反當五升宛を四月三日播、五月十五日播、五月三十日播、六月十日播、六月十五日播、七月十日播、七月十五日に收穫しに、其總收量の最多いのは四月三十日播の三百十五貫二百十八匁であつて、五月十五日播の二百六十八貫七百七十七匁、五月三十日播の百八十八貫六百匁等順次減ずるのを以て見れば、霜害其他の事故なきに於ては可成早播するのが適當である。

播種量と收量

綠肥用大豆の播種量と收量との關係を知らんが爲めに、前記同一樣の桑園に同一の方法を以て、鬼裸大豆を反當五升播と一斗播とに區別して四月三十日に播種し、七月十五日に收穫した、然るに三ヶ年間の平均反當總收量一斗播は三百三十六貫二百二匁であつて、五升播は二百九十貫百八匁、其柔四十六貫〇九十四匁であつて、收量は播種量に正比して居る、故に種類に依り收量に大差なきものとすれば、靜岡黑大豆の如き高價なるものを少量に播種するよりは、寧ろ地方種たる鬼裸の如き廉價なるものを多量に播種するの

緑肥用大豆播種に際し其肥料の異なるに依り其收量に如何なる差異があるであらうかを知らんが爲め、(一)肥料を施さざるもの、(二)反當木灰十二貫目を施すもの、(三)同石灰三貫目を施すもの、(四)遠蚕燐肥六貫目を施すものとに區別し鬼裸種を反當五升宛四月三十日に播種し、七月十五日に收穫した然るに反當總收量の最も多いのは遠蚕區の三百十一貫二百匁であつて、石灰區の二百八十五貫二百匁、木灰區の二百七十九貫二百匁等之れに順次し、無肥料區の二百六十九貫二百匁が最も少かつた。

種類……播種量……價値

之を要するに、桑園緑肥用植物の適否に付き、豌豆は稍々増收があるけれども、冬期植物であるから、冬耕を妨ぐると收穫期の農繁なると所含窒素割合に少き等の關係により大豆に一着を輸せざるを得ない、而して大豆の種類に至ては可及的其地方に於て、最も得易く且つ小粒にして、繁茂の宜ししき種類を選ぶが宜しい。

播種量は風土及桑園畦間の廣狹、粒の大小等に關係があるけれども、四升乃至一斗を適量とし、其時期は霜害其他の事故なき限りは、可成的早く播き貴び、晩くも五月上旬迄に播種するを可とする。之れ桑樹の再發芽伸長上鋤込みの時期を遲延することが出來ないからである。

緑肥用大豆の價値は、桑園一反歩五升を播種して總收量三百貫を得たとすれば、其所含窒素量一貫六百匁位を得らるゝか、若し大豆粕の二十貫目若くは人糞尿の二百貫匁以上に相當する成分を得らるゝ割合であるから減に有利な肥料である。

經濟上輕視すべからざる要件

最近の調査に依れば本邦桑園反別は約四十萬町歩を算するが、内八、萬町歩は見積反別とするも、優る三十二萬町歩に緑肥用大豆を栽培すれば、實に五百十二萬貫の窒素を得べく、今窒素一貫目の肥料の價を三圓と見積る時は、千五百三十六萬圓の巨額に達するのである、桑園に緑肥用大豆を栽培する時は、以上の如く多大の窒素成分及び多大の有機物を供給して土地の理化學的性狀を改善すること莫大なるものなれば、緑肥用植物栽培の普及は肥料經濟上輕視すべからざる要件である。

農家若し經濟の現況に鑑み、此等試驗成績を發表し、聊か斯界に貢献するあらば幸甚とするのである。

屹度當る蠶の見方

中谷桑實

先づ題目の講釋

本題に入るに先つて、一寸題目の講釋をして置く、斯う題下だしに「屹度當る」と布令出すと蠶が屹度當るのだかと早合點する人もあらうが、之は然らじやない、勿論此見方を言く行つて誤だなかつたなら『屹度當る』ことと請合だが、茲に屹度當るといふのは、蠶兒の強弱鑑定が屹度當るといふことで即ち此方法に據つて睨んだら恐らくはづれっこなしと云ふので、之を今樣風の長たらしい題目に直したら「余が多年の實驗より得たる蠶兒の強弱鑑定法」とでも云ふのであらう。題目の說明が御合點になつたら直ちに本題に入るが、世に

蠶兒の強弱判斷は必要てあらう乎

と云へば無論僕は必要だと答へる、自分が飼つて居る蠶兒の強弱を鑑定して、其樂つるべきは樂つて養ふべきは養つて向ふ所を定めるのは勿論必要のことに和違ないが、僕に取つては、よし思ふのは、只樂てるとか、飼ふとか云ふ場合の鑑定に過ぎなくつて、平生日月の蠶の見方である、即ち最早給桑をせねばならぬとか、空氣を入れ換へて遣らねばなるまいとか云ふ毎日の蠶の鑑定……所謂其日の見方である、そこで誰れでもこの見方を研究して蠶兒の好む所を洞察して、氣に入る樣にして遣つたなら、蠶兒は當然の報酬として結構な繭を澤山結つて與れるので、彼等は決して故意に世を敢果なんだりすねたりして徒死するもんだやない、飼育人たる吾々に彼等の好む所を知る明がなかつたり、望んで居る所を察することが出來なんだりして、彼等が徒死することを餘儀なくせしむるのだ。

多き養蠶家の中には、蠶の好む所を識つて居つて、あゝすると良いとか斯うすると好いとかちやんと承知しながら、骨身を惜んで實行せないものもある、這麼のはいつも蠶の理屈ばかりこねて居つて、終生その利益に浴することの出來ぬ愚生に骨身を惜まずあくせくと働いては居るが、其爲る業が何時もトンチンカンで、少しも好む所と合致しないため、無惨や毎年〳〵失敗の悲運に遭遇する人々だ、這麼のは實に同情に堪えない次第で、此種の人々は僕の所謂『屹度當る蠶の見方』を實行して見て貰いたい。

從來の所謂鑑定法

從來から蠶種にも蠶兒にも鑑定法といふものは用いて廻つて居る、若し之がなかつたら所謂養蠶の講師だとか教師だとかい人手合は乾上りて了ふ、蠶より先に人間の蔬物が出來る勘定だが、有難い我々は有外貴いものである、そこでそれ等の鑑定法といふ奴を見ると、何れも千篇一律で、先づ蠶種の肉眼鑑定なるもの、卵粒の霜一、卵着力の强弱、蟻附の工合、それから色澤位で、殊にその色澤の辨明などは何時もかも春蠶なら藤色に桔梗色、それも桑園の土質と桑樹の齡に依つて異るからてなことを云うて居るし、蠶兒の鑑定なら眠起の齊一に有く、桑の食送の善い、皮膚の色艶の青白いとか薄桃色とか云うて居るが、之が實蠶に書いたり、口で喋つたりするのはホンの形式的の上ッ面の事ばかりで、實物に就いて說明するやうな微妙な所とその反傳とか、骨とか云ふものは何うしても体へることの出來ないもんで、そんなことは如何に巧みに說いても如何に明細に書いても所謂百聞は一見

に如かずと、書に描いた美人ほどの價値もないものである、と、僕が說明しやうとするのは、其等の形式的色艶や舉動やに對する新味目を殖やすのではない。僕は今日の養蠶家諸君は既に業に從來の所謂鑑定法なるものは充分御承知のことゝ心得て以下の御話をするのである。然らばその

乾度當る見方とは如何

と云ふと、何のことはない形式は至極簡單で、一向有難味の薄いやうな感じがするがこれが形式に於ては如何にも簡單至極であるけれども、其實精神的作用、と云ふとチト大袈裟だが、しかし其一瞬時に於ける精神の働きを要することは實に非常で、ポカンとして居つて行つたつて判かるもんでない、餘りに緻密が立深すぎると内容の見方がするから此所ら辺に於て、一向に分からぬ、先づ養蠶教師の諸君から自分が受持つて居る戸なり二十戸なりの郷廻中、甲の家を濟まして乙の家へ往つたとする、そこで自身の頭へは何等の妄想も止めぬ樣に野外の清らかな空氣で綺麗に頭を洗し、家の中へ這入つたら一直線に蠶のある所へ進んで行つて、手早く二三枚の箔を引出し

蚕室支度會第二回品評品蚕會場の到陳品蚕の光景

普通の見方で、確信が立たぬ、自分はヒョットハテ斯うだと思つても主人が私は斯う思ふと一人決定的に云ふ、それは世間でも出ると、或は然うかなあと方針が鈍ぶる、結果有耶無耶の折中說に所理して了ふものである、それで初め其家へ飛び込んだら、一切家の主人などが悠から割出した說明を聞いて頭を壞さぬ樣に一直線に蠶室に入つて蠶室内の臭氣を嗅ぐ、目で上中下二枚の箔を引出して見るそして判斷すると、「ハ、アヤ」かう成る程然りと云ふ斷定がつく、それが即ち其蠶兒に對する見方の極致なので、決して之れを後で動かしては可かぬ、又餘りに長く見て居ると色々な迷ひや疑ひが出て來て可かぬ、所謂思慮度を過ごせば智識亂るると云ふ奴で、結局何うすればよいか、判斷がつかなくなる。

僕なども幾多の經驗のあることだが、養蠶教師などをして居る人は、其態度の慎重と云ふことが、餘程信用に關係のあることで、人のことを思つて居ても、蠶兒に向つた時には如何にも蠶其面目に、沈着神つて只見斯う見やつて居ると、彼の先生は如何にも蠶兒の見方が忠實だ熱心だと云ふ評判で、中には大事な娘を嫁に遣らうなど、云ふ信仰家も現れて來る、兎角世の中の商賣には一つの必要な形式として必要があるとすれば、これらは養蠶教師などの必要な形式で強ひるするにも及ぶまいが、併し如何なる形式を用ふるにしても以上の見方の眞理を失つては可かぬ、僕の此話は養蠶教師などの經驗のある人は、必ず眞理として贊成するだらうと、確信して居る。

以上は單に養蠶教師の諸君に就いて其多くを語つてあるが、普通蠶家の方と雖も決してこれと異る所はないのである、即ち諸君が桑畑へでも桑摘みに行つて、野外の清景に浴して鼻の穴を清らかにして、一寸蠶室へ入り極めて虚心平氣で蠶兒を見よ、そこで頭へ浮んだ考へ……即ち給桑の時刻が迫つて居るとか、未だ存外食慾がついて居ないとか云ふ考へを狂はさぬやうに取つて置いて、後から周圍の事情で湧いて來る雑念に負けぬやうにすればよい、之れは其人に簡單なやうだが僕が多年の經驗上有効と確信した即ち「乾度當る蠶の鑑定法」である。

醫師の診察と蠶兒の健康診斷法

最後に一言疑ひを抱く人の爲に此題目を掲げて置く、成るほど即座チョッカなことで蠶兒の健否が解かるものかと云ふ人もあるだらう、併し然う云ふ疑を抱く人は、徒に死した形式に依つて蠶兒を判斷しやうとする人で、活きた見方を知らぬ人である、人間の精神の働きといふものは即座然長起なものでなくない、若し僕の言つた時間内に何等の成績をもせぬやうなら、それは考察力を缺いた鑑頭で、何をさしても恐ろく駄目であらう、又或る人は斯ういふであらう、博士とか學士とか幾多の經驗のある醫者でも、外國人や家人に就て本人平素の行狀嗜好から一切を聞いてかゝつて、その上寫かしたり、起こしたり、打いて診たり覆を分析したり種々なことをやる、それですら何病名の分らぬ樣なのは少くない、されば蠶兒を診察するんだつて、看護人とも云ふべき飼育人に就いて判斷を下すが確であらうと、是は一應尤もらしい說であるが、第一神經の非常に發達した殆ど精神の爲に生きて居るといふ人間と、何の考察力もない蟲類など比較にならぬ程の大なる誤である。

今日の醫師が種々の形式を用ひたり、用書を用ひたりする

は、兎角神經の過敏な病家の信仰をさましむる一の手段で前の養蠶教師の勿體をつけるのと擬ぶところはない、相手の人間が神經病の人間丈に勿體のつけ方と先生が先年某大醫に會つたとき、談偶にこのことに及ぶと先生が先年某大醫に會つたとき、談偶にこのことに及ぶと先生曰て言つたことがある曰く、「無論君のその蠶の診方と同じことで、一目見れば大概死ぬか生きるか判るさ、けれ共此方も商買だし、後の評判と云ふこともあるから下らぬ形式を用ひて、素人共に安心を與へぬと第一藥劑がタント取れぬからねと呵々大笑された、此言の如きは實に眞理で——初め診て病名の判らぬやうなやつは最後まで本當のことは分らぬさうである、て良い位な氣休めを言つて病家へ安心させて置くので、その中には肩書などが藥になつてよくなることもある。是は人間の病とは神經が手傳ひをするからである。

これほど七くどく說明したら最早此上に云々する人はなからう、僕の筆力が鈍くて即ち言はうと思つて居る丈書けぬから甚だ遺憾だが、腹にある人なら臆氣ながら僕の言はふと思ふ所が了解できるだらうと思ふからこれで筆を擱くことにする。

風穴貯藏蠶種に死卵を生ずる原因

特別會員　渡邊義武

明治三十九年に於て長野縣北安曇郡荒山の風穴に貯藏せられし黑種蠶種にして翌四十年七月中に出穴せし分は、何れも異狀なく發生せしも、同八月中旬以後に出穴せられし蠶種中に約三分の一死卵を生じた。

荒山風穴は八月に至つても風穴内の溫度三十九度乃至四十一度にして其溫度は常に湿球と乾球との差一度を示し、充分蠶種の貯藏に適する風穴で貯藏箱の如きも亦相當に設備せられてある、而して此風穴の蠶種貯藏に適當なりと云ふは長野縣に於て風穴の之に精通せりと稱せらるゝ、松本測候所長柳澤巖氏の親く臨檢觀測をして之を認めたりと云ふ確かなる裏書を有せるものである。

然るに前記八月中に出穴せし數十枚の蠶種に死卵を生じたるは抑も何に原因するか　予等前に此風穴の良好なることを證明せし者は之を探究するの責任を有して居るのである。

茲に予は北安曇蠶病豫防事務所長林盛三郎氏と共に、此死卵探究に手を出したのである。

〈或る風穴業者は曰く、此の風穴の風は荒し、故に此の黑はぜ〈死卵〉を生じたのであると、予所爲らく此「アラシ」と云ふ言は如何なる意味なるや、眞として捕捉すべきものではない「アラシ」と云ふことを解剖して之を風穴業者に質した、此「アラシ」と云ふことは風穴内の空氣中に有毒物を混ずると云ふ意味かと問ふに、左に非ずと答へて、然らば乾燥に失するか、湿潤に失するか、溫度に異變化を來せしものかと問ふに曾然たらずと答へた、只從來多年の經驗によりて此風穴の風の荒きことを感するなりと」の答へは頗る漠たるものであつた次に予と林氏共に共になしたる研究を簡短に記するとせう。

風穴内の空氣に何等かの異變化を來したるに原因せりとせば、蠶種全面に害を受くべき筈なるに、蠶卵紙面所現に線の自然に產卵せし類に從ふて生れたる死卵なれば、此原因は風穴の良否に因るにあらずして、產卵にあるものとせねばならぬ。

故に此蠶卵の强弱如何を知らうと思つたが此の蠶種は當時既に無害の部分は無論に發生せし後であつて、而して死卵とは既に毛を生ずる迄發育して後斃死せしものである。

此死卵を發檢せしに、何れも多くの微粒子毒を有して居つた、即ち微粒子毒に侵されたる蠶種は之を風穴に貯藏するときは死卵を生ずる場合あることを確めたのである、予は今攝筆に臨み、蠶界先覺の士に寄語したい、今や蠶業の擴張に伴ひ風穴の利用も念々多大となり、風穴利用の良否は蠶業に大なる影響を及ぼすは必然の數である、然るに風穴蠶種貯藏を業とする人々の内には、蠶藥の素養なく、產卵の生理衛生を解せず、單に從來の漠たる經驗によりて業を執る處の人も多い、是等の人々に必要なる知識を與ふる爲めに、多く風穴業者は時々風穴蠶種貯藏講習會又は研究會を開き、蠶種貯藏上の改良を計らるゝは頗る急務であらう敢て一考を煩はしたい。

屑物整理（承前）

本會事務囑託　吉永信

玉繭は如何にして繰絲すべきか

生繭　乾燥せぬ玉繭は解舒は宜しいけれども、繰絲が困難である計りでなく、銀色が多いのであります、併し五升や一斗位の收繭で乾燥器も持たぬと云ふ人では、止むを得ず生繭で製絲せねばなりませぬから、少しく之に就ての八合目玉繭を上げますれば、煮鍋は直徑一尺二寸位のものに八合目玉繭を入れ、百五六十度まで溫度が昇りましたならば一寸水に浸して取り出し、直ぐに其湯の中へ入れ能くまぜて鍋蓋にて押へ二三分間にして止め、其まゝ煮汁にて繰絲するが宜しくあります。

半乾燥　半乾燥の玉繭は工女の技術にも依りますが、通例五合乃至一升の繭を八分乃至十分間水に浸し置き、百八十度位の湯中に入れ能くまぜて、鍋蓋にて押へ湯が若し沸騰しやうとするならば、蓋を取り繭に水のかゝらぬ樣五勺程の水を入れ、試に指頭にて繭を摘んでみるが宜しくあります、若しも其手觸りが滑かであつて糊を付けたやうに何とのふフワリとした心地がしまするならば、即ち繰絲に適するものであります、若し又手觸りが硬く水の葉に觸る樣な心地がして糊氣のないのはマダ繰絲に不適當なのでありますから、水を入れましてのちに又蓋をして先のやうに指頭にて、煮熟の程

度を試みつゝ煮るのであります、乃て蠶繭が煮へましたならば、温度の下らぬ内に毛羽を取り去り煮汁を半分位殘して新しき湯を入れ繰糸するが宜しくあります。

木乾燥 木乾燥の玉繭は十五分間程水に浸し置き、百九十度乃至二百十度位の湯中に入れて能く混ぜて（木乾燥の繭を混ぜぜずには二分間位混ぜぬとよくありませぬ）鍋蓋で押へ働かに湯の沸き來る時、先の方法にて水を入れ、指頭にて摘み、煮熟の程度を試みつゝ二沸三沸と煮くのであります、此際餘り火力を強くしますと直ぐに沸くので、同じく二沸三沸させましても能く煮へぬ事があります、そこで此煮繭の際に蓋で押へて煮すると、煮斑もなく少しく繭が蒸せ加減であるから其繰糸は殊の外容易でありますが、併し若しも不注意にして強く沸かせますと沈み繭となり、繰糸が困難となります、さればとて黙の樣に浮き〳〵しては誠に此繰糸が困難であります、繭を鍋に入れましたならば火加減に充分注意せねばなりませぬが其煮繭の時間は大抵四分乃至十分間位を要します。

ところで如此に注意しましても能く解つて沈繭や浮き〳〵した繭を綜さへすから今茲に其を述ぶることにしませう。

沈繭 繭が沈だ時は少々焚火を致しますか、極く軟かな炭を新に入れて火力を強めますと直ぐに浮き上りますから、其時大急ぎで鍋を取り最も手早く繰糸するのであります、必ず繭が沈だと云つてはなりませぬ、一度揺りますと其繭層は忽ち離れて繰糸用になるものではない、又繭に空氣を吹き込みなどする人もありますが、之れ又黙の樣になつて製糸に適せぬものであります。

浮蠶繭 此繭は一度蓋を覆ふて、高き温度に昇らせ、水に冷して後繰糸するのでありますが、御參考までに申上げて置きたいのは、

蒸滿場 のことであります、同じい湯ではあり乍ら一諭に温度も思ふ樣になり又繰糸も容易で色澤糸質共に良好で有ります、併し養蠶家が各自に之を使用する譯に參らんのは遺憾なことであります。次に、

焚火 は炭火に比較しますと繭が異なるかと思ふ程繰糸易いが、之れも一人や二人なれば釜士を工合よく造り、堅木を細く割り日蔭で能く乾かし置き用ゆれば宜しいですが先一般には、

木炭 を用ひます、併し木炭繰糸は一番困難であまして殊に白炭などの堅い炭になりますと、非常な困難を感じますから軟かなる炭を使用するが宜しくあります。

繰糸法 繭が煮へましたら湯温の下らぬ内に毛羽を殘なく取らねばなりませぬ、玉繭は最優等の外普通優等までは蛹めに能く上層の毛羽を取るのみで終りまして一度も索緒をする事なく、小なる帚にて繰糸するのであります、若しも毛羽が殘て居りますと繰糸中度々切断したり、又大節がずる〳〵と殘て居りますから、繰量を減ずるやうな時間が水くかゝるやうな、繰の品位も落ちるやらで非常の損耗を生ずるものであります、此途中で索緒しますると、毛羽のないものまでが等に付いて大いに繰量を減じますから大の禁物とすることである、併し抄り引きでありますれば一時に毛羽を取るにも及ばんのであります。

繰糸湯は鍋に充分滿し置き、繭により又期節により異なりますが常に火力を強くして湯が減じたならば時々水を入れて繰糸器は湯面より一分乃至一分五厘よりはなれぬ樣にし始終同一の高さに保たねばなりませぬ。

簿引 玉繭は多くは簿引きに致しますが、此簿引の上に集緒器は可成水面に接着せしむるやうに致しますから湯の減ずる事が早くあります、此減じたる湯を補ふには、普通水を以てすることがありますが若しも其湯の温度が低くければ、湯を入るゝのであります。

座繰に仕掛けます手續きは層繭と同一で給は二ひねり位で宜しくありますが、太絲になりますれば、三ひねり乃至四ひねりするのであります、其層繭となる處は、口掛が湯面に接着して居る丈であります、引簿はスダレヤビの穂の元を二寸五分位に切つて造るのであります、之を使用するには水に浸し置き、歯硬き時は一寸煮ねばなりませぬ、斯くして之を使用するには撫づるが如く銑るが如く、静かに繭をよせて繰糸するのであります。

埼玉県農事試験場蚕業部二津會女工品出品會評品

玉繭は二箇の蠶兒が各自思ひ〳〵に絲を吐き造つたのであります、此玉繭は二本揃へて引き出すことはなか〳〵六ケ敷ありますが、一方が解れても他方が切断する場合が多い、其方は他の解るゝに從て大きな結となつて揚るか、又は繰落ちとなるかの二つでありますけれども、集緒器を湯面に近く裝置しますれば切れた絲が直ぐに付て二條同時に解ぐれる場合が多いので、大抵も切断も少なくあります、然るに集緒器が高ければ高い丈け之れに反しますから注意せねばなりませぬ、ソコで玉繭製糸には大切なる四つの要件があります。

一、比較的煮繭を若くする事。

二、繰糸湯を高くする事。

三、繰糸器を湯面に接着せしむる事、四、集緒器を湯面に接着せしむる事これ可あります、此事は必ず御忘れにならぬやう願ひます。

抄り引き 抄り引は優等の夏秋蠶の玉繭か支那玉の優等物で製するのであります、其製糸法は精繭や層繭を製する樣に半抄り又は七歩抄りとなし、繰器に座り母指と食指で繭を摘み、集緒器の下に投込み、同時に緒を摘み、捻の開きたる處にて接緒するのであります、之に就ての注意は集緒器を一歩位として座繰の廻轉を出來得る限り早くするのであります。

す、繭の煮加減は煮引よりも心持ち多く煮るのであります。玉繭は煮加減が最も大切で若過ぎは煮ぎぬ様注意せねば糸が多く又多くの手間を要し絲量が減じます、始めは一寸絲立ちの要いと思ふ位にして繰絲湯は少く白泡の立つ位の中に五匁位の水を時々加へつゝ引くのが一番繰絲し易いのであります。

最太絲 同絲は選出し又は春玉の中以下物で製します、煮繭は細の方より少く若くし、蜀黍の穗を三四本束ねたもので繭をくる〳〵と廻しつゝ製しますが、集緒器は二分から二分五厘位湯面よりはなすのが宜しくあります、之れは一本で再度捻りを入れず半練位として織物の緯に使用致しますので能く〳〵熟練を要します、又實地に就て習はねば六ヶ敷と思ひます。

それから又注意して置きます春でも秋でも生では糸が多いが乾燥して直ぐ製すると、之れ又糸が多いので、燥後一週位を經て製するのが宜しい、又繭の質により糸が格別多いのは出來得る丈後に廻すと次第に糸が減じます。

繰絲中の心得 （一）繰絲湯の温度は出來得る限り同一にせねばなりませぬ故に始め炭を入れる時能く注意して一鍋繰り終るまでは充分に保つ樣に見計ひ、火が強過ぎる時はシチリンなれば下の空氣の入る口を閉ぢ、又灰入なれば灰を覆ひ置き又繭を煮る時分は繰絲鍋に半分位水を入れかけ置き、火をひだにせね樣注意せねばなりませぬ、（二）鍋車に絲が巻付又は針がゆがんで廻轉が緩くなつたり、又は止まつたりする樣な時は直ぐに絲を切り取り、又針を眞直ぐにせねばなりませぬ

蛾の廻轉が悪いと絲條が平たくなり、切斷がおいから常に急轉する樣に致せねばなりません、（三）綾振りは常に氣を付ねば糸が抜けて綾振りを折つたり、又は綾を外づして棒巻になる事があります從注意せねばなりませぬ、（四）絲が切斷しました時は小枠を反對の方に極く〳〵輕くなでゝ、絲の切れ端を（糸）すれば出ない時は一番上の絲を摘み綾をたどり段々と上の絲を摘みかく反對の方に廻しまして見つかります、必ず絲枠を横になでゝはなりませぬ横に撫でると絲が捻れ合ひ揚返しの時、切斷が多くて困難致します、（五）一日の内晝間は煮た繭の二三合殘つて居る時、後の繭を煮き先の繭と煮せ〳〵に製し夕方仕事を終る時は少しも繭の殘らぬ樣につめて置きませぬと玉繭は明けの日となつては非常に繭が出て製絲用となりませぬ、但し冬の日は少しは繭も少ないので水につけて冷して置きます、（六）一枠絲が出來ますと上の方から付の小なるものを下げ、また枕をさして枠の落ちぬ樣に上に出る丈あれば絲が舌れたり、切れたり致しますから、必ず吊下げて置くが宜しくあります、（七）新しく煮た繭は始めに能くほやを取り、半分出して水に浸し置き先の殘り繭とせ〳〵に繰絲せねば絲が齊一に出來ませぬ。

開墾地の蠶業（承前）

重富三男三

繭で二千二百兩……絲にすれば二千五百兩

尤い秋本書は金が殘つて困るシロートの我家が云たら（ヘ……イヤモ同じこと）貧乏で……、（ヘ……ヤ）天保分氏（今八十歳）は孫が三人しか仕事がなかつたが、今は百三十人からになつて賑かになりました（六百町歩の開墾地で）ハヽ、アと向肥の愛嬌ある顔の眼を細くした。

此の笑顔で懐かさが知れるではないか、匂ち左の通りである

一金二千二百〇五圓

秋の三期通じて六百三十貫の收穫に對する代金（桑七町歩分）

此の六百三十貫の繭を製絲した場合には平均一貫に就き八十目繰るものとすれば三百十五斤の生絲を得られる、仍て百九百三十圓と見積り百斤に對する工賃を百三十圓（少し工賃が安いが知れ以ども屑物やなどがあるから乾燥や其他の費用を入れてもカナ〳〵あらう）とすれば二千五百二十圓となる

仍て繭で賣った場合には、一反當り三十一圓五十錢となり一反場合には三十六圓となるのである、而して其差の四圓五十錢の七十倍（七町歩分）即ち三百十五圓は製絲に對する企業費、其他器物の損料などであるが大凡は懐に入るものである……が尚、

懐が判り易い爲に

繭で賣る場合として諸入費を差引いて見たらドーか、夫れには、吾が蠶の算盤よりも御手近の千葉縣廳で調査したものがあるから、夫れに據るが確である。

桑園一反歩に要する支出（既設のものとす）

一金五圓四十錢

人夫男十二人（一人四十五錢宛）耕耘、施肥、株直し、結束、病蟲害驅除等

一金八圓五十錢

肥料代（大豆粕六枚、堆肥二百貫）

一金三十錢

農具損料二十錢（蠶薬種代十錢）

合計十四圓二十五錢

であるから秋本君は七町歩の畑に九百九十圓五十錢を投じて居る割合となるが、若し小作とすれば之に小作料三圓として二百十圓を、四圓として二百八十圓を加算せねばならぬことになるが、既設の桑園であれば五圓位とのことであるから、三百五十圓を加算するとして千三百四十七圓五十錢を要する割合である、其所で一反歩からの收業を考へねばならぬが、前者と同じく千葉縣廳の調査に依れば

春八駄（此貫數二百八十八貫で修と新稍とを分離し修四分五厘、新八分五厘）得らるゝものとすれば百四十八貫四百秋は正業の六十貫を收穫し得らるゝから、合計二百八貫四百目の收業が一ヶ年を通じてあることになるから七町歩では一萬四千五百八十八貫の收業がなければならぬ、處で

秋本君は七町歩で一ケ年を通じて六百三十貫しか繭の取入れをせぬ、イク原中で蠶を飼ふことが下手であるからと云ふても、繭一貫目取るに桑十八貫と見たら大丈夫であらう然らば一萬一千三百四十貫の桑があるなら、故に其差額三千三百四十八貫の（一町六反餘歩分に當る）桑は秋本君は收穫して居らぬのだ。

全くは夫れ程モトデを掛けぬ

收穫して居らぬとすれば、前項に擧げた丈けの資本を掛けぬとになるではいか、七町歩耕しては居るが、五町四反歩ばかりの收穫しかないとすれば、高事歩は係數的に行かぬにしても、五町四反歩分の費用を七反歩の處へ掛けて置くのだ尤も夏秋蠶に百四五十匁も掃くのだからソラ雨降り桑がないと……切れ〳〵〳〵て、働かづゝ御手遊的にやるとは違つて畑の利用や桑の使用もキリツメには行かないことは自分も承知して居る、……が併しイクラ貧目で見ても六町歩の費用で七反歩を經營して居るとしか算盤玉は勘かぬから千三百四十七圓五十錢の中から一町歩分百四十二圓五十錢は願ひ下げとして差引いて計算すれば、資本は一千二百五圓となるのである。

されば收入の二千二百五圓から差引て一千圓の純益となるのである……が、蠶を飼ふものヂやからとて

カラツバラでは働けぬ

兎角戰。と云ふものは腹が減つては駄目のもの、八街の眞中だと云ふても、食はずには働けぬ、食はせずにロバでは人も使へぬから之等を計算せねばならぬ之は少しタツプリ見積るが至當であらう。

茲でお斷り云ふて置かねば、計算ドヤ付くから、先きに一通り述べて置かう。秋本君でも誰でも、企業者は畑には出られぬ、子息が二人あつても、一人は被是手傳はねばならぬから、平均一人より畑に出るものがないとすれば、七町歩の畑を耕すに八百四十人の人夫を要するから、年に依つて雨風の日に差違はあるとしても、一年の八分、鍬鎌を取り得るとして畑のみに三人は掛かりつ切りにせねばならぬから、此の方面に二人を雇込まねばならぬ。

山口縣蠶業講習所所長物部重實氏の先生

處で男五人分の一ケ年の食料一人六十圓と見て三百圓になるとこんとは養蠶の人夫であるが同じく千葉縣の調査で蟻量四匁を飼育するに男十六人女十七人を要する割合であるから、男が四十八人と女五十一人確かに十二匁の蟻量を飼育しれば十二人夫かゝれば十二匁の蟻量を飼育するに於て百匁の蠶は飼ひ遂げらるゝ計算となる譯だから前に桑園の處に計上した五人の男を此の方面に向けて、更に三四人の女を增して（主婦と嫂さんの外に）彼是勘通するとすれば、男五人女八人が男八人に女七人（間に逢ふ譯で）ある、仍て男五人の食費は計上したから女八人の食費、主婦と嫂さんは一ケ年他の六人は、五十日、夏三十日、秋二十五日とすれば、百五日で三ケ月半になるから月五圓として二百二十五圓（三ケ月半六人分）になる、之に雇男二人の給金マケ年六十圓と雇女月六圓として二十一圓づゝ六人分百二十六圓を計上し一目瞭然に其計算を示せば

一金三圓	男五人食料（余年分）
一金二百二十五圓	女八人食料（二人は一年六人は三ケ月半づゝ）
一金二十六圓	二男の賃銀（一年六十圓宛）
一金七百七十一圓	六女の賃銀（三ケ月半宛月六圓）

となるが、茲で男の給金を右の如く計上して來れば、前に桑園の費金として計上した人夫費の三百七十八圓は（七町歩分）戻つて來ねばならぬから、之を差引けば四百〇三圓となる、此の四百〇三圓を千圓から、差引た、五百七圓と云ふものが主人主婦長子と嫂さんと次男との給金とか、日當とか云ふものになる勘定だが。

勘定あつて錢足らず

と云ふが天下の公則否古來の地口であるが眞を穿ち過ぎて居る、果して秋本君が右の通りなるや否やは余は保證する限りでないが、若し吾輩をして遣らしめ、桑園をも少し集約して五十圓の小作料と人夫賃の五十四圓（何れも一町歩分）を利するのみならず、桑を繁茂させて草を作らぬ樣にするとすれば、流石は秋本君だ、勞力の利用と云ふ點に就ては甘い、甘い確に甘い、夫れは、雇女を使ふのに養蠶期丈は甘い、甘い確に甘い、夫れは、雇女を使ふのに養蠶期丈けと云ふならば茲に計上した樣な安い給金では來まい、處が蠶のあい間〳〵其他には應繰糸を挽かしひるから、一ケ年を通じて止め置くことが出來る、一ケ年通じて喰つて扱けてのあとが七八十圓であるならば、決しく働く女も不味くはあるまい下手くらしい饒辨、否斯く申す某等より以上かも知れぬ驚く勿れ東京の下女の相場一ケ月漸く三四圓の上に出ずゝ。

處デ……處デ

畑へ麥や豆を作つたらドンナものか、左の數字を讀んで貰ひたい。

畑　一反歩の收支　　麥と落花生

一圓三十五錢	堅塩人夫三人
一圓十五錢	肥料運搬等付人夫男二人、女一人
一圓〇五錢	中耕及施肥人夫男三人、女二人
二圓七十五錢	刈取及脱穀人夫男三人、女四人

四十九錢
五圓
計　十三圓三十九錢

種子代
肥料地肥三百貫落花生箱三枚

收入

九圓
七十五錢
計　九圓七十五錢

大麥一石五斗代
蓆稗五駄の代

落花生

一圓〇五錢
一圓六十錢
二圓
三圓五十五錢
七十錢
二十錢
計　九圓十錢

雇人
雇納人夫男四人、女五人
種子四升代
農具損料

收入

十七圓五十錢
一圓
計　十八圓五十錢

落花生三石五斗代
藁稗十駄代

過計差引五圓七十六錢

右は千葉縣の調査で、若し落花生の代りに豆を作るとすれば、豆作の賃金六圓四十錢で收入が十圓六十錢しかないと云ふから純益は四圓十五錢で之れから麥作の缺損三圓六十四錢を差引けば手も借められぬことになるから、麥に落花生を作るとすれば、五圓七十六錢の純益を得る爲には、男十七人と女十七人の五人を雇するから夫婦で一年の八分は出るものとすれば、三町四反歩は耕し得らるゝから一ヶ年の純益は二百十三圓十三錢となる仍て麥を作る爲に要する人夫賃の七圓四十錢と落花生を作る人夫賃六圓二十錢との三町四反歩分五百〇三圓二十錢とは御手前錢で加へて、二人の食料費（一人六十八圓）を差引けば五百九十六圓三十三錢は夫婦の手に入らねばならぬが、入りさうて入らぬのは豊醉柳ひの泥溝渡りのみならんや。

茲の恵比壽も澁い顔

してけりで麥や落花生計り作る譯には行かぬ、落花生は かて豆が大部分であるから、助かるまいてはなるまいか、右の計算では至極有利の樣だが、實際は麥作の缺損を豆作でクメた五十一錢の（一反當り）純益三町四反歩分十七圓三十四錢と麥作人夫豆作賃人夫賃四圓六十一錢を加へた十二圓〇二錢の三町四段歩分四百〇八圓六十八錢を加へて、食料費を差引いた丈けが主人の金藥に對する報酬と勞銀と差引の勞銀とであるが、何が又手々年々之丈け得られる、八街は近き十年に金庫と土藏として動きは取れなくなる筈だが、金庫に穴があるのか紙幣が横を向ひて行くのかどうも之程もなくらしい、ないのも道理じやないか除り組放的にやつて、前記の計上程、人手も肥料もかけないのだものを

夫れだから吾輩は

蠶を飼へば旅みもなるが麥と豆では、大平樂を歌ふ迄には行かないと云ふのである。

秋木君の懐しらべをした折に、蠶室蠶具の損料は見なかつたにしても蠶を飼ふてザット五百餘圓の利を見製稼して三百餘圓（實際は少しアロウ）の金藥費を見るから、愼て入るのは ソロ〳〵千圓と云ふことになる、御つて困るだろうと云ふのも茲に算盤玉があるからで秋木君が眼を細くして相格崩して笑ふのも、無理はなからう、若し夫れ一反歩に二十圓から三十圓の小作料を出す地の敗支計算をしたならば米や麥を喫ふ代りに身を喫ふことになつて居る、夫でも酒にも有ければ生きても居るから茲に示すべき計算の仕樣がない、仕樣がないから省きました

さは左りながら

早谷點されては困る、誰れでも奴が初めより爲し得ると思ふては吾輩が却て人を誤る爲に研究した樣になる、夫れは甚だ恐縮に堪えない次第で、奴くなるには、多年苦心の結果であることは云ふに及ぶまいが（とは云ふものゝ飼育の要訣を心得居れば何でもない）只要は奴くる地の蠶業經營を照會して、茨城で見た樣な（其他にも漂山原野地があるなれば、一日も早くこれを利用して天然の給源とを突き若くは洗央に歸せしめ而も國家民人の爲に、近は自己及び縣の爲に奮闘して貰たい。

些々たる（否或る意味より見ては重大であるが）情の爲に故山墳墓の地を離れ難く、僅かに五反や六反耕して一反二十圓から三十圓の小作料を拂ふて而も年が年中、伸〳〵した氣持ちもせずに、暮らして居るよりも、然るべき地を撰んで同じ勞力を投じたならば、より多くの利用厚生に資し、自身は勿論、相互同志の上からも得策ではあるまいか。

山口縣育愛園蠶業組合部習練生の光榮

大きに御世話と云はるれば夫迄也、亦何を云ふのかと云はるれば、生物に餌あり て変化は人やては為るが、明日を糸何せんやと云ふ樣な慮りなくして今日を送るの は、眞に殘念に思はる、假令遊手徒食に何不自由なく人々ても、斯かる處に奮闘して自然を興し み、自然を利用するならば、蕾せぬ趣味があるとは云ひ難い、農蠶學校校田の若き諸君が、理想を現實するには尤も趣味があると思ふ、若し夫れ桑木は賃の資を要するものであらば、事元より大資を要するにあらねば事は難く、綿蚕せらるゝてあらう、或る方面から見て日本は廣さものよ、汽車も有難いが、徒歩は尚より有難く感じた富士の裾野の土氣（のみ）の間でさへ石の燒け白蟻の雪を驚く鵬となるで

新緑したゝる葉が出來、やがては白蟻の雪を驚く鵬となるではないか、愼て同志の參考迄に。（完）

飼育上競進社は如何なる點に注意ぜるか

競進社長
特別會員　浦部良太郎

埼玉縣川越町に埼玉支會出評會が開かれた折同氏の御話を傾して聞き得た誠語ほど左の通りであり少き忙な極めた爲に間合得る暇なく茲に謹べることにした。（編輯者）

競進社員が皆、勉めを實と決心で事業に臨んで居るとは前に御話した通りですから飼育中であるからと云ふて別に變りはないのです、ナニカありさうなものと御せられれば、無いでもありますまいが、是等のことは出來ないのです、折角の御尋ね故とても實行されて居ることだらうと思はれますが、競進社にて一番骨を折りますのは夜の注意です、御案内でもありませうが飼育中夜の注意を怠りませんとなれば、完全に其効果が收むることは出來ないのです、蠶が季節と云ひ晝間の勞働の結果と云ひ、眠い時ですから承知しながら遂ひ其處迄手が届き兼ねるのです、又無理ないお話ですが、一般の人にも少し進んで其處迄力を盡して貰ひたいのです。

好く言ふ壁へてあるが

折角骨を折つても夜の注意が御留守になるならば百日の説法庇一つの蠶に潰れずして、千円の功を一蓑に缺くの慨みは免れませぬ、何故なれば壹の間と云ふ各人の眼が醒めて居る間であるならば、餘程ヌカッタと思ふて夫れ程大した不都合は起らぬのであるが、一日に於ける最終の給桑が清だ後より翌日の最初の給桑に至る間の四五時間は、各自が全く熟睡の時である、搗て加へて此の時には戸鎖もすれば伸びのびと寝るもする、從て空氣の流通は一倍悪くなる上に、室の工合を見るもなく、ソレデあるから此の四五時間の間に起つた出來事は誰れも知らぬ、誰れも知らないから無事であつたならと思ふが抑も、くの眼を、食盡すであらうと思ふた桑葉が彌山幾つて居、モ少し活潑であるだらうと思ふた蠶が思ひの外ドンヨリして御氣線斜なりの奇態を演出することがある、否寄態ではない之が本當である、斯うあつて蠶を飼ふに骨を折つて甲斐があるので又優等物も得られるのであるが、痛痒を感ぜぬと來ては張合もないし、又優物も遣らぬ等である、仲には、又蠶を飼ふことなぞは

何でもないのに八釜しく

云ふて無理に面倒がらせると、仰せらるゝ人もあるが、決してソオー云ふ譯ではないテ、好んで八釜しく云ふては、ないが、夜は寝ぬ時に、桑は呉れた方が、結構な繭を深山取る人もあるが、ソオー云ふ人は頭の中にチャント注意すべき時季なり給桑時機なりがあるのと、飼一つには室の構造が寒すに注意せども良い樣に自然に出來て居るのだ、夫れを承知して飼つて居るか知らずに空〳〵に美果を收めて居るのか其邊のことは知らないが兎に角好結果を得て居る處から、コオー云ふ例が一つであると何處其處の太郎兵衛がイヤ八兵衛がドーのと、三里四方位は之を楯に取つて、夜注意なぞは左程意に止めぬ人もある樣だが、誠に不用慎の話して、夜の注意も何もせずに美果を收め得らるゝ人は何處へ行つても沢山居るに違ひない、然るに之等の例を引て迂濶に蠶を飼ふ樣では、全く浸墓さがすると、成程蠶を飼ふのは副業には相違あるまい、又命あつての物種で人間の體もソオ〳〵無かぬと云へば夫れ迄のことであるが副業ぢやからと云ふて違ふて よいものでもない、命あつての物種だ からと云ふて、折角拵た蠶にオレハ眠いからるるが厭で呉れるなら蠶がよい注文である、若しも聞き別けて呉れるなら有難いが。

ドォーヤラ耳が遠ソーダ

であるから、何とか繰り合せをして夜の注意はする樣にしたいのです、殊に夜の一時から三時頃になりますと氣温は一番下りますし、之れに連れて温氣が増して來る、相當に氣拔きが明きい火力も之に伴つて居ればソレ程でもないが、氣拔きの明け方が足らねとか火力が弱いとか云ふことになると、室内は愈ち蒸熱を醸してムンムット蒸れて來る、此の時に蠶を蒸して仕舞ふことになつて折角の丹精して來た蠶の體質を窮くし、病氣に罹り易い狀態にして仕舞ふことになつて、病氣に罹る蠶は其勢を逃め、病毒を体撒し他の蠶者な蠶にも御振舞ひする

樣になり例々ヤリヨコナイの基を茲で拵へるのである、サアコーなると大變で蒸れたとか蒸したとか云ふことには氣が付かない、昨日の風が昨日の雨がと飛んでもない方角へ向つて登蔵を始むるから茲々廻ひ方へ油を引て蠶を引張つて行くが、其原因に就ては不判仕舞で、頭も痛くなれば悔中勘定も足りなくなる、夫れで年々御蠶でなくつて御難古だなんて云ふて居るものもあるが誠に惜しいものて紙幣を落らせると

夜の注意と云ふことは春ばつかりでなく夏秋蠶の時機に於ては一層其必要があるので、飼育上何處に注意するかと云へばマア右の通りで事ら社員は茲に意を注いて居るのです、珍らしいことでもなんでもないですが、ドォーカ然るべく御照會を願ひます。

誠仲々驚きざりしが其夜の七時石井製絲場の訪ふべき時間を過ぐること三十分なりしかば倉皇駆してぬかるみの川越町を過つた。

蘭の仕入と一つの理想

特別會員
郡是製絲株式會社長　波多野鶴吉

本誌は去月廿五日から世日迄本會々議室に於て開かれた諮問會に臨席すべく上京せられた波多野氏を某紙記者が訪ふた際語られた誠語の種物であり折角慈せられた金玉の言を聞く同者の発産考分と銀る為に茲に知て発多の参考に供し度ほうのとも陳らの者しろのに幸し寛恕せられたい。

經営法に就て一段の研究

本年の生絲は昨年より層良く實れるやうですが、併し値段が如何にも安いのです製絲家の困難は一通りでなく、破産の

悲境に陥み掛けて居る製絲家も尠くないやうであります、故に、這何とか救濟の策があるまいかと苦心をして居る人も多いやうです……ハ、私の經營してをる郡是製絲場ですか、昨年來相當の利益を收めて居ります。

左様、郡是製絲場を創立した目的は何ほど蠶絲業を奬勵して土地の富を土地で消費するやうでなければ到底奬勵の目的を達することが出來ないといふ考へで創立したのであります、從て名も郡是とつけたのであります、故に養蠶家が增加すれば增加するに從て製絲場も擴張して行かねばならぬから去る明治二十九年に創立した際には百六十八釜であつたが只今では八百六十八釜になつて居ります、從つて二十九年には僅に製造高は三萬貫計りになつて居る、如て此く年々の製造高は增加の一方であるけれども、率に其製造した生絲は何の繰りもなく、ズン、買れ行き且つ相當の利益もあることであります、で如何に講究してみても一に製絲は經營の方法に依ることと、考へまする、で、此經營法に就ては一段の研究をせねばならぬことと、思つてをります。

一舉十三萬四千圓の利益

私の製絲場は創立以來茲に十四年の星霜を閲しましたが此間に於て損失したことが三回あります、二十九年と三十二年と四十年とが、此內四十年は御承知の如く暴騰暴落の有つた歳で大概の製絲家は普損害を受けて居るのであります、私の製絲場も此歳の損害が最も多く九萬七千餘圓に達しましたから、普通ならば製絲場の運命も如何かと思ひまするが、此場合に於て徒に泣言いつても仕方がない更に勇氣を鼓舞して奮闘せねばならといふので、社員一同決心の臍を固めました、當時五百二十二釜のものを昨年之を百八十四釜に增加して資本の許す限り製絲力の存する限り繭を仕入れ、一萬二千百五十六貫といふ生絲を拵へ上げました、處が幸にも原料の安いのと反對に生絲が高く賣れたので十三萬四千圓の利益を獲ましたから、一擧にして前年の損失を取り返した上、此利益の內から拂込み資本金として四萬九千圓を引き去り更に繰越金として一割の配當を致しました。

繭は出來る丈け高く買ふ

製絲の經營に於ては其損益に關係を有するものは繭ならずあるから一概にも言はれぬが、併し就中之に大關係を有するものは原料即ち繭であります、故に繭の仕入に就ては場員一同大に努めますが、さりとて素と此製絲場なるものは土地の養蠶發達の爲に設けたものであつてみれば安くさへ仕入れれば宜しいといふ事に出來うる丈け高く買つて養蠶家も喜ばせ、そうして會社も赤字續けねばならぬといふ事になるから、上一番格のやうな普通の生絲を製造して居つてはイケない、勢ひ良い絲を引いて高く賣らねばならぬので主としてエキストラ番格の一二等絲を製造してをりますが、幸にも一昨秋以降上一番格の生絲が漸くにして八百圓臺にあるにも拘はらず、我社製造の生絲は千圓以上の價格を保ち其値開きに於て百四五十圓の差を置はしてをるのでありまして、故に私は斯思ふてをります、絲價が安いといふのて繭を安く買とする、で普通の道方であるけれども、夫では養蠶家が立ち行かない、養蠶家の立ち行かぬやうとなりまして一時製絲家が自分の懷ろを肥やしてたところで、夫が即ち斯業經營上永遠の良策であるとは認められない、養蠶家も製絲家も共に其利益を裕することが出來てこそ始めて健全なる斯業の發達を期することが出來ると斯う考へまして、一面良絲の產出に努むると共に繭の仕入に於ては出來うる丈け高く買つて遣るやうに致して居ります。

其人の働きに依つて謝禮する

原料繭の仕入は御承知の如く短い期間に行はねばならぬから、此時期には五六十人の人を諸方に出張させて早い場所から買込ませるのですが、此人々の中には社員の者も加はるけれども、多くは臨時雇でありまして格別給料といふやうな極つたものを支給せず只出張中の實費を支給し、更に其人の働きに依て謝禮を致します、謝金の額は一定して居ぬが、大概十五圓から百五十圓迄の間であります、中には僅に二週間位しか働かぬ人に百圓以上の謝禮をする事もあれば三週間も四週間も働いて僅に十五圓位の謝禮しかせぬ人もあり、甚しきは實費丈け御御箱にする者もあります、夫は止むを得んので、何ほど繭を買つても、不良の品や、割合に價格の高過ぎる品を買はれた分には之が爲に非常の損失をせねばならぬことになりますから、そういふ者に謝禮どころではないのです、其代り能く働いて成績の良い者には一等級戰若干增の賞與を與へます、爭もせねばならぬ難戰若干增の賞與を與へます、昨秋以降上一番格の生絲が漸くにして八百圓臺にあるにも拘はらず、我社製造の生絲は千圓以上の價格を保ち其値開きに於て百四五十圓の差を置はしてをるのでありまして、故に私は斯思ふてをります、絲價が安いといふのて繭を安く買とする、で普通の道方であるけれども、夫では養蠶家が立ち行かない、養蠶家の立ち行かぬやうとなりまして一時製絲家が自分の懷ろを肥やしてたところで、夫が即ち斯業經營上永遠の良策であるとは認められない、養蠶家も製絲家も共に其利益を裕することが出來てこそ始めて健全なる斯業の發達を期することが出來ると斯う考へまして、一面良絲の產出に努むると共に繭の仕入に於ては出來うる丈け高く買つて遣るやうに致して居ります。

奈良縣防蠶病蠶子女所領出原樣所巡事防蠶病蠶御視察員

買ひに行くのを待つて買ひに行かない內に豫定以上の原料を仕入へる事あり、或は年々買付場所と極めてをく範圍で豫定の數量を滿たすこと

養蠶家との約束を今から……

原料仕入の場所は大抵極まつて居りますやうなもの、年併其歳の蠶況如何に依り或は他の製絲家の買模樣に依て多少の變更を來れないのです、私の處では他の製絲家よりも割合良く買ふ力針を取てをりますが、併し歳に依ては其待つて居る處へ行かぬ事あり、或は年々買付場所と極めてをく範圍で豫定の數量を滿たすこ

とが出來なくて、餘義なく他の地方へ出て〻仕入る〻やうな場合もあります、だが大抵いつも豫定以上の原料を仕入る〻のでありますが、段々考へてみますと之ては製絲經營上面白くないやうに思ひますから、私の製絲場へ原料を供給して呉る養蠶家を今の内から極めてをきたいと考へ目下著々其方針を進めつ〻あることであります……左樣生絲の先約束みたやうなものですが、併し値段は極めないのです、値段は其時の相場に依て定むるのでありまして只今から約束するのは他の製絲家へは決して賣らぬ私の處へ賣るといふ約束に過ぎないのであります、斯うして大體の約束をしますれば夫れて略ぼ翌年に於ける原料仕入の數量が定りますから其時に及んで甚しき過不足を生じ困難するやうなことは先づ無からうと存じます、現在の處では養蠶家と製絲家との關係が餘りに薄い否寧ろ殆ど其關係は沒却されてをりますから、結局相互の不利益となり、知らず識らず蠶絲業經營難の禍弊を釀らすやうになるのであります。

私に一の理想がある

て私は一つの理想として考へてをることがあります、夫は相互生命保險會社で遣つて居るやうな方法で養蠶家と製絲家との關係を結付けたいと思つて居ります、若も此組織が成立しますれば會社計りでなく之に關係する者は凡て利益の幾分を貰ふとになり、工男工女は無論のこと資本主も養蠶家も其利益の配當を受くるやうなことになりますから、其製絲場に係を有する者は凡て利害の關係を持つことになつて、從來の如く損益共に我關せずといふ他人的の考へを捨てねばならぬことになります、即ち養蠶家も資本主も工男工女も總掛りでドウーかアノ製絲場に儲けさせてやりたいといふ考へを持つやうになるから、自然製絲經營上の危險を脫して、其基礎が安全になるであらうと考へます、併し之を行ふには一體製絲業といふ者はどの位の利益を得れば宜しい者であるかといふとを能く調査してみねばならぬ、吳服業でも飲食業でも世間有らゆる商賣には一割の利益とか二割の利益とか略ぼ其利益の割合が極つて居るのに獨り製絲業に於て其割合の極つて居らぬといふとはない、多額の資本と多數の勞働者とを使つて大なる危險を冒しつ〻行ふ仕事であるが一體どの位の利益を取のが相當であるか、又どの位の利益があつたならば、心配なしに經營して行くとが出來るであらうか必ず其利益の割合があるに相違ない、其割合を見出した上は夫れ以上假令ば五分の利益を取るのが相當とすれば五分以上の利益のあつた場合には其餘分の利益を場主行くは條主以外の工男工女や養蠶家又は資本家に配當するのであります、其配當の率は資本家に對しては日歩の割合に依て、養蠶家に對しては繭相場の割合に依て、工男工女ならば其賃銀の割合に依てといふやうに夫々定めねばなりますまいと思ひます、兎に角製絲業其者の利益がいくらあれば宜しいかといふことが譯らねば仕方がないから目下私の處では切りに其調査を爲しつ〻あるのであります。

機業家一戸に製絲場一つ

尙私は製絲業なるものは小規模ではいけない、大規模に經營せねばならぬといふ考を持つて居る者でありますから、自分の製絲場などは絕えず擴張して行く方針を取て居ります、一體日本の製絲業は小規模に失して五十人繰以下の製絲家が三千もあるといふやうな有樣である、河原の礫のやうに小製絲場のみがゴロ〳〵して居つた處で到底統一せられた立派の品の出來やう筈はない、原料の統一も急務であるが、小製絲家の統一も亦急務ではあるまいか、夫れは兎に角日本全國の製絲家が四千餘もあるのに横濱に於ける問屋商館なるものの數は實に尠い、即ち生絲賣込問屋が僅に二十五名、生絲の輸出業者が僅に十七名であります、故に製絲上に於ける經濟關係は一に問屋商館なる者に其實權を握られて居るやうな有樣で隨て甘い汁は製絲家が吸ふてはなく皆問屋商館の人々に吸はる〻といふやうなことになつて居りはせぬか、彼福井の羽二重でもさうですが小機業家が澤山あつて生絲商人の數が尠いから常に其利益は少數の生絲商人に壟斷せられて居るが、之に反して金澤の如き機業家の數よりも生絲商の數が割合に多い爲に其利益は生絲商よりも機業家の方が多く攫得して居るのであります。故に私は日本全國の製絲家の數は宜く問屋商館などの數位にして仕舞つた方が宜からうと存じますが尙一步を進めては外國に於ける絹物機業家の數位に纏むる方が宜しからうと思ふ、今米國の絹物機業家の數を調べてみれば僅に四十餘に過ぎないのですから本邦の製絲家も四十か五十位に統一して機業家一戸に製絲家一戸位の割合にしたならば本邦蠶絲業發展の上に一層の光明を認めることが出來やうと思ひます、私は此考へて私の地方に於ける製絲場は片端から引受けて經營する方針を取てをるのです、尙御話致したいことも澤山ありますが、併し時間がないとのこと遺憾乍ら何れ後日にても……

如何にせば蠶絲を低廉に生產し得るか

學務委員　八田達也

原々種官營問題に一大氣焰を吐かれたる八田學務委員は更に桑園問題に就て縷々數千言大氣焰を吐かれ編者の耳を聾せん計りてあつた然し之れを殘らば頗る絕妙あることゝ思へど乍遺憾頁の許さゞるものあるが爲めに、如何にせば蠶絲を低廉に生產し得るかと題して僅に其の一端を玆に紹介することにした。

原々種官營問題に次いて更に絕叫すべき問題は何？

生絲の品質は之を箇々より見て何程優等であつても、貿易の目的として何等の價値の存せざることは明なる事實であるが、今日の本邦生絲は遺憾乍ら、其品質は雜駁である、不統一である、故に假令產額を增加しても先づ以て品質を統一せねば、永く貿易場裡に覇を振ふことの出來ないのは言ふ迄もないことであるから、吾輩は之が統一の急務を絕叫し、其手段方法の一として蠶種統一の必要を說き、原々種官營論

をも主張して前々號及前號に其意見の梗概を述懷したのであるが、此蠶種統一に就て此問かれた諮問會に於ては、流石に天下屈指の蠶種家たるの面目を發揮して吾玉を磨くに足るべき山の石以て吾玉を攻むるの近頃以て愉快とするところであるが、結局原々種は官營のことに其決議を見るに至つた、之れ我蠶業界に於ける異數の大革新を見る時機である、と思ふのである、併し茲に於て吾輩の一般蠶絲業家に最も冷靜に一考を乞ひたきは原々種は如何に官營にせられ、絲質は如何に統一せられても、其絲價にして低廉ならざる限りは世界の生絲市場に於て最後の勝者たることが出來ないといふことである、故に此際蠶種統一問題に次で更に大に叫ばせねばならぬは、蠶絲を如何にせば低廉に生産し得るかの問題である。

桑園一反歩の平均收葉量は幾何？

吾輩は多くの蠶絲業家に此問題を提供して之が解決を求めたること一再に止まらずであるが、十人が殆んど十人迄口を揃へて本邦蠶絲の經營は集約の極點に達し、最早是れ以上に其生産費を減少するの餘地なきやうに悲觀して居るとしてソーであらうか、吾輩率か不率か此議論には到底首肯しかねる一人である、先づ試に桑園の現況に就て見るがよい。

明治四十一年の統計に據ると本邦の桑園は凡て四十一萬二千四百四十四町五反歩で、同年度に於ける春夏秋の總産繭額は三百五十三萬百五十七石である、之から見ると同年度に於ける桑園一反歩の産繭力は僅に八斗五升五合で此中春蠶を七分夏蠶蠶を三分の割合で飼育すれば、春蠶繭一石を獲るに桑二百貫夏秋蠶繭一石に付て同百二十貫を要するから、平均春夏秋蠶繭一石を獲るに桑百七十六貫目を要する割合となるのである、從て八斗五升五合の繭を獲る爲に百五十四貫目の桑を要するのであるが、現在の桑園一反歩から幾何の桑を採れるかといへば、僅に百五十貫目即ち繭一石も採れる始末である、本邦の桑園は果して之れ以上の生産力を持たぬであらうか、集約の最高度に達して百五十貫より以上の生産力なしとすれば、遠からず我蠶絲業は滅亡の悲運に陥いるであらう、が併し年ら紀の川沿岸地の桑園は一千二百貫目以上の桑葉を産出する事は、東京蠶業講習所の調査に據れば明治二十五年より同三十年に至る六ケ年間の最多額が六百三十七貫八百目で六ケ年間に於ける最少額との平均産額は四百四十八貫九百目であるから、されば桑園は耕耘肥培の如何によつて此の如き生産力を有して居るのであるから、一反歩の平均收葉量百五十貫目が即ち其生産力の極度であるとは認められない、吾輩が生産費を減少するの餘地なしとの悲觀說に首肯しかねるといつたは全く茲に在るのである。

吾輩の意見は大に異へて大に取れの意見である、生産力のないものならばイザ知らず、肥培耕耘の如何に依っては現在の三倍は收葉し得ると東京蠶業講習所の調査が歟かに教示し

て居るとはいふ、今若しも當業者が其考へて熱心に桑園を改良するとなれば同じ一反歩の桑園から約二倍の産繭を見ることと必ずしも空想であるとは云はれぬ、されば同じ四百五十貫の桑葉を得るとも之を三反歩より得ると一反歩より得ると、では其費用に於て其勞力に於て幾何の差があるであらう、如此きは三尺の童子にも能く計算し得るとの譬に漏れず、吾輩茲にくどくは云はぬ、ダガ一言して敢かねばならぬは現在の收葉量の三倍とはいつたが、吾輩の調査によれば夫れ以上の收穫を上げることも容易なりとの一事である。

三十圓の費用と五倍の生産力

吾輩の見るところ以てすれば本邦養蠶家の桑園に對する遺方は決して無約の極點に達して居らぬから、從來よりも更に之を集約にするとすれば一人當の桑園反歩は減ずるであらうが、併し之と同時に從來と同樣の肥料人夫を以て少ら桑園を栽培するのであるから、耕耘施肥管理等は分行き屆いて桑園は内包的に其生産力を增すに相違ない、然るに今日では桑園の生産力を外包的にのみ增さうとして桑園の增殖にのみ苦心して居るから、桑園は益疎放的となつて桑園の單位生産力は次第に減じて來るといふ結果になつて居るのである、故に若しも桑園の增殖が政策として行はれて居らず隨分矛盾した吾寧ろ滑稽の政策であるといはねばならぬ、と云ふ吾輩の調査に據れば桑園一反歩に對して肥料二十五圓、耕耘人夫人之を五圓と見て合計僅に三十圓を投ずれば優に平均七百貫の桑を收穫することが出來る、而かも此の三十圓は從來の生産費以外に要するのではなく全部で三十圓といふのである、吾輩は何であるか改めて投ずる費用は極めて僅少である、吾輩は故に世の蠶業家が、此僅少の費用を投じて約五倍の生産力を利用せぬかを惜しまざるを得ないのであるが、若しも世の蠶業家が吾輩の忠言を容れて此に於て五倍の生産力を巧に利用するやうになつたならば繭の生産費は驚くほど減じて相違ない、利益を獲得することが出來る、而して製絲家が低廉なる原料を仕入るることが出來るから、生絲の生産費も及ばぬことになつて、之を市場に提供する爲は支那絲との競爭を爲し得ることである、來に絹業協會廣東程度まで生絲と競爭するに於ておやである、來に絹業協會の生絲に向て懇切なる忠告を與へたのは偶々以て本邦蠶絲業家の奮發を促すとなるはせぬか　蠶絲を低廉に生産するに敢て桑園のみに關係あるとは云はぬが、併し生絲の前身は蠶であるのみに關係あるとはいふものは桑であつて、其桑が生産費の大部分を占むる以上は敢て茲に一言せざるを得ないのである、世の蠶絲業家率に吾輩の意を誤とし發憤勵精桑園の改良に當られたいのである。

中米及南米視察談（承前）

法學士 岡 實

十五 移民

南米に於ける事業の大體は前述の樣であるが尙少しく移民事業に就て御話し致します、移民は秘露に約三千人居るブラジルへも去年六月頃に殆んど八百人許り送つたので總計三千七、八百人の日本移民が彼地に參たので御座りますが重に砂糖畑に働いて居るので、詰り砂糖畑の植付草取り灌漑を遣ることから刈取りて工場へ持つて行くこと等の作業に從事して居る、其成績如何と云ふに何分にも交通の便が少く、貯蓄機關送金機關も缺けて居る爲めに貯金及送金共極く少い、餘程上目に積りて年々三十圓以上送金して居るとは考へられない、此れは少しく意外であつた。

元來移民の年齡は若き故日本に於て消費時代より生產時代に移らんとする人達である、彼等の成長する迄の經濟上の消費、即ち移民一人の物的價値は少くも二、三千圓になる、之れ丈の金が一割に廻るとしても二百圓乃至三百圓は貯蓄して之を本國に送られねばならぬ、處が年二三十圓に充ないと云ふ樣では國としては引き合はない、彼等は大きくなる迄、我國で育つて消費するのみの人間であつたが、いざ生產しやうと云ふ靑年又は壯年時代に外國へ行つて外國の生產を資くるのは差支がないが、其故鄕に送金する所の金額は年に三十圓に滿たない、而して他日老年に至る頃歸國して又もや我國に衣食に消費する所生產より大なりと云ふことであつては移民と云ふものは國の爲めには何等の利益なきのみならず實に國家の損になる、斯かる有樣であるとすれば私は國家の經濟上此種の移民の得失を疑はざるを得ないので御座います。

秘露には多數の移民が居りますから中には田舍の淋しい處に居るのが嫌になつてリマの首府に出て來て別に生業を得る途もなく或る支那人の厄介になり又は乞食の樣な狀態で居る者が五十人許りも居る、彼等は前に移民の或者が飴を賣り出して大いに儲けたことを聞いて、それを眞似て公園に立つて飴を賣つて居る、彼地にては公園に散步して彼等と話すのが一つの苦しき樂みである、彼等は吾々の了解が出來ない考を有つて居る、其歸る所を聞くと二三百圓貯蓄したら鑛山探險に行くのであると云ふ樣な突飛のことを言つて居る、唯かゝる無謀の考へ計りを有つて居つて、而して他日何か遣る積りであらうが、實際其人物品位等はまるでなつて居ない、斯樣な人間が五十人も首府にうろついてをる、實に困つたものであると考へた、偖又田園に働いてをるものは如何と云ふに何分寂寞たる田舍の砂糖畑に働いて居るのであるから別に樂みのない爲に酒を呑み、且つ賭博に耽ることになるは寧ろ免れないことである、それから支那人が七萬人居るが其中に不良の徒が居つて、賭博を打つて廻る連中が居る、それで我移民は之に引きかゝる、それは隨分引きかゝる我移民は賭博で金

をなくしたのを廣東銀行に預けると云ふて居る、試に彼等に對し金は貯蓄したかと尋ねると、彼等は平氣で金は廣東銀行に預けてありますと云ふて居る、それは賭博で金を失くしたと云ふ意味である。

惟ふに彼等が日本に居れば兎に角家庭の人であつて時には鄕黨朋友と共に寄席にも行き芝居も見、又盆なれば、踊も遣れば正月には餅も食ふが、外國特に秘露の田舍の樣な寂しき所に獨身生活をして何等の物質上精神上の慰藉もないから其極自ら有形無形の墮落を惹き起すは、或程度までは無理のないことである、伊太利人、西班牙人の如きは假令迷信にせよ宗敎と云ふものを信じて居るから墮落が比較的少いのである、それで我移民は少くとも將來は家族的移民でなくてはならぬ、それから前に北米で感じた如く、彼等を訓育する處の機關がなければならぬ、外國の移民は百人位も集團をしたときは各醵金し、又は寄附を受けて敎會を建て、又敎會の外に倶樂部の樣なものを組織して休日になれば、大勢集つて音樂舞蹈をやつて和樂しみ又敎會堂には牧師を招いて說敎を聞くと云ふ風に自然之に依りて精神上の慰安と快樂を享けるのでございますが、日本移民には全くそう云ふ事がない、敎會なき移民は日本人のみてある、これは移民會社の方でも又政府としても考察を廻すべきことてある。

奈良縣黴病豫防事務所橿原出張所女子黴病豫防吏員

仍て今度ブラジルへ家族移民を送つたのでございますが、初めは何うも餘り面白くないことが多かつた、彼等に宗敎心がないと云ふことが外國移民間に排斥を受ける一つの原因てある、例へば彼等が珈琲園から歸つて來ると熱くつて堪へられない、殊に不完全な移民小屋てすから風呂の設備がないから、川に這入る、日本の田舍の風習として、吾人はなんとも思はないが、彼等歐洲移民は我移民が男女赤裸條々靑天上の風呂て流し合ふのを見て、彼等の宗敎より來る慣習よりして實に喫驚して仕舞ふ、是等は一の例に過ぎませぬが遣ることなすこと、悉く同僚移民の攻擊を喰つたのです。又移民の監督者が居つて相當注意をして居るけれ共彼等の中には小學敎員の喰ひ上り巡査の古手等が多くして、此等監督する人にも餘り感服の出來ないのが多いのです。かかる有樣であるから日本移民が外國でもつて通常の市民としての待遇を受くる迄には前途中々遠い、是等の傾向又は風習にして革められぬ以上は日本移民の競爭者たる伊太利スカンヂナビア及墺地利の移民が始終日本移民の弱點を攻擊し、遂には排斥を圖るこ

とが將來南米に起つて來るであらうと考へました。

我移民が盛情の異なる外國人と決して友人になり得ないの無理ならぬことであるが、これは日本人が將來海外に發展する上に於て大なる入百の「ハンデキャップ」をなすものである。今日は兎に角幣付きの給料を貰つて居る、ブラジルの移民は五十歳乃至二圓の給料を貰つて居る、ブラジルの移民は二段幕を告げましたが、今後は益々移民を精選して実費なる風潮に向て進むべき時に安んじて平均日に一圓の給料を貰つて居る者や放逸無頼の徒を送らない樣にしなければならぬ。

新聞は其政治家等が移民を送れと叫び、官民共に國民の海外に行くことを奨励する樣の不良の標本を日本に關して智識少き海外へ展示する樣は非常に有身分のある者が海外へ行て、仕事を始める時には非常に勇敢にして豫想せざる誤解を受け事業發展上に榮る損害は決して少なくないので御慮ります。併しながら移民は決して止める可しとは申しませんどこの國でも勞働者は品のよい者ではなく選擇を嚴にする以上は幾干でも送るがよい、移民が彼地に先き走りをして居れば後に彼地に事業を起す人は此等の日本移民を助して自己の業務を助ける樣に出來る、移民も洋人に使はれるよりも日本人に使はるゝことを好むから事業家は非常に仕事をやり易くなる筈である。

移民の利害を攻究して其弊害を除去する方策さへ立つる上は移民事業なるものは將來日本人の海外發展上より考へて必要であると思ひます。

十六、日本人の商業

序に南米地方に於ける日本人の商業に就て少し申します。

アルゼンチン邊では一番多數の人が自殺的最後を遂くるものが以前は日本人の貨物が珍らしいので除程能く賣れた爲め、が其稼互に不當競爭を始めの如きは日本品は秘關で以て競賣を遂る、此の競賣の影響を受けて市内の商店も賣れなくなり、資金に窮する所よりして自分からも競賣をやるの止むを得ざるに至り競賣に次ぐに競賣を以てすると云ふ工合で日本商店が多くの損失を出す爲め日本人の西洋人に困つて居る樣に云ふ有樣である。

利には一車伯剌西爾には二車の日本商店があるが、一二を除けば何れも商況不振に困つて居ると云ふ有樣である。

其他智利、秘露、ブラジルでは如何に現象は問題分之れは因果の報酬で居るが、一般に日本の輸賃を安く賣り出す爲め日本人の商店を開き盛んに日本の輸賃を安く賣り出す爲め日本人の商店を開き盛んに日本の輸賃を安く賣り利には一車伯剌西爾には二車の日本商店があるが、一二を除けば何れも商況不振に困つて居ると云ふ有樣である。

税の高きと支那人及び獨逸人の競爭の爲めに、殊に未だ堅實なる基礎の上に立つて居る者は決して云へない、此の兩地とも日本商人は歐米の商人と大分に心得方が違ふ、簡單な例を擧げて見ると日本人の虎へ行つて一個此處へ組織が何の位這入つて居りますか一と聞いて直ぐ答へ得る人は少い、さうですネーと指を繰つて見なければ分らない、中には全く知らぬ人もある、其の他種々の問題を發して完全に答へて呉れるものはないで、商工業の調査は日本人に就ては餘り多くの材

料を得られない、反之西洋人の商店へ行くと彼等は何事も大體を能く調べて居て敏に明く、且つ敏捷である、此ヶ方の問に對して、差支なく限りは明らかに、彼等は常に多かつた、彼等は常に報告の材料を得ることが非常に多かつた、彼等は常に消息等を記して考へて居る。

彼等は又倶樂部を組織して商業上の組織を交へ、又互に一智識を交換して居る者は實に少く、日本人は或時は此の商人の社交倶樂部に入つて居る者は實に少く、又或時は彼地商業會議所等の人を招待した時に我國の人に應接を遣つて貰ひたいと頼んだ所が、彼等の中に燕尾服を持つて居るものが無いと云ふ、何れも燕尾服は西洋人の社會では日本の袴同樣である、此袴を持つて居らぬ、之れは外人と交際せぬ證據である、斯う云ふ風であるから外人よりは別者視されて居るどうもこう云ふ風では商機に通じ商略を講ずると云ふが如き事は勿論、彼地の趣好を察し、商品を仕込むと云ふが如きも亦現象を見た、又彼等の外人との應接振は寔にまゝ云ふ樣に思つた時々新聞記者、其他に西班牙語の通辯を依頼したが社交的の言葉を全く使へない、實際彼等は語學の力が無い相當の日本の學校を卒業した人は何でも矢張り水の中へ油を入れた樣な傾向がある、此樣では迚も時勢を見て先を制するとか外人にとられた商權を恢復しやうと云ふ樣なことは夢にも考へられない樣に思はれました、諸君の中に私が悲觀する樣に考へられるゝかは知らないが、悲觀ではない實際である、實際に

十七、歐洲に於ける日本商人

歐洲各地に於ける日本人の商業は如何であるかと云ふに、伯林廣しと雖も日本人が日本の貨物を賣つて居る者は多くない、倫敦に於ても一二を除く外は、此の兩地とも日本人の商店のあるのは紐育である、紐育は日本人の商店のあつた、北米的一番多くの日本人の商店のあるのは紐育である、紐育は日本人の商店のあつた、北米的一番多くの日本人の商店を除いては見る足るべきが、それも三井、森村組、其他二三を除いては見る足るべきものはないと云ふ狀況である、而して數年來又は、數十年前に於ては、今日では失敗の極なる者が、此等の各地には相當の店があつて、南米に於ても今日では、重要閉店して仕舞つたのである、南米に於ても今日では失敗の極なる者が、此等の各地には相當の店があつて、南米に於ても今日では、重要閉店して仕舞つたのである、南米に於ても今日では失敗の極西の先例の通りに遂には撤退して仕舞ふと云ふ結果になるのである。

近來は日本の漆器、陶器、玩具等の如きものも大に彼等の知きものも大に彼等他かれ前の如く貴れ行かない、何かが新規軸を出すに非れば年々歳々花相同じでは商賣は出來ない、どうも我々は白人よりは買ふのみであつて賣る額が非常に少い、どうしても、我々は白人に賣り得ざるか倫敦で聞く所に依ると、輸出の調査は、我々は此對白貿易と云ふことに於ては、多くの有力家は、近時影を潜めたと云ふことである、輸出の調査は、結局我々は此對白貿易と云ふことにつきては餘程研究しなければならぬ、輸入入ること、金を借用する事ばかりが對白人の仕事では困る。（完）

優等賞の光榮を擔へる越陽館

本會新潟支會第一回品評會に於て優等賞の光榮を擔へる者を謹しみ賀す、曰く越陽館曰く藏川英次氏曰く上村伊藤左門氏曰く毫に諸氏の名譽として又北越蠶界の美を飾るに足るものイヤ寧ろ氏宗略歴の一端を掲げて江湖の士に紹介せん爲

優等賞の光榮を擔へる越陽館

本會新潟支會の蠶絲品評會を開催するや、其の製品たる生絲を出して優等賞の月桂冠を得たる製絲場あり、是れ岩船郡に其名を知られたる合資會社越陽館なりとす、同館にして今日此の光榮を擔ふに至れるもの必ずや其の因つて來る所なかるべからず、ツモ社長として此經營の任に當れる者は何人ぞ、新潟支會第二回總會に於て其の功績を表彰せられたる小池與惣太君人となり知るべし今日此の果あるを、吾人は進んで此の果の因を探らんかな。

率先器械製絲場を起す

越陽館の所在たる下川郷の地は古來養蠶盛にして產額年と共に增加するの傾向あるとは雖も、製絲の如きは曾て來の舊慣として到哲勉勵晝夜を舍かさりし結果、社運隆々として昂り又昔日の觀なきに至りぬ。

懸賞購繭の法を設ク

當時地方の養蠶家は其の產繭を座繰製絲とせしを以て捨て立て飼て石の原料繭を得るに尙且つ困難を感ぜし狀なりしを以て、嬢張後の原繭購入に際しては部內の產繭のみにて到底不足するを免れず、止なく之を他郡に求むるが故に品質劣惡のものと雖も之を買收するの困難紙に盡くすべからず、茲に於て君率先悟りて此の因を種類の雜駁と飼育法の幼稚とに歸し之より蠶種の統一を企て先づ蠶種の共同購入を絶叫したるに耳を傾くるもの殆どなく、君が誠意も亦認められざらんとせしが君百難を排して之を唱導せしより三十五年に至て漸く之に應ずるものあり乃ち翌年買入原料一口一石以上の者に對して衞產を行ひ優良なるものに賞を懸けて買收し以て間接的に飼育術の改良を奬めたり

此の如くして三十三年には受賞者數僅に五十名なりしも其の好成績に誘はれて三十六年には一百名の多きに倍加せり從て蠶種の共同購入を希望する者漸次增加し、三十五年には七十餘名に達しぬ。

聖上の御買上品となる

明治三十六、七年五回內國勸業博覽會へ其の製絲を出品するや、其製品優良なるの結果賞狀を授けられしが、其內一個は畏くも聖上陛下の御買上品となれり、聖上陛下の光榮とすべきものにして當時社員一同が聖慮のあるところに感激し奮起して聖旨に奉答せんと勵力以て聖旨に奉答せんと勵力したりしといふも亦宜なりといふべし、嗚呼越陽館が事の茲に至れる全く君が他人の爲に及すべからざる忍耐と努力との賜に外ならざるなり。

擴張又擴張

君が努力の結果は益々として製品の上に表れ來り、社運の發展漸く機熟せるものあるより、三十七年第一期擴張として從來の木製三十釜を廢し、木鐵混製六十釜を新設して百釜とし別に木製十五釜を設けて工女養成に充てたり、君意を工女の精神的慰安を圖り、一方に技術奬勵の目的を利用して工女の組織し休日を利用して

優等賞の光榮を擔へる越陽館

新潟縣岩船郡船越村上村越陽館第二工場

君の發憤越陽館を再興す

紫闌茂らんとすれば風之を害ふといふ、越陽館の業之より順ならんとせるも横濱市場に出せる製絲は大不下等品として取扱はれ價格殆ど言ふに堪へざるものありしより館員極力之を挽回せんと力めきと雖も、御業尙浅く研究の至らざるものありしかば此の如きこと三年、多大の損失を蒙りて復た立つ能はざるに至りしより、社員散散し、各涙を呑んで閉業せんとするの止むなきに至れり豈千歲の恨事ならずや。

茲に於て君大に憤を發し、役員海沼氏等非常なる同業新潟、小田源次郎、大田鶴五郎、鈴木與太郎の七氏に於て越陽館全部を引受け合資組織と爲して之が事業を經營することゝなれり、時に明治三十年六月なりとす。

之より社員協力一致、人を各地に派して彼の長を採り之を以て我の短を補ひて只管優等絲の製出に努め、釜數を七十釜を廢し專ら產繭製絲を營むることを以て其の品質の纖敏にして天然の美質を損ずること幾何なるを知らず、茲に於て有志鳩首勇力して十二人繰木製器械を海沼市藏氏の邸內に據付け各自の產繭を集めて製絲を開始せり、之れ越陽館の前身たる下川製絲場なり、然るに其の成績年を追ひ良好に販賣上多大の利益あるより人社員を申込ひもの漸く多きを加へたり、茲に於てか、新に資本金を一萬圓とし名を越陽館と改めて大に事業を擴張し、館を山形縣の羽陽軒に採り、次で蒸汽器械を据付け二十七年以後社運益々盛ならんとせり。

の賞賜賞罰を設けて其の精勤を促す等百方意を用ふるところあるしより、業務は益々擴張し、遂に三十八年北米合衆國聖易萬國大博會に於て銀賞牌を受くるの名譽を擔ふに至れり。

爾來社運進みて百九十餘に至りしが時下の大勢鑑み、更に其の機張を企て、四十一年新に第二工場を設けて二百人練とせる越陽館は今や隆々として此勢あり、君が功豈に大ならずとせんや、君壯にして識見あり、資性聰明にして敏、失敗あるも未だ嘗て一度も之を日にせし事なしといふに至りては君が半面も亦窺ふべからず、然れども裘は一部の成功に與つて力は固より其他社員諸氏、昼夜を問はず、君が今日の成功は一に君の大成を爲すものの、眞に斯業の魁傑といふべきなり。

秋田式を唱導す

當時君が鄕里の桑園は主として商木仕立を採用し來りしが冬期積雪の爲め凍害を蒙むること多く且つ摘葉に不便なるより君之が改善を企て、三十六年岩手縣郡養蠶同業組合の設立を機として巡回教師をして秋田式を唱導せしめたるも之に應ずるもの少く、徒らに舊式を守りて利を捨つる愚を改むるもの爲し、君乃ち自ら率先して之を實行し其の有利なるを減は新聞紙により或は印刷物によりて唱導し大に民心を動ましたるが來て遊せらるゝありて之が指導の機を得しより、各郡爭ひて之を行ふに至りぬ。

鳴呼事の茲に至れる全く君が唱導の結果にして青々として數百町歩に多きに亘る越陽館の秋田式桑園は、實に君が這般の努力を示すものにあらずして何ぞや、君尙齡春秋に富む壯年の日を爲して更に越陽館の大發展を期せられんことを

新潟縣西蒲原郡大鄕村字蒲原鄕高橋岩藏氏旧秋田桑式圖（改良繁殖蠶の茂狀）

優等賞の光榮を擔へる

澁川英太君

年少氣鋭東京に走る

慶應二年八月十五日、君は新潟縣中蒲原郡大鄕村に生る父を鬼子松といひ家世々里正たり、君生れてより頑健且資性快活にして靈性の覇氣あり、常に四隣の惡太郎を半日郊外に走り日夜惡戲を是れ事とせり、長ずるに及びて聰明なるを悲しみ東京に遊びて學を修めんことに

願ふ、なるものあり、而かも父之を許さず、胸中の煩悩更に其の甚しきを加ふるものあり、夜陰に乘じて獨ねて謀し合せたる南蒲原郡鎌田村藤崎某と共に東京に走る、時に君年齢僅に十五歲、年少氣鋭に事を敢て此の事を成す、君にあらずんば能はざるなり、君の東京に出づるや直ちに三井呉服店に入り專心簿記を學ばしめ、翌年無事業を卒へて錦衣故鄕に歸へる、君が當時の得意に想ふべからずや。

身を教育界に投ず

君の鄕に歸へるや、山容樹色舊の如く何等の進歩發達の跡を見ず、君之を視て大に慨し、自ら率先して先づ小學教員を志願して明治十六年新潟縣師範學校に入り、一意專心學を勵み遂に十八年其の課程を卒へて其の年十一月居村小學校に教鞭を執ること風雨日よく兒童を教養して智識の啓發に從ひ、爾來十年一日の如く教鞭を振へり、爲めに君が居村の風大に興り他村の範たるに足るものあるに至れり。

澁川氏の高田式桑園

退いて父祖の業を繼ぐ

優良蠶種の製出

君の鄕に歸へるや、山容樹色舊の如く何等の進歩發達の跡を見ず、君之を視て大に慨し、自ら率先して先づ小學教員を志願して明治十六年新潟縣師範學校に入り、一意專心學を勵み遂に十八年其の課程を卒へて其の年十一月居村小學校に教鞭を執ること風雨日よく兒童を教養して智識の啓發に從ひ、爾來十年一日の如く教鞭を振へり、爲めに君が居村の風大に興り他村の範たるに足るものあるに至れり。

君育英の業に身を委ねてより實に十年、又短き時日にあらず、夙に前後の趨勢を察すれば略ぼ全きに近きものあり、乃ち自ら退いて父祖の業を繼がんと欲し桑樹、桑果、桃等の栽培を行ひ、又更に養蠶製絲に心を潛むることしばなりぬ。

君が嚴父鬼子松氏は早くより養蠶、製絲の業を營み數度の失敗に屈する色なく孜々として其の業に力ひるところありしが、明治三四年の頃蠶種の輸出非常に有利なりし爲め鄕黨擧りて之に從事せるに其の輪出は不幸にして失敗に歸し、鄕黨曾て此の渦中に巻かれ、村内之より製種業は勿論養蠶業にすら從ふものなく、落魄として復た昔の觀なきに至りぬ、此の秋に方り君が嚴父獨り衆論を排して養蠶の業に從へけるが信州見送の栽培を企てゝは、繁枯の爲めに痛く失敗を招き、又立つの能はざるに至るやしも敢て屈せず益々奮勵して其の回復に努め、更に高島、赤木の種類を栽ゑて當初の志を貫徹したり。

君が嚴父は如此にして斯業の爲に盡したるが、君は其の意を體して細大く事に從ひ、時々長野、群馬、福島等の蠶業先進地を遍歷して其の長所、短所を察し之が改良に心を碎きぬ。

明治二十五年君の嚴父は再び蠶種製造を開始したるが翌二十六年會々居宅に火を發して無慘や建物十三棟は烏有に歸しぬ、然れども嚴父更に怠色なく、力を新にし氣を大にして自己の考案に係る居宅兼用蠶室を建築し益々生業の發展を計れり。

二十八年君の名に改めてよりは倍舊の速度を以て業務を擴張し來り、大に美果を收めんとしたるに不幸明治三十一年初めて製造に着手したる秋蠶種は悉く黒種と化し、茲に失敗の悲運に遭ふこと三度、君益々屈せずして稻扱風穴に蠶種の貯藏、究理を委託し以て其目的を達せんと企てけるが稻扱風穴主の容諾するところとならず茲に君が美圖空く終らんとせしも君苦心慘憺機に縣當局の手を經て始めて其の目的を達するを得たりといふ。然れども君嚴父の業を繼承してより不運不幸の襲來すること殆ど端睨に遑あらず爲に折角苦心したる秋蠶種は其製造を斷念せざるを得ざるに至る君が胸中察すべからずや、然も君百折不撓よく天運に抗して自信を遂行し、倒れて後も尙息まざるの勢を以て專ら春蠶種製造に全力を盡し、より業運漸く順に今日に至りては八間に四間四尺の二階建蠶室と六間三尺に四間四尺の増築蠶室、三間に六間の調桑場と三間に七間の貯桑場とを有し鬱蒼として人目を驚かす桑園二町五反餘を信濃川沿岸に選みて中刈、高田式、小野式等各種の栽培法に依れる桑樹を有し、又特に蠶種の無毒ならんを力め、蠶病豫防法發布以前より早く既に蠶病消毒を嚴にし、健蠶、良繭、强蛾を選みて其の製造に從へ、之に依て無毒蠶種の名遠近に高く、曩に內國勸業博覽會に於て有功一等賞を受けたるを始めとし、各所の品評會共進會に出品して受賞せざる事なし、又本會新潟支會に於て「最も徴粒子病毒の尠い蠶種家」の投票募集を行ひし際第二位を以て當選の榮を擔ひ今又同會第一回品評會に於て其出品の蠶種に優等賞を受け本會總裁殿下より特に賞品を拜授す、是正に君が勤勉力行の致す處にして當然の果なるべしと雖も、其精力に至りては常人の到底企て及ぶ處にあらず、編者君が絶大

の名譽を祝すると共に斯界多忙の秋多々益々奮鬪經營せられんことを敢て囑望して止まざるなり。

優等賞の光榮を擔へる 上村伊左衛門翁

壯にして學校を起す

翁は天保十二年五月二十日、新潟縣北魚沼郡堀內村大字根小屋に生る、父祖世々一鄕に名主として聲望あり、父を重左衛門といひ度量精達にして任俠よく人を容れ名主として令名隣保に高かりき、母亦溫厚にしてよく村內を賑し、夫を扶けて內助の功を樹つること多く、又よく翁の敎育に努めたり、翁長じて漸く雙葉の譽あり、早く學に志し分陰、寸暇を惜しみて咿唔の聲を絕たず、十一歲藪神村大字新保なる貝瀨平左衛門、鈴木平右衛門の兩師に就きて學を修む又十四歲の時より廣瀨鄕字中村大羽賀淺之助氏に就きて漢學を究むること二年、大に自得するところあり、長ずるに及んで深く時運の大勢に鑑み發憤措く能はず、乃ち單身柏崎縣に出て情を具して率先居村に學校を起し、以て育英の實を擧げんことを期したり、時に明治六年なりとす、爾來三十年一日の如く學校事務に鞅掌して孜々營々些の倦色を示さゞりきといふ。

裸體となり溫度を檢す

翁の生家は代々農を業とし父祖皆之を勵み傍ら名主の要職を勤めしかば、翁亦幼より農を好み、夙に父祖の愛するところとなれり、十八歲にして早く地租掛に擧げられ明治二十二年町村制の施行と同時に推されて村長となり意を村治に注ぐこと深く、民風爲めに大に揚がるものあり、而かも善行奇範を衒はず、眞摯よく父祖の業を受けて夙起、晏眠粒々辛苦の汗を爲して勉勵せしより一村皆翁の言行に風靡し五風十雨天の序を違はずといふことなかりきといふ。

翁又養蠶を好み每年蟻量十四五匁を飼育し熱心業に從ひて常に之が改良に腐心し、或は棚飼を籠飼に改め、或は靑白を又昔に改むる等些の荒怠を見ず、獨力除沙を爲すこと一夜に三百餘枚を算するが如きは常人の夢想し得ざるところ、若し夫れ自ら裸體となりて蠶室の溫度を檢し、以て蠶兒の寒暖暑熱を察せしといふに至りては眞に至情の美しさを默ぜずんばあらざるなり。翁更に製絲の改良に意を用ひ、又土地の特產根小屋高助の繁殖に力め率先村民を督して其の秀粹を世に出さんことに奔走するところあり。堀內村が郡內蠶業地の模範として今日縣下に其の美を擅すもの實に翁が一心獻替の功とせずんばあるべからず。

率先共同乾繭所稚蠶共同飼育所を設く

翁の居村は魚沼川の沿岸にありて村民皆春夏蠶を飼へり、然れども其の技術未だ足らざるものあり、翁乃ち明治廿八年率先自ら稚蠶共同飼育所を起し、其の改良に力めたりきと雖も未だ機熟せざりしによるか、二年にして之を廢するの止むなきに至れり。翁日夜民富の將來に想到して憂慮措く能はず

本年双之を唱導して率先に業其の緒を得たりといふ。翁夏に共同蚕室の必要を認め田忠次氏等と共同致して蚕室を設立に奔走して遂に居村俣小屋に八石入の共同乾繭所を設置せり、かゝる翁未だ此の如くして尚足らずとし、本年新に共同掃返所を設け、各戸の蔟繊製糸を統一し、進て共同販賣の實を擧げんとし、其の老軀を拔げんとし、東西に奔走しつゝあり。

永平寺管長翁を賞す

翁の家は村内屈指の旧家にして其の遠枝縁族實に二十七戸の多きに及び内壮丁にして徴兵に合格せるもの二十一人の多數なりといふに至りては翁が九族の家庭如何に全きかを察すべし。殊に翁に至りては風に親孝行を以て聞え四十五歳にして父を亡ふや葬儀さゝげといふことなし、後母の病に限りやゝ憂養、看護の勞苦之を其の業とし出でゝは其の心を安からしめ、待して腰肩を撫して心を前後七年、生面の人熟面の人、近隣、郷黨其の行を稱揚せり。時に越前水平寺管長、小出町正覺寺の授戒に來り、之を聞いて其の行を嘉みし、親しく翁を招いて賞詞を賜へりといふ。五十九歳遂に母を喪ふに及びて慟哭數日に及びて殆ども生者必滅の變ずべからざるを觀じ、之より人生歸服して、村民を愛撫せしより人皆歸服して、翁出でゝみて村民を愛撫せしより人皆歸服して翁出づれば衆人手を束ねて困惑せる事も尚目前に厚け村民亦翁のあるときは皆爭ひ働きて喧々たりといふ、翁に皆爭ひ働きて喧々たりといふ、翁に三男四女あり、皆其處を得て家庭春の如きものあり、翁が初めて其の産業を出品して優等賞を得たるもの亦偶然ならずといふべし。

一心岩の如し

昔つて伊勢太廟に參詣せんと欲し、明治元年二月三十日出発、草鞋に身を固めて曉風に面を沸はせつゝ小千谷に來り、更に越中、越後の國境なる番所に至り通過せんとするや、役人之を阻みて許さず、敢て翁に歸宅せんことを強ふ、翁聽かず、役人遂に警力を以て翁を返すこと一里、翁私に謂ふ「我如ぞよ歸らんや」と乃ち糸魚川に來り更に玉の木村より道を木曾街道に轉じ、悠々行旅百二十里二十日の日子を費して遂に其の望を達したりといふ、翁にして一心岩の如きものあり翁の事業にして満美の賞ある又故ありと謂へべし。（終）

蠶業狂と呼ばれた故刈部豐一翁

通常會員　松下儀一

翁の生地は屈指の蠶業地

翁は嘉永六年九月廿日郡山郡中蒲原郡川東村大字小千谷山に生る、性實直蠶行倫愛心に富み、幼にして聰明學を好む、夫小猛は田舎の人士の為に敬愛され、翁は十歳の時父を亡し母の手に育てられ學すること十年、郡内屈指の名家なる旨を聞く。

翁の生れたる川東村は中蒲原郡の東部に位し、東北編貫の川を以て北端郡に界し南信山岳を以て西に早出川流るゝ地域にして、一般に庶藩り平野にして其の人熟面の人、近隣、郷黨其の行を稱揚せり。時に越前水平寺管長、小出町正覺寺の授戒に來り、之を聞いて其の行を嘉みし、親しく翁を招いて賞詞を賜へりといふ。五十九歳遂に母を喪ふに及びて慟哭數日に及びて殆ども生者必滅の變ずべからざるを觀じ、之より人生歸服して、村民を愛撫せしより人皆歸服して翁出づれば衆人手を束ねて困惑せる事も尚目前に厚け村民亦翁のあるときは皆爭ひ働きて喧々たりといふ、翁に三男四女あり、皆其處を得て家庭春の如きものあり、翁が初めて其の産業を出品して優等賞を得たるもの亦偶然ならずといふべし。

新潟文化第二回出品

桑園の改良に苦心す

翁は其附近桑園の荒鳥地に比し極めて劣等にして其比に苦心せるを知り、去て五年四月磯川町強田友吉よりの桑木鶴田市平等数本宛を試植せり、之れ翁の殖産興業の魁となす、赤鶴田等翁の實蹟を其肝に銘して後の望みを隠たる鶴田に遊び治十八年に明治前の桑樹は勿論之等其種の桑樹に至るまで鼓舞の奇品品評會に於て其の鋼育数五百餘の桑樹に死するものあるに拘らず、翁思へらく我が郡士や地質海岸風土ありて鳥作物の繁茂思しからず、幸に蚕呼漸く桑樹が栽植するものあるに至り、蠶業の前途に望みを嘱したり、然るに今此の事業の成るべき為めに役途順拾に來たるや自村の為め民に遺憾にして、之に対し翁は蠶業防遏を謀るは目前に緊急緩なり、研究なすべき自村に實行を為すべきあるのゝ言を聞けり言のみ大なる研究に蠶業に經驗あるのゝ言を聞けり言のみ大なる研究に蠶業に經驗あるのゝ言を聞けり言のみ大なる研究に蠶業に經驗あるのゝ言を聞けり言のみ大なる研究に蠶業に經驗

蠶種の改良に進歩す

此の村に生れ此の家に長じ幼にして養蚕を見聞し時に之に手傳ふ酒く其ずに及んで第二の産業の原味を加へ、自ら蠶種製造に大いに之れに力を傾倒するに至れり、翁が初めて養蚕に従事したるは明治十二年にして、後東京から事に従

率先蠶種の製造に従事す

翁は蠶種の製造に苦心し、一般に庶藩り平野にして其の人熟面の人、近隣、郷黨其の行を稱揚せり。時に越前水平寺管長、小出町正覺寺の授戒に來り、之を聞いて其の行を嘉みし、親しく翁を招いて賞詞を賜へりといふ。五十九歳遂に母を喪ふに及びて慟哭數日に及びて殆ども生者必滅の變ずべからざるを觀じ、之より人生歸服して、村民を愛撫せしより人皆歸服して翁出づれば衆人手を束ねて困惑せる事も尚目前に厚け村民亦翁のあるときは皆爭ひ働きて喧々たりといふ、翁に三男四女あり、皆其處を得て家庭春の如きものあり、翁が初めて其の産業を出品して優等賞を得たるもの亦偶然ならずといふべし。

呼ぶに蠶業狂を以てす

恰も好し此時農商務省第四十一號蠶絲業組合準則發布せられたるを以て多年斯業の不振を憂ひ一日も其發達早からん事を希へる翁は、立つて中蒲原郡蠶絲業組合創設發企の一人となり、伊藤仙太郎松田彦平の二氏を補佐して東奔西走籌略ほ勞するに及んで、顧れば未だ介殻蟲驅除の眞法を發見せず、慚愧身に迫りて耐へず、再び熊倉翁に會し、研究遷延するは失れ丈け我が村の不利益なり、依つて單身上京し大家の教を請はん事を以てす、熊倉氏其の行の壯なるを賞し、種々なる注意を與へて之れを送る、翁直ちに被害桑樹を携へ、山河百里の旅程に上る、之れ翌十九年三月下旬の事なりき。

翁着京後直ちに農商務省に至り、農務局長小野孫三郎氏に面會し携ふる被害桑樹を示して實況を訴へ、蟲々出京せる旨を述ぶ、小野氏大に其の熱心に感じ、懇切丁寧具く之れが驅除豫防の方法及び一般桑樹の病蟲害に就き其の大要を説き尚ほ案内するに麹町區内山下町蠶病試驗場を以てす、翁乃ち同所に至りて教を乞ひ得る處あり、於是か農務局長に謁し請願して同試驗場に入り、微粒子病檢査の傳習を受く、蓋し縣下の蠶業家にして率先此の研究をなす實に異數の事にして何人も之を意表の行動となし、呼ぶに蠶業狂を以てしたり。

故刈部豐一翁

組合長の推選に寢食を忘る

爾來縣蠶絲業組合事務の開始に盡力する處少なからず、同年十一月開所式を擧ぐるを得たり、而かして二十年四月組合會議員並に川東部惣代に選擧せられ、組合事業計畫に參與す、同年八月組長伊藤氏取締役松田氏の故ありて辭職するや痛く之れを憂慮し、同志と謀りて兩氏の内其の何れか復任せられん事を請へども容れられず、乃ち各部惣代と協議し選擧會を開きしも纏まらず、翁焦心直に郡衙に走せ、勸業主任樺澤氏に謀り再び協議會を開くも尙適任者を得ず、終に本縣蠶絲業組合取締所頭取瀨戸口氏の臨席を乞ひ、更に役員選擧會を開き新關村本間新作氏を推薦せしも同氏亦固く辭して動かざるを以て主腦者を缺く事數週に及ぶ、翁茲に於て思へらく中蒲原郡の地つ本縣の中央に位し、河川に富み土地一般肥沃にして栽桑に好適す、幸にして郡蠶絲業組合の創立を見、將來大に斯業の發展を期待せしに、今此の悲境に陷る嗚呼之れ何等の障碍ぞや、組合主腦者就任の遲延は瓦解の基にして、其の影響頗る大なり、曩きに自ら任じて組長選擧の實に當り、事茲に至りて放任するは其の道にあらず、飽迄後任の推薦決定せずんば止まずと、家事を忘れ寢食を廢し、東奔西走名士の勸誘に勉むる事殆んど虛日なし、時恰かも蠶絲業組合中央部幹事星野長太郎氏の本縣に遊說するに遇ひ、北蒲原郡新發田町に會し、我が組合の事情を訴へ意見を叩き、更に同氏の意見書を得て頭取瀨戸口氏と新潟に會議し、共に新津町郡衙に至り、安田正秀氏を說きて初めて組合長兼任の承諾を得ぬ、然れども安田氏は郡長の重任にあり、殊に事務所を離隔し居るを以て總ての衝に當るを許さず、則ち各部惣代と協議し全任を補佐すべき副組長の選擧會を開き、衆議熊倉勘太郎氏を擧ぐるに一決す、丹羽氏と共に夜半同氏を說き承諾を得、茲に幸ふじて組合の命脈を繋ぐに至りぬ、翁の勞や偉大にして其の心事や欽慕すべきなり。

熊倉翁立つて副組長となるや、翁常に之が參謀となり、親しく研究せる蠶種の微粒子檢査勵行の必要を說き、大家の講演技術家の實地指導、品評會の開設等之れが實行に務めたり。

桑苗の共同購入と農產物品評會

二十一年三月農商務省技師船津傳次平氏來遊し、養蠶の根元は桑園にあり依つて其種を選定し栽植するは目下の急なりとの講話を爲す、翁感慨措く能はず、則ち翌二十二年同志と謀り、福島縣伊達郡より赤木、六郎高助等の良種五萬本を取寄せ村内有志に分配栽植せしめ、以來數年數萬本宛の共同購入を繼續せるを以て鄕土の栽桑業勃然として起るに至りぬ。

翁また同二十二年熊倉翁其他に謀り村内農產物品評會を起し農事改良の一助となす、以來七ヶ年明治二十八年まで繼續したりしが郡縣品評會漸く多きに至りたるを以て之れを廢したり。

蠶業教育の道を開く

二十三年内國勸業博覽會開設の際松永技師星野長太郎氏森田眞氏等を訪ひ、大に得る處あり、翌二十四年より原製一蛾飼育を行ひ良種選出の方法を講じぬ、二十五年四ヶ原蠶業試驗場より原種數百蛾の下附を受け、比較試育を行ひ良種選定に務めたり、又同年曩きに福島縣より取寄せたる桑樹漸く繁茂を來し鄕民爭ふて栽植するに至れるを以て、翁は更に進んで養蠶技術啓發に務むる時機到來れるを洞察し、熊倉翁と共に川東養蠶傳習所の設置を計畫し、模範蠶室を造らんが爲め再び上京し、四ヶ原蠶業試驗場群馬縣高山社蠶業學校埼玉縣競進社蠶業學校等に至り蠶室の構造等を視察し意見を徵し、歸來與行四間餘間口十一間餘の蠶室を作り、翌二十六年四月工成り群馬縣高山社より坂本某を聘し、生徒を募集し飼育教授をなすの外、有志養蠶家を巡回し技術の指導をなさしむること九ヶ年に及び、又蠶種一千餘枚を製造し精良蠶種を一般養蠶家に給與したり其特志賞すべからずや。

而して翁は組合創立以來專ら其の經營の衝に當りたるが當時未だ「蠶業は投機的なり」との思想盛んなりしことゝて、親族内に翁が此の擧に反對するものあり、鄕黨の内に冷罵するものあり、翁此の間にありて惇々說破し漸を以て誘掖指導に務む、川東村の蠶業今日あるは全く翁の勞や與つて大なりと云はざるべからず。

新潟支會第二回品評會に出品せる蠶具

自ら巡回教師となる

翁また自村の蠶業に貢獻せるのみならず、二十九年南蒲原郡下條村有志の請を入れて巡回指導の任に當り、爾三年繼續せり、三十五年翠本村の巡回指導をなし翌年また之れを繼續し、共に其の地蠶業の爲め盡す處尠少にあらざるなり。

其職に殪る

三十六年七月熊倉翁の跡を次ぎ、推されて村長となるや、以來數年常に斯業の改良發達に務め、講習講話を開き、模範桑園を起し、品評會共進會博覽會等開設の場合は鄕黨有志の爲め、自ら斡旋乾繭貯繭、運搬其他の勞を取り、或は無償を以て永年共同催青を行ひ、或は中蒲原郡養蠶々種同業組合組織改正後即ち三十二年以來茲に十年評議員の要職にありて同組合の事業經營畫策に參與せられたり、其他公事に盡し未だ世に知られざるもの少なからざるも明治四十二年一月村長並に同業組合評議員在職中逝去す惜むべき哉

然れども翁の斯業の爲に貢獻せられたる功績は何人も之を認むる所にして永遠に湮滅すべきものにあらず、宜なり本秋小千谷町に本會支會第二回總會を開かるゝや、翁は第一に其功績を表彰せられて其面目を施せり 翁たる者聊か以て泉下に瞑目するに足らん。

蠶絲業と冷氣

蠶業講習所長　エフ、ランベール

蠶種越冬の實地

冷氣が蠶種に及ぼす關係は前段述べ來つた處で、明瞭である、之れよりは如何なる方法に依りて冷氣を活動せしむるか當時使用して居る方法は如何なるものであるかを說明しやう

第一　越冬の條件　蠶種を孵化せしむるの目的を以てする通常の越冬に於ても、將た又後冬期間の危險を避けしむるの目的を以てする春期の越冬に於ても、最も適當なる溫度は佛氏零度附近又は零度少し上部も四度乃至七度である。

越冬の期間は成るべく長きを要するが、併し除り長きに失してはならぬ、種屬の何たるを問はず總て蠶種を孵化せしむるには適當なる越冬の期間は引續きたる三ヶ月である、此の期間を過ごすときは胚子は卵中に於て寒氣の威烈の下に惱み且つ死することは實驗の證明する所である。

故に佛氏零度附近の溫度に於て三ヶ月間の冷氣作用は越冬期間の極度である。

第二　佛國に於て產したる蠶種の量及之を越冬せしむるの必要なる場所の容積　佛國に於て每年產出する蠶種の數量は莫大なるものである、其の數は二十五「グラム」の八十萬乃至一百萬「オンス」の間を上下する、之を產出する重なる地方は「ゲアール」「ガール」「ゲオークリユーズ」及「アルプ、マリチーム」も蠶種の產出地として有名である。

此の蠶種を越冬せしむるに必要なる場所の容積は前既に述べた基礎に依て之を算出するのである、即ち二十五「グラム」の一「オンス」に付五「リットル」又は五「デシメートル」立方である、之れを基礎として計算すると前記の蠶種を收容する場所は五千「メートル」立方を要するのである。

之れは八十萬乃至一百萬「オンス」の蠶種が殘らず春期迄佛國に殘留して居ると見た計算である、然るに實際に於ては其の內一部分は初冬以前に外國に輸出せらるゝのであるから前記の數は實際に於て過大である。

越冬の方法

越冬に使用する冷氣に二種ある、天然冷氣及人工冷氣之れである、天然冷氣は無代價若くは僅少の費用を以て得らるゝ點に於て非常に有益である、然れども人工冷氣は其の溫度を自由に上下し、越冬に最も適當なる溫度を、徐々に之を降下し適當の期間を過ぎたる後は更に徐々と溫度を昇騰せしめて濕氣が起れば生石灰塊を以て濕氣を去らしめ、生石灰が粉狀になれば更に歯の生石灰塊と代ふれば宜しいのである。

第二　遠方に於ける山上の越冬　蠶種の產出若くは使用の場所より遠さかつた場所に於て、天然冷氣に依り越冬する山上の越冬を受くる蠶種の數量は頗る少數である、恐らくは十萬「オンス」內外であらう。

山上の越冬は海拔八百「メートル」乃至二千「メートル」の高度に於て爲さるゝのである、此の方法は天然冷氣に依る、其の場の越冬に次ぐ最も便宜で且つ綿密的の方法である。

尤も運搬中の溫度の激變又は山上に於ける濕氣の過度などの危險が此の方法に伴ふのであるが、是等の危險を豫防するのは決して不可能の事ではない。

只此の方法の缺點の甚大なる點は、(此の方法のみに限らず總て遠方に於ける越冬には皆此の缺點が伴ふ)種屋が其の蠶種と別れ總て注文を受けた時、直に之を引渡すことが出來ず、又自分自ら蠶種を保管せずして之れを他人の手に委するの不便がある。

佛國には多くの山上に於ける越冬室がある、其の內最も古るきものは「アルデーシユ」に於ける「ノートル、ダーム、デ、ネージユ」の修道院である、海拔約一千「メートル」の高地に在て數千「オンス」の蠶種を收容するに充分なる室がある、此の外「ゲアンツー」山上氣象觀測所內と「エーグアル」山上の氣象觀測所內とに、越冬室がある、是等は勿論も海拔千五百「メートル」の高度に在つて二萬「オンス」の蠶卵を收容することが出來る。

人工冷氣に依る越冬

必要に應じて思ふが儘に温度を昇降さする自由を有する點に於て、人工冷氣は天然冷氣に比して有益である、此の利益が有るにも拘らず專ら天然冷氣に依る所以のものは、後者は無代價又は僅少の費用を以て得らるゝからである。

蠶種の貯藏又は同一年内に數度の飼育を爲さんが爲めにする人工冷氣の起源は、第一は氷又は其の他の寒劑第二は冷藏器である。

第一 氷又は其の他の寒劑を以て蠶種を越冬せしむることは既述しからぬことである、濕氣多量にして之れを豫防することと殆ど不可能である。

第二 冷藏器 冷藏器は少量の蠶種を越冬さするに適當である、例へば三百「オンス」以内の蠶種を貯藏するに適當である、此の器は肉類、牛乳、「バター」等を貯藏する爲めに、普通一般に使用する冷藏器に外ならぬのである。

此の器の製造方法は種々あるが、或るものは寒劑を容るゝ場所と蠶種を容るゝ場所とが同一水平に在り、他のものは寒劑を容るゝ場所が蠶種を容るる場所の上部に在る。（未完）

製絲工女の出生地

長野縣各製絲工場に於ける工女總數は四萬七千四百八十二人、内訳外の如し千八百八十四人（岐阜縣千九百七十七人、山梨縣二千八百五人、富山縣百四十六人、新潟縣千九百八十五人、千葉縣二千八四人、群馬縣百八十三人、福島縣一人、愛知縣及び静岡縣は各四十九人）即ち昨年に比し總數工女は千三百十四人を増し總數に於て五十五人を減じたりといふ。

桑園年中行事

愛媛縣立農學校教諭 池田榮太郎
馬場由

（十一月立冬小雪陰暦十月節）

此月上旬より冬季である、三日は天長節に當るので戸々國旗を掲して聖壽の萬歳を祝し奉るのである、又二十三日は新嘗祭と稱へ、天皇新穀を神祇に奉り賜ふ日である、蔬菜には松露大根ホウレンソウ等がある。

あらたのし冬立つ窓の釜の音　鬼貫

紅葉見や用意かしこき傘二本　魚村

桑葉は全く落葉し盡し、朝霜に培ふ農夫いとも寒げの風情である、吾人は此月に於て行ふべき行事が尚二三あるのであるが、實に閑なきものは農家である、然れども樂みも之れ其中にあり、孜々勤めて怠らぬこそ農夫の最も貴き處であらう。

枝幹結束

前月は落葉未だ終らぬから上部のみ結束したが、本月は落つべき葉は全く落ち盡して仕舞ふであるから更に其上部を結束し、以て風害の爲に枝條の害せらるゝを防ぎ併せて屈曲を正し又作業に便ならしめねばならぬ。

第四回耕耘

此月下旬から十二月上旬中に於て第二回耕耘を行ふが良い、此耕耘は前回の耕耘と反對に畦間に土を盛り根際を堀ること七八寸にせねばならぬ、ソーして尚二三寸は鍬目を入れ置くのである。

補缺苗栽植

此月から翌春迄の間に堀り取つた桑の補缺苗を植ゆるが良い、適當は根拵へをして植付くべき穴は方一尺五寸深さ二尺とし、底に腐熟した堆肥を入れて薄く土を敷ひ、苗木は七八寸の深さに植付け凹形を存せしめ置くのである。

苗木移植

之亦此月より翌春迄の間に於て行ふが良い、だが業務の都合の許す限りは此月に於て行ひ置くときは根の爲に宜しいのである。

栽植は法は種々あるけれども、先づ桑園と爲るべき地を深さ二尺位に天地返しに耕耘し、後穴又は溝を堀りて植ゑねばならぬが、勞力の都合上溝堀りと爲し、植付後其餘地を深耕するも可なりである。

溝穴の深さは凡そ左の如くである。

	溝穴の深さ
根刈	一尺六寸
中刈	一尺六寸
高刈	一尺八寸
喬木	二尺五寸

之に原肥として堆肥或は厩肥等を多量に施して移植に着手するが良い、そうして植付くべき株數は種類土質に依りて異なるが、概ね一反歩

株數		畦間	株間
根刈	四〇〇―七〇〇	四、五―六、〇	三、五―四、五
中刈	三〇〇―六〇〇	四、五―七、〇	四、〇―五、五

中、刈位が適當であらう、秋田式に仕立つるときは一反歩に六十本乃至七十五本位に止めねばならぬ、左に尚株數速知表を掲げて參考としやう。

畦間 / 株間	二尺	二尺五寸	三尺	三尺五寸	四尺	四尺五寸	五尺	五尺五寸	六尺	六尺五寸	七尺	八尺	九尺	一丈	一丈一尺	一丈二尺
三尺	一、八〇〇	一、四四〇	一、二〇〇	一、〇二八	八八一											
三尺五寸	一、五四三	一、二三四	一、〇二八													

四尺	四尺五寸	五尺	五尺五寸	六尺	六尺五寸	七尺	七尺五寸	八尺	八尺五寸	九尺	九尺五寸	一丈	一丈一尺	一丈二尺
一、三五〇	一、二〇〇	一、〇八〇	九八一	九〇〇	八三〇	七七一	七二〇	六七五	六三五	六〇〇	五六八	五四〇	四九〇	四五〇
一、〇八〇	九六〇	八六四	七八二	七二〇	六六四	六一七	五七六	五四〇	五〇八	四八〇	四五四	四三二	三九二	三六〇
九〇〇	八〇〇	七二〇	六五四	六〇〇	五五三	五一四	四八〇	四五〇	四二三	四〇〇	三七八	三六〇	三二七	三〇〇
七七一	六八五	六一七	五六一	五一四	四九六	四四〇	四一一	三八五	三六三	三四二	三二四	三〇八	三八〇	二五七
六七五	六〇〇	五四〇	四九〇	四五〇	四一五	三八五	三六〇	三三七	三一七	三〇〇	二八四	二七〇	二四五	二二五
	五三三	四八〇	四三六	四〇〇	三六九	三四二	三二〇	三〇〇	二八二	二六六	二五二	二四〇	二一八	二〇〇
		四三二	三九二	三六〇	三三二	三八〇	二八八	二七〇	二五四	二四〇	二二七	二一六	一九六	一八〇
			三五七	三二七	三〇二	二八〇	二六一	二四五	二三一	二一八	二〇六	一九六	一七八	一六三
				三〇〇	二七六	二五七	二四〇	二二五	二一一	二〇〇	一八九	一八〇	一六三	一五四
						二二〇	二〇五	一九二	一八一	一七一	一六二	一五四	一四〇	一二八
								一六八	一五八	一五〇	一四二	一三五	一二三	一一二
										一三三	一二六	一二〇	一〇九	一〇〇
												一〇八	九八	九〇
													九八	八一
														七五

而して之を植代るには充分根拵へ即ち腐敗部及直根又は長き部分を切り去り、施せる原肥土に薄く土を覆て此上に七八寸の深さに栽ひ上部を凹形にし、爾後除草耕耘每に漸次淺くし、九月頃に至りて平面とせねばならぬ、

園中即事

冬月木葉脫　冬至桑葉乾　枯桑知天風
海水知天寒　長宵勞紡績　終歲怯衣單
委忙不得座　看丹葉丹
冬の日は木草殘さぬ霜の色を
はからぬ枝の花にまかふる

最近十ケ年の米價

北箸の調査に係る最近十ケ年の米價及輸出額は左の如くである。

	内國米價（圓）	米穀輸出額（石）	同上價額（圓）
卅二年	[illegible]	[illegible]	[illegible]
卅三年	[illegible]	[illegible]	[illegible]
卅四年	[illegible]	[illegible]	[illegible]
卅五年	[illegible]	[illegible]	[illegible]
卅六年	[illegible]	[illegible]	[illegible]
卅七年	[illegible]	[illegible]	[illegible]
卅八年	[illegible]	[illegible]	[illegible]
卅九年	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十年	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十一年	[illegible]	[illegible]	[illegible]

絲況

横濱市場

昨年に比し一割高位の繭を買入れた製絲家は今に及ぶも相場の引立ぬ爲に、悔々胸安からずの狀態であるが、一體此先絲價はドーなるであらう、少は局面展開して昂進の趨勢に向はねば、大方の製絲家は倒産の不幸を見はせぬかとは識者の憂慮措かざる處である………といつても黄河の流れは隻手の能く留むべきにあらずといつたやうに、世界市場の大勢は吾人の亦如何ともすること能はずで、只指を咬へて其成行の如何を見るの外なしとは情けないと歎又歎て長大息する人もあつたが、併し一陽來復の春にもならば敢て斯う計りでもあるまい、マー／＼氣を揉まずに靜に製絲經營の方針を立て逆境に臨んて、多々益々百倍の勇氣を鼓舞せられたい、ところで、

十一月中の生絲市場 の光景はドーであつたであらう、今例に依て其概況を遠れば、月の上旬は依然米國向き不振の爲に市場は案外不引立の狀態であつたが、併し原料高と荷主の賣惜みとによつて上一番格の如きは五圓高の引締りを告げ八百六十五圓の價格を示した、夫れに歐洲向の買人が進んだので座繰及太筋物は賣人の强張らざる限り賣行くべき模樣にて、市場は漸次回復を加へ來れるものゝ如く見えたが、之れ全く一時の現象に過ぎざりしか、中旬に及んで新規注文殆んど途せず、唯歐洲向補充若くは絲約發表位のことで、市場は恰も火の消えた如く甚しく沈靜に陷つた、されば絲價の如きもいかで下落を免れ得べき八百六十五圓とまで呼聲の聞いた上一番格は遂に八百五十圓となり、折返の如き實に三十圓方の暴落を告げた一方日々の出廻りは千餘箇を計上し在荷は自然堆積して賣人の讓歩を餘義なくせらるゝの有樣なるに突如伊太利絲暴落の飛電は一層人氣に影響を與へたる爲め、氣配は益軟弱となり、殆んど救濟の策も盡き只其成行に任するの外なき悲境は下旬に至るも同樣にて二十五六日頃よりは歐米向の注文も相應に顯はれたが相場は相變らず引立たずして市場には何等活氣を與へず月末に及んで在荷は遂に三萬六千餘箇に上り、上一番格遂に八百四十五圓とまで落ち込んだのである。

價格の差 市場の大勢は先づ以上の如くであつたが、本月中に於ける最高値は美濃の森田館と遠江の水谷製絲の細であつて共に九百九十圓で賣れ行いた、ソコで之を昨年の遠江天龍川社細の千〇五十圓に比較すれば六十圓の相違である、又低直に於ては岩代共同三馬折返が七百五十圓であつたが、之を昨年の同二馬折返の七百六十圓に比較すれば十圓の相違であつて、其高直に於ても低直に於ても共に本年は昨年より

も其成績が良くない、人氣の振はんのも寔に尤もなことてある。

生絲の集散　斯くて此月横濱市場に於てはドノ位生絲が集散したてあらう、何かの參考にもなるてあらうと之を掲ぐれば左表の如くてある。

明治四十二年十月（自一日至卅一日）生絲集散表

	持越	入荷	賣了	地方積戻	積越
器械	二六、〇九八	二六、一〇五	一九、五七五	七九八	三一、八二九
座繰	六、六六五	四、九一一	四、〇六〇半	二六七	七、二四九半
折返し	八六三	一、八一一	一、一三五	四七	一、四九四
韓絲	九〇	一四二	一五〇	—	八二
合計	三三、七一六	三二、九六九	二四、九二〇半	一、一一〇	四〇、六五四半

備考

一、表中單位個は九貫目を指す

二、持越とは客月より本月に持越したるものにして本月一日の調査積越とは本月より翌月に積越すべきものにして本月末日の調査に係る

三、前月分の積越と其數一致せざるは商談中のものありしに依る

四、賣了中米國に輸出せるものは八千七百八俵外に玉絲八十俵歐洲に輸出せるものは五千〇九十三俵にして外に玉絲十俵なりとす

之を昨年の同月に比すれば入荷に於て一千三百三十二箇を増したが、積戻に九十七箇、手合に一萬二千九百二十七箇半賣了に三十八箇半を減少した。

尚參考の爲に九月中に於ける生絲集散日別表を掲ぐれば左表の如くてある。

明治四十二年十月（自一日至三十一日）生絲集散日別表

器械太□　同中△　同細〇　座繰×　折返し＋

日	入荷	手合	賣了	引戻	輸出	地方積戻	國名	社名	種別	最高價	最低價	摘要
一日	一、三五九	二一三	一、一六九半	—	—	四二	陸前 上野	氣仙組 甘樂社米金	×〇	九六〇	八三五	當用商談幾分宛之を得て相場其他變りなし
二日	一、二二三	五〇七	一、三五六半	一九	一、七四八	二〇半	美濃 上野	森田館 碓氷社金紅	×〇	九九〇	八一〇	變りなく弗々賣行けり
三日	—	—	—	—	—	—						日曜日
四日	一、七二五	五六三	六一一	—	—	五九	陸中 相模	陸光館 漸進社	×〇	九五〇	八一〇	一商館買氣ありて信州物及座繰手合出來したる分は五圓高を示したり
五日	一、四六八半	一〇八	一、三八六	一九	一、二二〇	三四半	駿河 岩代	靜凌館 東北社秦	×〇	九八〇	八一〇	樣々商內は出來ざりしも氣配は手堅き方なりし

日	入荷	手合	賣了	引戻	輸出	地方積戻	國名	社名	種別	最高價	最低價	摘要
六日	八四九	五二一	一、〇五三半	九	一、一三三 玉絲二〇	八七	遠江 岩代	水谷製絲 共同三馬	+〇	九九〇	七六〇	必用口の取入にて信州物五圓高に賣行たるが依然歐洲向なりき
七日	一、三八三	三七〇	一、二二五半	—	—	一五一	三河 岩代	一色製絲 共同二馬	+〇	九七五	八二〇	大抵歐洲向の商談にて直段變りなく手合出來せり
八日	九〇九半	二〇五	一、六八三半	九	—	一二〇	美濃 上野	白撰社 交水社金	×〇	九六〇	八四〇	新規手合現はれざるも弗々同直にて商內出來せり
九日	一、四五二	八五四	八六七半	一六	一、一七八	四三	駿河 相模	白水館 漸進社銀	×〇	九七五	八二五	上州座繰の商內の外は目覺しき取組なく氣配變りあらざりし
十日	—	—	—	—	—	—						日曜日
十一日	二、四一八	九〇	一、二二六半	二七	—	五七	岩代 同	共同金蚕 同三馬	+×	九三〇	七七〇	捗々しき入電なく隨て一般に商談薄く靜かの成行なりし
十二日	八二一	五六	六五三	一八	一、一八九	七〇	駿河 武藏	原信社 鶴見川社	×〇	九七〇	八二〇	只少しく安含みの人氣だけにて纏たる商談更になかりし
十三日	一、〇二四	二二五	九三一	—	一、〇五六	二七	下總 上野	須藤製絲 交水社短	×〇	九五〇	八五〇	折返し絲拾圓安にて手合を行へる外は沈靜のまゝ見送れり
十四日	一、〇七三	三八	九八〇半	二八	—	二〇	甲斐 信濃	甲甫社 小口組	□〇	九八〇	八六五	一細筋に少し喰しありしが安唱へなり其他一般續て不味なりし
十五日	一、三三二	四七九	八八七	九	—	四二	武藏 相模	和田製絲 漸進社	×〇	九五〇	八二〇	一二館へ信州物拾圓安にて少しく賣行しが一般氣配薄かりし
十六日	一、〇四六	七二	五八九	—	二、三八二 玉絲一〇	一三	上野 信濃	碓氷社短 林製絲	□×	九四〇	八六五	歐洲向へ補充口僅かに手合出來せしのみ前日に續く人氣なりし
十七日	—	—	—	—	—	—						日曜日
十八日	二、二八八	二〇	九二一半	一八	—	八	美濃 信濃	白露社 金山社	□〇	九七〇	八五五	細筋物に多少喰しを見たる迄にて他は不味の成行なりし
十九日	一、〇三七	五四	六一二	—	—	二三	信濃 上野	新榮館 碓氷社金	×△	九〇〇	八〇五	前報同樣
二十日	一、〇四三	二三六	九九九半	九	—	七	上野 岩代	甘樂社提手 共同二馬	+×	九四〇	八一〇	信州上一番五圓安にて折合細筋は此際甚だしく相場下落せり
廿一日	六九四	五四	一、〇六九半	三五	一、一九一	六四	甲斐 岩代	甲甫社 共同三馬	+〇	九五〇	七五〇	樣々商談なく靜かなれど變りなし

日							産地	製造人	印	價格	記事
廿二日	一、四三六	二一二	五九七	—	—	三三	岩代 信濃	共同金 小口組	□×	九三〇 八五〇	前日同樣變りなかりし
廿三日	九五三	—	中 四五四	—	—	二一					直段折合ざる爲め引續き白眼合にて新規手合皆無なりし
廿四日	—	—	—	—	—	—					日曜日
廿五日	一、六七七	一、五八四	中 五九〇	—	—	二一					座繰折返し手合出來せしが曾在來の注文口へ安直を以て賣渡したる商内とて人氣面白からざりし
廿六日	一、三八六	二二三	九九〇	九	六二八 玉絲五〇	一四	信濃 同	東行社 林組	□○	九二〇 八五〇	信州上一番五圓安にて少しく賣行しのみ纏たる商談なかりし
廿七日	一、二四三	一九八	中 一、〇七九	—	一、〇三二	四三	相模 上野	平本製絲 碓氷社赤	×○	九四〇 八〇〇	相場は前日同樣ながら買氣多からず兎角に不振の商狀なりし
廿八日	一、一〇七	一三四	八四一	—	—	三二	信濃 同	東行社 岡谷日の丸	○○	九二〇 八四五	相變らず沈靜なれど細筋には弗々ながら商談ありき
廿九日	一、〇四二	一一〇	中 一、五三三	—	—	三九	下總 岩代	結城製絲 共同二馬	+○	九二〇 七九〇	商談薄にて沈靜なりし
三十日	九八〇	一九一	六一二	—	一、〇四四 玉絲一〇	二三	信濃 岩代	入○製絲 共同一馬	+□	八四五 八一〇	直段變りなく弗々座繰の手合出來せしも續へて捗々しからざる成行なりし
卅一日	—	—	—	—	—	—					日曜日
合計	三二、九六九	七、三一六	中 二四、九二〇	二二五	三三、八〇一 玉絲九〇	一、一一〇					

尙本年一月以來の生絲集散の狀況を示し且つ十月末に於ける統計と前年の夫れとを對照すれば左の如くである。

▲減は印じた印×印は增した印

年月	持越	入荷	賣了	積戻	殘越	輸出數量	輸出價格（圓）
四十二年一月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十二年二月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十二年三月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十二年四月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十二年五月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十二年六月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十二年七月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十二年八月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十二年九月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十二年十月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
計		[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]	[illegible]
四十一年十月		[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]	[illegible]
比較		[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]	[illegible]

蠶病消毒に就き質問（其一）

靜岡縣 通常會員　和泉德太郎

一、消毒施行に際し「フォルマリン」は非常なる刺激性のものであるから豫定の蠶具を一二人の人夫にては急になすことが出來ない、故に時々休息し網代（竹にて作り二尺三尺のもの）百枚位を大凡一時間位に濕し終り、其間藥品を室外等に放置し散霧したる蠶具を其まゝになし置き、休息（但十分間位づゝ）の後、又施行に取掛るなどの方法にては効力に關係がありますか。

二、「フォルマリン」噴霧消毒法施行に際し、噴霧口に接近して器具消毒をなす時は意外に藥品を徒費するが故に、噴霧口を遠かり散霧せば器具には少しの濕氣を帶ぶる位でも此度合にても効力がありますか、又網代及簇立臺は片面に散霧すればよろしいものですか。

三、噴霧消毒をなすには其器具は濕氣を帶び居るも差支なきものですか。

答　學藝委員　土屋泰

一、「フォルマリン」撒布法に依り蠶具類を消毒する場合は成るべく機敏に撒布して之を重積包圍すべし、否らざれば瓦斯の散逸することが多いから、効力を減少するものである、質問の如く撒布したる蠶具を其儘にして中途休憩するが如きは大に不利である但し稀溶せる「フォルマリン」は器に容れたる儘一時間位室外に放置するも著しく効力を減ずることはない。

二、蠶具類に對する「フォルマリン」の撒布液には自ら一定の適量あり即ち莚箔の如きものは尺十坪平面積に對し一%の液なれば約六〇、立方センチメートルを要するのである、故に長さ三尺五寸幅二尺五寸の蓆なれば百枚に付約二升九合の稀溶液を要する割合である、此割合を以て液を取り其一面に成るべく平均に撒布し、手早く重積するに在るが、噴霧口と可消毒物との距離の如きは右の適量を平均に撒布し得べき程度に於て各自に量知せらるべきである。

三、撒布消毒を行ふ蠶具類には特に濕氣を含有せしむるは宜しくない。

同上（其二）

德島縣 通常會員　吉林庫之進

蠶室、蠶具を消毒するに付き右の件を御教示ありたい。

（一）硫黄薰蒸を行ふ場合に於ける八疊の間に要する量及其方法

（二）噴霧器を以て「フォルマリン」液を撒布せず、單に鍋消毒を行ふ場合に於ける八疊の間に要する量及其方法

答　學藝委員　松田昌德

一、硫黄を燃燒して蠶室の消毒を爲すには其法種々あれども最も容易にして而も最も安全なるは硫黄を鍋の如きものに容れて加熱し其全く溶解するを待ち室の中央に一二尺高さの臺を設けて之に載せ紅灼せる炭火の一塊を溶液中に投入すべしさすれば硫黄は桔梗色の火焔を發し盛に燃燒して亞硫酸瓦斯となり殺菌の作用をなすものである、而して問者は室の容積を記さざれども假に高さ九尺の室とすれば凡四百匁の硫黄を燃燒し十二時間乃至二十時間室を密に封鎖するに於ては今日吾人の知れる蠶病菌中卒倒病菌胞子以外のものに對しては確實に消毒の効あるものである。

二、鍋消毒とは「フォルマリン」蒸發消毒のことであらう、果して然りとすれば所要の「フォルマリン」に凡三四倍量の水を加へて之を鍋に容れ消毒すべき室内に於て加熱沸騰せしめ液の蒸發終りし後四五分間を經て火を室外に取去り、少くも十五時間位其室を密閉すべし、「フォルマリン」の用量は一合二勺位（三十五%の瓦斯を含めるものとして）にて足るのである、然れども坊間販賣せらるゝものは瓦斯の含量往々少なきものがあるから、一合五勺位用ふるを可とする。（一）（二）何れの方法に據るも消毒せんとする室は必ず總ての間隙及障子を二三重張となし、瓦斯洩逸の恐れなき樣に設備し、室内は常に華氏七十度以上の溫を保たしむるを要す、然らざれば前記の藥品量にては更に消毒の効なき者と知らればならない

魯桑實並に銀杏の樹に就き質問

一、巻桑の實を取寶する處及之が造付季節如何ぞたい。
二、小生數年間養蠶しいつも失敗に終りますが、一説には部内に銀杏の樹のある為なりと聞きます、銀杏と蠶兒に害ありやのですか。

答　　學藝委員　土屋泰

一、巻桑の實を取寶する者は山形縣下及愛知縣下に多い然れども取寶者の姓名は明かでないが右兩縣所三部に銀杏は成分を讀はし免金に購入し得らるべしであらう撰種の時期は採集後直ちにするも又翌年五月初旬に於てするも宜しい。
二、銀杏の樹の蠶兒に有害なることは知らない、恐らくは臆説であらう、然れども蠶室の周圍に銀杏の樹木にて有害として存ずるは宜しくない、桑實再な多温なちしむるからである。

結繭せざる繭に就ての質問

島根縣　通常會員　吉岡善太郎

去三月九年の事なり、蠶室に化性(予代南蛮種)蚕通蠶種一枚を北海道より購入し飼育せしに、九月四日目繭生成結果可良解期迎寄一にて結繭完了翌少温度も七十三度九下降せしめさる樓愛育せしに、其後上蔟中、暴も八十度の高温にて昼夜間為なく保温に注意致せしに、何故か六枚の上蔟箱にて正繭百匁弱五百匁の結繭なり見る而已にて他は皆蛹となり未だ甘て見ざるの不成績なりしとは如何なる欠點なりや結果を来たしたものでせう。

答　　學藝委員　農學博士　外山亀太郎

質問の意味明瞭なられども、若し結繭せずして蛹のまゝ蛾となりたるものなれば是は蛹の種生に原して其の種類の体質性質なるものである此の如き事實を質問する場合には全體の蠶兒數、結繭蠶兒數、蛹にて化蛾したる蠶兒數等を明瞭に記載せられたくこゝを望む、尚ほ思慮待べくんば生活したる種の標本五位保存へられたく、質物を添へられる質問は蠶者が蠶物の如く其に生活したる標本を示さざれば生たる標本を示せられたい。

令旨

本日茲に大日本蠶絲會新潟支會第二回總會及第一回品評會褒賞授與式に際し一言以て諸子に告ぐ

方今本邦の蠶業は長足の進歩を爲せりと雖ども其產額に於て增殖の餘地尚なからず其品質に於て尚一段の改良を要するものありて

会場は小千谷町蒋常高等小學校運動場を定めたる、場の廣さ六間に十八間、之に三間に五間の場出をなし、來賓席には六間に七間の運動場を充て又更に貴賓席を二階に設けたり大小の旗幟へりて集心普澄み、蒋蔭、衣嫌として緑の如し此日未明より煙火轟々として冲天を突き從て時移れば從て人殖と蠶界の発展を念頭に置けるの志士、今日の壯觀を見んとして來る子女、行々堵列して又寸尺の空地なからしめんとす盛ならずや、時に第一回の振鈴あり。

開會　と知りて標を正し進々として皆定席に着く、時に午前十一時なりき、第一回振鈴にて會員及出品人着席するや第二回振鈴にて各員來賓と來賓として定席へ町伯押川農商務次官本多理事以下本會役員深町支會副會長の先導によりて着席す、此時樂音朗かに群衆が代を奏し同最敬禮を行ふ、乃ち深町支會長進みて支會第二回總會開會を宣し、正親町伯爵

総裁宮殿下の令旨を捧讀せられたり。

新潟支會能く本會の趣旨を體し鋭意會員の增募に努力し其基礎を確立せしめ依て以て斯業改良の策を講せんとし其第一歩として品評會を開き審査の成績を公表するに當り貞愛特に優等者を賞し併せて本會の爲に貢献せる者に有功章を授與するを得るは洵に欣悦に禁へざる所なり庶幾は會員諸子審査の實績に鑑み一層の奮勵を爲し國家富强の源泉を涵養せんことを期せよ

明治四十二年十月十七日

大日本蠶絲會總裁　大勳位功一級　貞愛親王

終りて支會長清棲伯爵代理深町副會長左の來答文を朗讀せらる。

來答文

本日茲に大日本蠶絲會新潟支會第二回總會並に第一回品評會褒賞授與式か挙行せらるるに當り特に総裁殿下の優渥なる令旨を賜はる段御厚意上の光榮に恐懼感謝仕候、本邦の蠶絲は國富の増進に重大の關係を有するを以て斯業の發達を强く希望する所なり、今日の盛會は御總裁殿下の御聴旨を体し全く是に存ずべき偉才を今一層精勵盛作し會務の擴張と斯業の發達とに努め以て令旨の存る所に応んことを期す請願仕候答す

明治四十二年十月十七日　　大日本蠶絲會新潟支會長　伯爵　清棲家教

次に會頭松平男爵代理本多理事有功章授與の來諭を爲し本多理事代理小地本會書記功記を朗讀するや、正親町伯爵起

新潟支會第二回總會並に第一回品評會

十月十七日大日本會新潟支會第二回總會及第一回蠶絲品評會褒賞授與式を縣下小千谷町に開ク、十五日迄降り續きし雨は開會を賀してか十六日に及び全く歇み、十七日に至りては秋空高く一點の浮雲を見ず、北越の天地は美しき秋の日を浴びて會の幸を祝ふに似たり。

開會地　は小千谷縮布の產を以て天下に其の名を知られたる小千谷町にして三魚沼郡の喉頸を扼し、北魚沼郡第一の名邑たり、西南に船岡山、北に苧郷川あり、東に汪洋たる信濃川を控へて煙繁く開會地として無二の適地たるを認め、町内三箇所に緑門を設け各戸皆國旗、球燈を以て其の軒頭を飾る溢るゝが如き熱誠を以て開會の時刻迎しと待受けたり支會の當局者並に開會地の有志諸氏此の間に立てよく東奔西走數日前より一睡の夢、三椀の食をも溺さずして之れが準備に

て左記四十八名に對し、夫々有功章を授けられたり。

▲一等有功章　伯爵清棲家教
▲二等有功章　深町鍊太郎
▲三等有功章　松田彦平　鈴木貞太郎　遠藤鑛男
▲四等有功章　佐藤興兵衛
二宮直吉　清水申四郎
北見東一郎　齋藤文吾
四戸梅太郎　島田博
秦一二郎　門村直中
▲五等有功章　吉田久平
星名定太郎　阿部致
稻田常吉　關井常彌
小林石次郎　大平康彌
金森輝夫　小出淳太
本間宏　佐藤傳一郎
尾崎松太郎　池島龍育
高頭保造　溝田又八
伊藤惠之助　室賀利一
齋藤常雄　松山仙次郎
圓田國三郎　永野彌一郎
藤木岩八　郡丸綱吉
澤田久三郎　中林虎二
高田又七　宅島林造
熊倉茂樹　千田孫一
關口喜三郎　田中直義
立川仲藏　井上英治郎　三宅治太郎

右授賞に對して深町鍊太郎氏受賞者總代として左の答辭を朗讀せらる。

新潟支會第二回品評會に出品せる新潟縣農事試驗場參考品

答辭

本日を卜して大日本蠶絲會新潟支會第二回總會を開催せらるゝに當り圖らず有功章を授與せらる素等不肖未だ寸功なきに拘らずこの恩賞を辱ふし感激の至りに堪えず

惟ふに方今興國の氣運普く朝野の間に滿ち國富の增進を要すること益々急なり而して富力の增進は蠶絲業の發達に待つこと甚だ多し素等微力と雖ども奮勵努力本會の擴張に盡瘁すると共に斯業の發達に貢獻し以て此恩遇に酬いんことを期す謹て奉答す

有功章拜受者總代　深町鍊太郎

次て幹事長鈴木貞太郎氏立ちて左の如く會務を報告す。

會務報告

一、第一回總會　當支會は去る四十年十月四日新潟縣蠶絲會と合併し組織の變更をなすと同時に第一回總會を開催せり此日本會よりは松平會頭、吉池理事、加藤編輯主任臨場せられ來賓には本多東京蠶業講習所長、鎌谷農商務技師外多數にして來會者四百五十餘名に達せり先づ支會細則を協定し並いで蠶絲業功績者故松田彦平外四名の功績を表彰し當支會の爲永く盡瘁せられたる門村直中氏の功勞を表彰し又十ケ年勤續し且つ技術優等なる製絲工女高橋なか外九十一名に褒賞を授與せり式後講話會を開き松平會頭、本多東京蠶業講習所長、鎌谷農商務技手等の有益なる講話ありたり

一、技務委員囑託　支會細則第十四條に依り四十一年二月一日各郡在勤の縣農業技手及學校講習所等の蠶業教育者二十五名に對し技務委員を囑託せり

一、郡市委員部長會議　本年六月郡市委員部長會議を開催し品評會の開設並に會員募集に關する件に付協議せり

一、商議員會　四十年十一月二十五日商議員會を開き會報發刊に關する件、委員部交付金規則制定の件に付諮詢し更に本年九月十二日再び商議員を招集して第二回總會第一回品評會及蠶絲業功蹟者表彰に關する件を諮詢せり

一、北越の蠶業　當支會報として每月北越蠶業を發行しつゝあり其讀者一千五百名に達す

一、會員募集　第一回總會當時に於ける會員は僅かに八百五十一名にして爾來漸次增加し來りしと雖ども四十一年末に於て一千三名に過ぎざりしが去る六月以來會員の增募に著手し各郡市委員部の非常なる盡力に依り特別會員五百五十二名通常會員七千九百十七名合計八千四百六十九名に達し茲に第二回總會を開催するの氣運に到着せり

右終りて松田支會副會長新潟縣に於ける蠶業功績者故刈部豐一氏以下二十名を讀み上げて惣代を呼び深町支會長代理褒賞を授與し受賞者總代山田巳太郎氏左の答辭を朗讀せり。

答辭

本日大日本蠶絲會新潟支會第一回總會を開き功績表彰の嘉典を擧行せらる惟ふに新潟界の盛事にして斯業發展の一動機と謂ふべし某等微力何等貢獻する處なきに拘らず其選に當れるもの洵に無上の光榮なりとす爾來一層精勵して斯業の改良發展に勗め以て叡選の名譽を空ふせざらんことを期す一同に代り謹て答辭を述ぶ

功績表彰者總代　山田巳太郎

次に松田支會副會長は同一工場に十年以上勤續せる模範製絲工男女百九十名の惣代を呼び深町支會長代理褒賞を授與し、之にて第二回總會を終り、更に品評會褒賞授與式に移れり。

於是か審査委員長蠶業講習所技師町田穰氏は左の申告書を朗讀し褒賞授與の稟申を爲したり。

申告書

大日蠶絲會新潟支會第一回品評會の開會に當り余は審査長の重任を負ひ熱誠にして熱練なる審査員諸氏の補佐により茲に其の任を全うするを得たるは誠に光榮とする所なり

今回の出品點數は蠶二千三百三十八點、蠶絲百八十一點、桑苗百六十八點蠶具七十九點合計二千六百六十四點の多きに達せり今茲に審査の成績に依り之れが槪評を下すべし

一、蠶種は品質良好の者なきにあらずと雖も槪するに種類の雜多調製の不備與改良を要すべき點鮮なからず宜しく良種を精選し還繭選蛾に注意するを要す

二、繭は色澤鮮麗にして繭質豐美なるもののなきにあらずと雖も往々形狀の大小其の度を失し緊緩の硬軟其の宜しきを得ざるものあり殊に其の外觀の美なるに反して絲長の極めて長からざるは最も遺憾とする所なり想ふに本年の天候乾濕適順を得ず從て桑葉の備退蠶兒の發育衰れを失ひ蟲を得ざるものありしに因るべしと雖も抑々亦た飼育の未だ盡さゞるものの肥培の尙ほ盡さゞるものありしに依らずんばあらず宜しく飼育の改善に努め進んで桑園の肥培に努むべし

三、生絲は品質良好のものなきにあらずと雖も槪するに纇節多く强力少なく伸度の乏亦た頗ぶる多きのみならず其の整理に於て大に完全を缺けるものあり宜しく原料の選擇に努め一は以て絲條の改良を圖り他は以て整理の方法を講ずべし

四、桑苗は槪して根幹の發育其の均衡を失し幹部の伸長に比して根部の發育之れに伴はざるもの多し蓋し整地十分ならず淺耕密植にして施肥少なきに基因するものなるべし宜しく改善を要す

五、蠶具は殊に新案として稱讃すべきものなく從つて亦賞するに足るべきものなし然りと雖も品質良好のもの全くなきにあらず唯だ惜むらくは其の價格の廉ならざるため實用品として見るべからざるものあり宜しく注意を要す

之れを要するに蠶絲業の發達は決して之れを偶斷的改良に求むべきものならず必らずや以上各種の聯絡的進步に待たざるべからず之れを以て苟くも斯業の改善を以て任ずるものは須らく此の大勢に鑑み共同一致以て且つ具體的改善に努めざるべからず此に各種出品中優良なるものに就き更に選拔擬賞せり依て別冊人名により褒賞の授與あらんことを申請す

明治四十二年十月十七日

大日本蠶絲會新潟支會

第一回品評會審査員町田榊

生糸　蠶種

新潟縣岩船郡　越陽館
同中蒲原郡内村　諸川英太
同北魚沼郡堀内村　上村伊左衛門

右に於て深即支會長代理夏に二等賞以下の受賞者に對して褒賞を授與せられ終りて押川農商務大官は左の告辭を代讀せられたり。

告辭

右に於て日本蠶絲會新潟支會第一回品評會蚕資授與式を擧行せらるゝに際し一言以て會員諸氏に告ぐ蠶業は本邦重要物産にして新業の發達は國家富力の消長に關す故に蠶業の發展を謀り其生産を増加するに到て今日の急務なりとす

新潟は産繭量の多きと繭生産物産の地位に達せず然れども既往歩の狀況に鑑ぜに之れが経営を熟慮するに繭から産繭の増殖と品質の改良とを謀り一致本邦世界の有力勢敵に對抗する覚悟あるを要す然れば會員諸君奮勉而して外品質向上に努力し能く新業の経営を決して現狀に甘んずべきものにあらず

今や本支會は總會員に品評會を開き新業の改良發達に資せんとす茲に時宜に適したるものと謂ふべし程遠の露の蚕資に場たるなり願くば會員諸氏本日の盛儀を機とし益々奮勉せられんことを

明治四十二年十月十七日

農商務大臣男爵大浦兼武

次に本多理事は本會を顧代理として左の告辭を朗讀せらる

告辭

新潟縣は本邦有數の産繭地にして繭種の産額殆ど全国の十分の一を占め其産繭額は第十位に列し比類無類なる地位にあるに過ぎず本縣の如き大繭を以て産出する所の繭は本邦の産繭者に於ては一般に一般の人員を要さず切磋琢磨の効空しからざるを信ずるに似たり。知らず來觀者如何なる感を抱かしつゝ開會當日の觀者凡そ一萬三千人幾千の折詰は早く既に散じ盡して多大の不足を生ずるに至る以て其盛況の一般を下するに足るなり。

より品評會場を觀覽したり。

船岡山　正親町伯爵の一行は午後二時新布堂に參拜し、更に船岡山に招魂社に詣でたり、社は戊辰の難に殉ぜし山口、豐浦の藩士七十三名の英靈を祀れるところ、山縣公の撰に係る碑あり、境域は更に山水絶佳の地、遠く眼を四方に放てば八海山駒ヶ嶽の高嶺、櫛は更なり領産角田の霊峯蛇ヶ然として聚蛇の如く北越の平原を縫ひ流れ信濃川の大流銀蛇の如く、妙なる眺めを望めば見の古戦場あり、是れ殉國の志士が刀折れ弾尽くるも尚一意國の為に血戦せしところ、一行は往時を追想しつゝ下山し、午後六時成就院に開かれたる北魚沼郡協賛會及支會主催の**慰勞會**に臨みたり、會する者百八十餘名、席上深町内務部長の挨拶あり、正親町伯爵來賓總代として之が謝辞を述べ、主客互に献杯を盛くして散會し、更に清棲支會長の招待會に臨み無事式を終りたり。

出品　品評會に於ける出品は二千六百七十六點、此の外參考品として出發繭、人造絹織物、蠶兒經過、蠶病標本等八百九十餘點あり、何れも精を抜き粋を蒐めたるもの、北越の蠶業が如何に長足の進歩を爲せるかを表顯し得て餘りあり、殊に金紙の用らられる繭篇生絲の優等三品は特に一般の人員を要さず切磋琢磨の効空しからざるを信ずるに似たり。知らず來觀者如何なる感を抱かしつゝ開會當日の觀者凡そ一萬三千人幾千の折詰は早く既に散じ盡して多大の不足を生ずるに至る以て其盛況の一般を下するに足るなり。

講話會　式後松田支會長の開會の辭に依りて講話會開かれ、大多東京蠶業講習所長及び鹿谷農商務技師の講演ありたるが、翌十八日午前九時より町田審査長及町田高山技師の講演に傾聴せり。

閉會　會衆無慮一萬餘、穏有の秋時に際近より集り來れるもの波を揚げ、以上の諸項整然として共の序を誤らず進行し、遂に海沼氏の答辞に亞で深町支會副會長閉會を宣し、順次退場して無事式を終れるは日出度し。

式後本會役員及來賓一同は會場内にて晩餐を喫し、夫れ知らず蚕業者決して北海に劣ざるべきにあらず蚕支會風に鼓るゝあり支會の發展は駸々歩進を發展なりと篤く殷懃の意を以て會員諸氏の努力して茲に愈々其進歩を發展し蠶業の根本的要素なり殖産興業の根柢なり更に品評會を開設して會員諸氏の研究に資せんとす我れかを其發達を期せんことを切望せらるゝものなり本日第二回總會を開き併て蚕資授與の式典を擧行せらるゝに際し本縣蠶業の既往に鑑み將來の方針を熟慮し本縣蠶業の發達を謀り本縣蠶業の改良を期せんことを切望せらるゝものなり本縣は繭種の産額は第十位に列し比類無類なる地位にあるに過ぎず本縣の如き大繭を以て産出する所の繭は本邦の産繭者に於ては一般に一般の人員を要さず切磋琢磨の効空しからざるを信ずるに似たり。知らず今日の來觀者如何なる感を抱かしつゝ開會當日の觀者凡そ一萬三千人幾千の折詰は早く既に散じ盡して多大の不足を生ずるに至る以て其盛況の一般を下するに足るなり。

明治四十二年十月十七日

受賞者總代海沼市蔵

本縣蠶絲會新潟支會品評會表彰式に其審査結了告げ蚕資授與の盛典を擧行せらるゝ縣下新業の爲め而に慶賀すべき事なりとす茲幸に蚕資の盛典を賜へる者欣喜何者か之れに者たんや別して新業の改良發達に尽瘁の光榮を失はざらんことを祈願す

明治四十二年十月十七日

受賞者總代海沼市蔵

閉會　會衆無慮一萬餘、穏有の秋時に際近より集り來れるもの波を揚げ、以上の諸項整然として共の序を誤らず進行し、遂に海沼氏の答辞に亞で深町支會副會長閉會を宣し、順次退場して無事式を終れるは日出度し。

式後本會役員及來賓一同は會場内にて晩餐を喫し、夫れ之に對して**海沼市蔵氏受賞者總代として左の答辞を朗讀せり。**

答辞

本縣蠶絲會新潟支會品評會表彰式に其審査結了告げ蚕資授與の盛典を擧行せらるゝ縣下新業の爲め而に慶賀すべき事なりとす茲幸に蚕資の盛典を賜へる者欣喜何者か之れに者たんや別して新業の改良發達に尽瘁の光榮を失はざらんことを祈れかに其審査の光榮を失はざらんことを祈願す

受賞者總代海沼市蔵

下野支會第十回品評會

本會下野支會第十回品評會は桐木縣安蘇郡佐野町に十月十七日より開かれ十八日迄の二日間に當れる機を初め幹部は勿論會員は遠く其第十回に當れる機とし、大に會員を增募し豫定以上の會員を得て支會の基礎を確立すると共に總裁殿下の台臨を仰ぎ、奉公之を革進の勤機となし、大に斯業の改善を發達を計り以て兩島の先驅を逐ひ北上州の先驅を逐ひ其歩武を整へ機の熟するを待たりしが滿つれば割くる月のみかは

總裁殿下に於かせられても、支會當局並に會員の意を愛でさせられ、台臨あらせらるゝ御豫定に御在しましかど初秋のいまだ不順なる氣候にありたれにや御不例に渡せられ湯河原に御療養遊ばさるゝ程なりしかば御沙汰止となりぬ

るも支會の幸薄き、されど塚田御附武官御使遣の特寵を蒙り、又御會の恐懼する所にして開催地佐野町の幸若干せり。

仲秋の煙霧亂れて金波湧くや十七日上野驛發午後一時四十分發の列車は御名代塚田御附武官を載せプラットホームを離れぬ、本會より、松平會頭代理として、桑田理事、重岡、金谷の兩書記を伴ひ、農商務省よりは、下國農務局長大臣代理として小泉技手を伴ひ隨伴せり、小春日和の空、殊に紺碧の色深く上野の國ゆ人足繁き旅日を跡にして武藏野の東北を横ぎれば、五日の風もなく十日の雨にも逢はざりける豐年の乘穂の早稻は いつしか刈取られ今日を祭らん神事の御米となりて藁の青々と伸びたるも荒川の邊りに見えつ、こなたには妹背の堤鶴、綿しげに黄みて首俯垂るも見えつ送りつ樣々に變り迎ふる秋の野の彌やしまよ、斯くて小山を過ぎ栃木邊を過ぎる折は暮雲峯に迫りて間々層雲の翼らるゝも見えしが、金今日の夕陽上毛の山に近くに及びては眞紅に染めて餘映を層雲に漏し遥かに望めば、漫間の燈は、暗くしてしかと見えず分かねど、あたりは今を眞盛に煙霧そこ此處の蛙より起りて得も云はれぬ黄昏の幕を垂れぬ例へば三彈荒に就く御庭に集くよ小蝿、蚊の時雨降める風情なり、折からさつと一陣の誘ふ野分に當れり金波是よりも湯かんとする頃佐野に着きぬ。

新聞紙支會第二回品評會に出品せる發芽品

茲に中山支會長初め幹部役員其他に迎へられ、御付武官は日吉銀行に本會一行は古城館に下國農務局長は小泉技手と共に佐野館に入ぬ吉澤本會主事は曩に山梨支會第二回品評會に賞品を與ふるは眞愛の深く滿足する所なり惟ふに本邦の靈業は近時著しく其歩を進め今や國産の主腦として重きを國家經濟の上に致せりと雖も國運の進歩は斯業の發展を促すこと急にして寸時も倫安を許さざるものあり下野支會夙に鑑みる所あり專心斯業の改善發達を期し品評會を開くこと茲に十回に及び今や其成績大に觀るべきものあり又能く本會の意を體し協心戮力多數の會員を增募せりと聽く是誠に支會の基礎の確立すると共に本會の事業に一歩を添へたるものと謂ふべし然りと雖も前途尚遼遠なり庶幾くは會員諸子爾後益々奮勵愛雖に堪へ斯業の進歩に努め以て國富の增進に資せんことを期せよ

明治四十二年十月十八日

大日本靈絲會總裁

大勳位功二級　貞愛　親王

令旨

今日下野支會第十回品評會に際し本會の爲めに功勞ある諸子に有功章を授け優秀の良品を出陳せる者に賞品を與ふるは眞愛の深く滿足する所なり惟ふに本邦の靈業は近時著しく其歩を進め今や國産の主腦として重きを國家經濟の上に致せりと雖も國運の進歩は斯業の發展を促すこと急にして寸時も倫安を許さざるものあり下野支會夙に鑑みる所あり專心斯業の改善發達を期し品評會を開くこと茲に十回に及び今や其成績大に觀るべきものあり又能く本會の意を體し協心戮力多數の會員を增募せりと聽く是誠に支會の基礎の確立すると共に本會の事業に一歩を添へたるものと謂ふべし然りと雖も前途尚遼遠なり庶幾くは會員諸子爾後益々奮勵愛雖に堪へ斯業の進歩に努め以て國富の增進に資せんことを期せよ

明治四十二年十月十八日

大日本靈絲會總裁

大勳位功二級　貞愛　親王

茲に引き返して佐野町主催全國綿糸連合會郡役所内に入れば其特工と廣慣なる唾壺せしひるものあり、宜なり佐野町は輸出木綿糸にては其精緻全國に冠たる上に其量又比肩するものなく今や筑波の麓迄其餘澤及べりと。

車を轉じて町の北西なる式場縣立佐野中學校に向ふ式場に宛てたる大講堂は既に二千餘の會衆を呑みて開會を待てやがて第一鍵鳴は鳴りぬ一同定席に着くや第三鍵を合圖に中山支會長の先導にて總裁殿下御名代塚田御附武官を大佐は左の御令旨を朗讀せり

令旨

今日下野支會第十回品評會に際し本會の爲めに功勞ある諸子に有功章を授け優秀の良品を出陳せる者に賞品を與ふるは眞愛の深く滿足する所なり惟ふに本邦の靈業は近時著しく其歩を進め今や國産の主腦として重きを國家經濟の上に致せりと雖も國運の進歩は斯業の發展を促すこと急にして寸時も倫安を許さざるものあり下野支會夙に鑑みる所あり專心斯業の改善發達を期し品評會を開くこと茲に十回に及び今や其成績大に觀るべきものあり又能く本會の意を體し協心戮力多數の會員を增募せりと聽く是誠に支會の基礎の確立すると共に本會の事業に一歩を添へたるものと謂ふべし然りと雖も前途尚遼遠なり庶幾くは會員諸子爾後益々奮勵愛雖に堪へ斯業の進歩に努め以て國富の增進に資せんことを期せよ

明治四十二年十月十八日

大日本靈絲會總裁

大勳位功二級　貞愛　親王

次て中山支會長は進て令旨を拜受し後左の奉答を爲せり。

今日大日本蠶絲會下野支會第十回品評會褒賞授與式の盛典を擧ぐるに膺り優渥なる總裁殿下の御令旨を拜す是洵に當支會の光榮にして不肖の感激措く能はざる所なり惟ふに我國の蠶絲貿易は歳と共に急足の發展をなし今や我國產の重要なる部分を占むるに至れり然りと雖も其品質に將又其產額に就き尙對外競爭國に一歩を讓るの憾みあり故に內品質の改良と產額の增加を計り以て海外市場に其覇を爭ふの策を講ずるは實に現下の急務にして當業者諸子の任なりと信ず當支會竝を茲に立て品評會を開催すること茲に十回以て當業者研鑽琢磨の材に供したりと雖も微力にして其効力擧らざるは憾とせり然るに機一たび至り當業者感奮興起一擧にして豫定の入會者を得支會の基礎を確定するを得たるのみならず出品點數の多き前回に其比を見ざるの盛況を呈するに至れり是れ偏に總裁殿下御懿德の然らしむる處にして其德澤に浴するにあらずんば爲ぞ克く斯の如きを得んや實に斯業の爲め慶賀に堪えざる處なり顧れば本縣の蠶絲業は其前途尙遼遠なり不肖等不敏なりと雖も令旨のある所を奉じ益々奮勵努力以て本日の光榮に悖らざらんことを期す謹んで奉答す

明治四十二年十月十八日

大日本蠶絲會下野支會長正五位勳四等　中山己代藏

次て松平會頭代理桑田理事は本會に功勞あるものに對し有功章授與の稟請をなし吉池本會主事功記を朗讀し總裁殿下御名代より左記の功勞者に一々有功章を桑田會頭代理より功記を授與せり。

有功章授賞者名

▲二等有功章　中山己代藏

▲三等有功章　樋口助治　田村律之助　井上伍魄

大塚順吉　土屋雄一

▲四等有功章　中森茂八　服部昌松

▲五等有功章　梅村寬逸　長井謙三　瀧川末明

青木浦次郎　野口福三郎　黑崎榮次郎　齋藤五郎八

前田民之助　菅野男吉　水野鐘太郎　石田龍重

篠崎民造

而して右授賞者總代として大塚安蘇委員部長は答辭を述べたり。

右終りて中山支會長より模範製絲工女に褒賞を授與したる後品評會褒賞授與式に移り土屋審查委員長は詳細なる審查報告を爲したる後擬賞者に褒賞授與の稟請を爲せり仍て塚田御名代より左記優等賞者に賞狀を桑田會頭代理より賞品を授與せり。

繭優等賞　栃木縣那須郡馬頭町　星　權

生絲優等賞　栃木縣下都賀郡野木村　新井重七郎

尋て繭、蠶種、生絲の一等賞者には銘々に二等賞以下には其總代に賞狀を桑田會頭代理より賞品を支會長より授與せり。

右終りて會頭代理桑田理事は左の告辭を朗讀せり。

告　辭（下野支會）

維新以來我對外貿易は日一日と其隆盛を加へ明治元年には輸出額僅に一千五百萬圓に過ぎざりしもの昨四十一年には三億七十萬圓の上に出で四十餘年間に二十倍餘の增加を見るに至れりと雖も海外諸國に比すれば尙十四位の下層に在り更に一段の努力を要し百尺竿頭更に歩を進めざるべからざるの秋なり然り而して三億餘萬圓の貿易品中其三割强を占むるものは蠶絲にして之が盛衰は直ちに國家經濟の消長に關するのみならず之を內にしては發展の餘地綽々たるものあり之を外にしては需要の增加期して待つべきものあり故に國運の發展に伴ひ國力の充實を謀るには蠶絲業の改良發達を以て其第一要義とせざるべからず然るに貿易事業の發展に連れ海外の政況並に經濟界の變動は需給兩者間に重大なる波響を及ぼすは免かるべからざるの勢なり故に此波響を輕減し秩序的の發達を爲さしめんとせば宇內の各方面に販路の擴張を計ると共に常に海外の事情を調査し當業者を警告し內は技術の練磨と堅實なる結合力とに依り事業の基礎を鞏固ならしめざるべからず本會は此の要求に應じて立ち事業の一半として力を茲に盡さんことを期するも未だ其目的を貫徹する能はざるを憾みとせり然るに當局者の熱誠と會員諸君の盡力とに依り今や會員の數十餘萬に達し相提携呼應して如上の針路を取りつゝあり下野支會當局亦會員諸君亦茲に見る處あり品評會を開くこと茲に十回に及び其開設度數の多き實に支會中に冠絶す然り而して今回出陳せる出品數の夥多品位優良なる當支會品評會に於ては蓋し空前なるべし加ふるに今回特に會員の增募に務め大に支會の基礎を强固にし以て本縣蠶業の進捗に資せんとす洵に時宜を得たりと云ふべし

今や出品の審查完了を告け本日褒賞授與の典を擧ぐるに當り忝くも　總裁殿下より優渥なる令旨を賜はり本會の爲に盡瘁せられたる諸君に有功章を出品中の秀絕なるものに賞品を授與せらる是れ當支會の名譽は勿論本會の光榮とする處なり

惟ふに本縣の蠶業は近時稍見るべき發達を爲せりと雖も先進地に比すれば蠶種の製立枚數及桑園反別に比し其收繭量甚だ尠なきが如きは未だ桑園の肥培に蠶種の改良に飼育技術の練磨に尙講究至らざる者多きに據らずんば非ず是れ當業者の大に反省すべき點たるを信ず希くは會員諸君能く令旨のある所を奉戴し審査の實蹟に鑑み今回を以て蠶絲業革新の動機と爲し穩健着實之に膺り品質を改良し產額を增し以て國家の富源を涵養せられん事を聊か希望を述べて告辭とす

右に尋て下岡農商務大臣代理は左の告辭を朗讀せり。

告　辭

現時世界の大勢國運の現狀は富力の發達を促して止まず富力の發達は產業の興隆に待たざるべからず而して本邦生產物中常に海外貿易の首位を占め國家經濟を潤澤ならしむるは蠶絲業を措いて他に求むべからず之に依り蠶絲生產の增加と品質の改良に勉め益々斯業の振興を期するは實に國家急要の事に屬す由來本縣は養蠶の歷史古く近時亦長足の進歩をなせりと雖も尙未だ後進諸國に及ばざるものあり是本縣特種有利の農產物に富むの結果なるべしと雖も亦以て一層の奮勵を望まざる可からず今や大日本蠶絲會下野支會は茲に第十回品評會を開き諸子に授長補短の機を與へ本日を卜して褒賞授與式を擧行す希くは諸子爾今益々振ふて斯業の改善發達に奮進努力し以て國富の充實に貢獻せられんことを

明治四十二年十月十八日

農商務大臣　大浦兼武

次に來賓高久代議士及碓井縣會議員の祝辭受賞者總代那須郡馬頭町星權氏の答辭ありて式を終はり總裁宮殿下御名代御退場一同最敬禮をなし田村副會長閉會を宣告し一同退場せしは午前十一時二十分なりき。

品評會と佐野町

今次佐野町に於ける品評會は一二にして止らず、本會支會の品評會、農產物品評會、繭品評會、教育品展覽會等其數多く從て多方面に亘れるには相違なきも偉大の成功にして日々看客二萬を下らず汽車の發着毎に廣からぬ停車場は押し合ひへし合ひ殆んど死傷者を出さん計りの盛況を呈し遺憾なく其目的を達せられたるを信ずると同時に斯く奏功し得る丈け夫丈け當局は勿論安蘇郡長を始め佐野町有志の盡力は尠少ならざりしを思はずんばあらず、加ふるに熱誠を込めし歡迎に、來るもの嬉々然として希望の光を浮べ、歸るもの未來を夢みて勇躍明日より努力の色を表はしぬ、加ふるに審查當局の肺腑を衝く講評を以てし遺憾なく各種の安息日を佐野町に集め得たるを茲に謹而謝し併て後の日尙より多くの成功を得べき安息日の來らんを希ふ。

終りに臨み一行に對する歡待を深く謝す。（夕星）

諮問案に關する調査會

農商務大臣より本會に對し諮問せられたる蠶病豫防法及繭貫統一に關する二件は蠶絲界に於ける大問題たるを以て、松平會頭には慎重の態度を取り、之を全國有名の學者及實業家の意見に徵し、十二分の調査を爲したる結果を答申するの緊要なるを認め、左記委員諸氏に囑托して去月二十五日より同三十日迄、本會々議室に於て、其調査を爲したり。

蠶病豫防改正に關する調査委員（姓名いろは順）

池田常藏　橋本宣吾　針塚長太郎　鳥羽久吾
大森順造　小野元兵衛　土屋泰　角田喜右作
脇田重太郎　中島精一　南條吉左衛門　山崎榮藏
増子穂之助　梅木周吉　法學博士佐々木忠次郎　下田伊左衛門

繭貫統一に關する調査委員

伊藤富治郎　伊藤三郎　今井吾介　岩田太郎
林驛作　萩原鍵太郎　原富太郎　波多野鶴吉
八田達也　法學博士外山龜太郎　尾澤琢郎　龜井喜三郎
田口百三　渡部眞太郎　谷津市之助　工藤善助
町田菊次郎　前田健次　降旗元太郎　北村七郎
茂木保平

評議員會

十一月一日午後二時より本會々議室に於て評議員會を開きたり當日の出席者左の如し。

（姓名いろは順）

今西直次郎　針塚長太郎　芳賀權四郎
八田達也　羽田桂之進　本多岩次郎
尾澤琢郎　若尾璄造　辻儀太郎
土屋泰　角田喜右作　練木喜三
南條吉左衛門　工藤善助　法學博士桑田熊藏
北村七郎　下田伊左衛門　須藤嘉吉

當日の議題は左の如くして本多理事會頭代理として議長席に着き第一案に就ては八月南條工藤の諸氏第二案以下は吉池主事之を說明し何れも異議無く原案の如く可決確定したり

一農商務省よりの諮問事項に對する答申
二建築資金及基本金の一部支出の件
三製絲工女競技會規定案
四四十三年の總會を愛知縣聯合共進會を機とし開設すること
五群馬縣に大會を開くこと
六伊藤公爵の弔辭
七栃木縣團體實業大會決議の件

故伊藤公爵へ弔辭

國家の元勳伊藤公爵去十月二十六日（哈爾賓）に於て韓人安應七の兇手に斃り突如薨去せられたるは國民一般の痛歎措く能はざる處なるが、本月四日日比谷公園に於て公の國葬營まれたるに依り、本會は哀悼の誠意を表せん爲左の弔辭を贈りたり。

弔辭

樞密院議長大勳位公爵伊藤博文閣下に異域に遭ひ遂に薨去せられたるは國家の爲め洵に痛歎の至に堪へず茲に本會は恭く哀悼の意を表し謹て弔辭を呈す

製絲工女競技會規程

第一條　支會に於て製絲工女競技會を開設する必要ありと認むるときは豫め規程を定め本會の認可を受くべし

第二條　本會は製絲工女競技會に於て優等の選に入りたる者に對し會頭名を以て褒賞を授與す

第三條　前條の場合に於ては支會長は豫め優等者の姓名及審査の成績を具し本會々頭に申告すべし

支會の設置及支會職員の囑託

鳥取縣には從來地方委員部を置き會務を處理致し來りたる處今回會務の發展を期し同委員部を廢し本會支會を設置し本會々頭の推薦に依り同支會長左の通　總裁殿下より囑託あらせられたり。

鳥取支會長　告森

本會東京支會副會長及宮城、福井、福岡の三支會委員部長中更迭異動ありたるに付各支會長の推薦に依り副會長は總裁殿下より、委員部長は本會々頭より夫々左の通囑託せられたり。

東京支會副會長　鈴木隆
宮城支會桃生委員部長　上田景安
福井支會委員部長　吉田　木下參一　大飯　岡部直道
大野　若杉晉
福岡支會委員部長　宗像　東喜之助　鞍手　津田如廣
三池　池田芳一

特別會員の推擧

左記の諸氏は本會會務に貢獻せられたる功勞顯著なるを以て總裁殿下の台覽に達し本會々頭より夫々特別會員に推擧せられたり。

新潟支會　島山友太郎　遠藤要之助　廣井三千雄　田中久太
近英作　齋藤芳治　渡邊喜作　尾崎松太郎
山田德太郎　石川彌一郎　矢川繁太郎　齋藤武次郎
今井民之丞　川上應太郎　原敬三　立川晉作
藤塚重次郎　田中藤男　長谷川彌五八　石橋要七
小黑寅平　星野周藏　福原信太郎　村山泰助
中村周二　大島猛之丞　木村久英　澤田要八
山上利八　中島直一　米山文吉　田中友右エ門
關猪左衛門　鈴木勇次郎　柿沼儀三郎　渡邊保忠
星野保藏　青木勝太郎　繁原月渊　齋藤省三
猪又房五郎　井合應平　伊藤喜作　小柳長太郎
鈴木博　關口喜一　大森知貫　黑澗繁太郎
鈴木順次郎　菊地吉太郎　岸榮樹　星野忠吉
關富三郎　石坂平八郎　中林杏　渡邊五右エ門
八木純吉　上村粕治　星野邦一郎　渡邊清吉
松原榮太　遠藤三郎　櫻井政五郎　佐藤又一郎
馬場藤太郎　關矢龍太郎　榎本仁太郎　佐藤眞二
佐藤藤三郎　佐藤金助　中村不二　淺野榮治
山田猪三郎　坪谷諦信　梅澤德治　青木不一郎
大瀧千尋　相馬進　藤藏芳謙　鈴木篤太郎
澤富一郎　鹽原龜次郎　小野陽吉　金山文藏
木間百左衛門　田村堅一郎　山本亥三郎　巖崎銀平
西村民治　三須賢三郎　高橋彰之丈　伊藤孫太郎
瀧澤豐治郎　酒井俊一　西島濟三郎　岡村信治
岡部源九郎　鈴木金藏　長尾喜三郎　山崎豊平
板鼻幸館　小林儀治　西野彌五郎　角谷伊三郎
川口左文　遠藤總治　上村豐吉　關平太郎
桑原昌太郎　藤原賢三郎　竹内富一　關峯治郎
佐藤文治　久保田秀雄　倉保仁平　山本眞一郎
桐生清一郎
茨城支會　横山清藏　池田幸之助　落合島次郎　大橋甚三郎
塚本貞藏　湯原一　淺野幸太郎　林榮之助
高山精一　飯島清助　那司藤次郎　鮎田千代松
所寅之助　山口敏德　高津戸冬松　柴田長之介
下野支會　關口勘治　田村律之助　寺藤富平　野口福三郎
伊東貞七郎　金子林藏　西岡宗一　三森貞一郎
黑崎榮次郎　寺田秀之助　前澤眞雄　高井完之助
四本幸一郎　石田龍重　篠崎民壽　齋藤五郎八
伊東色雄　神家滿仁三　大貫權一郎　服部昌松
沼長吉　成瀬彦太郎　前原留七　石川鐵太郎
早川福次郎　上村庫次郎　清水視類　澁木宏
池田大賢　石井鶴吉
信濃支會　山浦眞平
福島支會　加藤々壽
岩手支會　長谷川四郎
高知支會　近森武議　岡本祐高　望月平太郎　佐古丑吉
福岡支會　矢野一郎　町田文作　相羽英吉　池田幹也

田中新吾

左之諸氏は頭書の金額を靜岡支會へ指定本會に寄附せられたり。

一金三十圓宛　賀茂、志太、引佐、駿東、磐田、田方、庵原、富士、榛原、小笠、濱名、周智蠶絲業組合
一金百圓也　靜岡縣生絲同業組合
一金五十圓也　靜岡縣蠶絲業取締所
一金十圓也　持田初太郎
一金三圓五十錢也　靜岡市蠶絲業組合
一金九十錢也　高木彌市

本會職員の出張

十月十日吉池理事長野縣北安曇郡主催一市七郡聯合品評會及信濃支會南信一市七郡委員部聯合總會へ臨席の爲め出張同十四日歸京。

十月十五日吉池理事山梨、下野、茨城の三支會品評會褒賞授與式臨席の爲め出張同二十日歸京。

十月十六日正親町伯爵、本多理事、小池書記は新潟支會總會及品評會褒賞授與式に臨場の爲め出張、同十八日歸　服部書記は同上及調査の件に付同十五日出張二十四日歸京。

十月十七日桑田理事、重宮、　關書記は下野、茨城兩支會品評會授與式臨場の爲め出張、同二十日歸京

右品評會褒賞授與式には　總裁殿下御名代として塚田御附武官臨場せられたり

十一月八日樋木理事は富山支會品評會褒賞授與式及石川支會支會發會式に臨場の爲出張、同十三日歸京。

十一月十日　總裁殿下宮城支會總會に台　に付本會より本多、吉池兩理事及重宮、金谷兩書記出張、十三日歸京。

總裁宮家よりは塚田御附武官、御牧家令、黑崎家從御陪從、同十三日歸京。

會頭一行の山陰紀行　(續き)

松江に入る

八月二日午前七時二十分米子發汽車に投じ、前日來來せられたる丸山島根縣知事と共に島根縣に向ふ、高橋鳥取縣技師、谷岡、富成、正楷其他有志諸君と此に袂を分てり、鳥取縣下巡回中に於ける諸君の歡待厚遇は一行の深く感謝する所なり、午前七時三十八分安來驛に至り下車、松江銀行頭取三島佐次右衞門、縣農會長横井錦之助の二氏松江より來り迎へらる、安來製絲場は同地の富豪並河理二郎氏の經營せるものにして、釜數百釜規模大ならざるも設備能く整へ產出生絲はエキストラ格に相當せり、客年　皇太子殿下行啓の際特に台覽の榮を忝ふするを得たりと云ふ、製絲場を出でゝ並河氏の邸に休憩し、午前十時三十三分安來發にて同十一時二十一分松江に着す、藤本、和田、勝留の各事務官、井口山口の兩技師、各郡市長、岡崎、園山、向坂等の代議士有志者約七八十名の出迎を受け、會頭は縣廳より差廻したる馬車に丸山知事と同乘皆美館に投ぜり。

松江着後の半日

午後一時三十分島根縣廳に登廳、丸山知事以下列席の上、會頭より當縣下に於ける蠶絲業の狀態、本會島根支會會務の狀況、日英博覽會の本縣出品物等に就き聽取する所あり、夫れより縣農會を巡覽の後丸山知事以下の案內にて松江蠶業會社東雲館を視察し、轉じて縣物產陳列所、城山興雲閣を巡覽せり。

東雲館

明治二十年士族授產の目的を以て下賜せられたる資金と松江士族より募集せる株金とを以て松江蠶業會社を創立し、二十二年より業務を開始し、爾後株金を一般に增募し漸次擴張したるが、二十八年に至り更に地方製絲家と謀り、組合を組織し共同揚返場を設け、名けて東雲館と稱せり、爾後同館の名に依りて販賣し、關西屈指の眞絲を以て名聲を博するに至れり、客年　皇太子殿下行啓の際には特に尾藤東宮武官を差遣せられ優渥なる令旨を賜はりたり、社長松本隈三氏等の案內にて工場作業を一覽し終りて物產陳列所に向ふ。

城山興雲閣

物產陳列所を巡覽したる後、龜田山なる松江城趾に登る、城は慶長十六年堀尾吉晴の築造にかゝり老松鬱々として三百年の佛を留む、城內の建物興雲閣に休憩す館の眺望極めて絕佳、白扇倒に懸れる大山の靈峰は雲際に聳へ、白帆飛び漁艇眠れる宍道湖上の勝景は收めて双眸の裡にあり、恰も一幅の靈繪を見るが如し、市長福岡世德氏等會頭の爲めに市內有志者諸氏の珍藏に係かる古畫刀劍を陳列して觀賞に供せらる、古畫は岡崎運兵衞、三島佐次右衞門、森脇某右衞門三氏所藏のものにして主として宋元的時代の珍品たり馬遠劉松年李龍眠默菴等の妙筆は觀

覽者をして垂涎三尺たらしめ優に國寶として尊重するに足るものあり、刀劍は藏岡世德、間宮與孝、永井卓一、米村信敬諸氏の出陳にして是亦歡賞すべきもの鮮からず、茶菓の饗を受け午後六時皆美旅館に歸る。

宍道湖の風光

丸山知事は會頭一行の爲め皆美館の樓上にて晚餐を饗せらる、樓は宍道湖面に對して其全景を一眸の下に收むるを得、山光水色の明媚なる古より本邦十二景の一に數へらる、重野成齋翁曾て此地に遊び嫁ヶ浦と共に海內の双絕と賞揚し、宋松青岸は西歐セネバ湖畔に髣髴たりとて「俗稱嗅起曾遊夢、此是神州日內瓦」と歌へり、土地山陰の僻陬に在るを以て都人士の訪ふもの稀なれば天橋松島の如く人口に膾炙せずと雖も、文人墨客の一たび筇をひくもの皆其靜景を歡賞せざるなしと云ふ、主客閑話清酌の後、屋形船と稱ふる障子張の屋根船に乘じて湖上を逍遙す、涼風吹き來りて苦熱を拂ひ去り亦一段の快を覺へたり。

松江の講話と郊外の巡覽

三日午前八時より市會議事堂に於て講話會を開く來會者七八百名、知事開會の挨拶を爲し會頭及吉池理事順次壇に登り各一時間餘の講演を爲したり、午後一時より丸山知事、村上八東郡長等の案內に依り郊外なる布志名陶器製造所、農事試驗場等を巡覽す、布志名陶器製造所は雲龍陶器の本場として內外の稱譽を博し、近時海外輸出の數漸く多し、縣立農林校は農業、林業、牧畜の數科に分たれ約二百名の生徒を收養せり、種畜場は種牛、種馬、種豚、種鷄の蕃殖配付及各種試驗を爲せり、午後五時一同旅館に歸る。

臨水亭の歡迎

午後七時より會頭一行の爲め松江及本縣下の重なる人々より成れる官民合同の大歡迎會を臨水亭に開かる、來會者百五六十名、知事以下の縣官、十二郡市長、代議士、縣會議員、銀行頭取、辯護士及蠶絲業家等地方有力の士は殆ど一堂に網羅したる稀有の盛會にして、丸山知事起て丁寧なる挨拶を爲し、會頭直に應じて懇篤なる饗しに對する謝辭を述べられ獻酬の間盛に蠶絲談を鬪はし午後十時に至り辭して歸館の途に就けり。

湖水の縱斷

八月四日午前八時、一行は丸山知事始め松江市內外の官民有志數十名の人々に送られ、大橋々畔に馬車を駐め一行の爲め特に別仕立の小蒸氣玉津島丸に乘船宍道湖上に錨を解けり、丸山知事微恙あり、藤木內務部長代りて先導せられ井口、山口の兩技師、須藤簸川郡長其他數名の同行あり、行く〳〵甲板上に湖山の眺望を恣にし簸川郡小境港に上陸す、平田製絲の木佐德三郎氏其他十數名の出迎を受け、共に腕車を連ねて平田製絲株式會社に至る。

平田製絲株式會社

力士印の平田製絲は絲質の優良と製產額の多量とを以て關西に錚々たるものなり、而して同會社が地方蠶業の發達、繭質の統一、共同稚蠶飼育の普及獎勵に就ては尠からざる資財を投じ損益を顧みずして盡瘁努力し、着々其効果を收めつゝあるは蠶絲界の爲めに多とする所なり、當社は明治二十二年現社長木佐德三郎氏一箇人の營業として創設せられ、二十六年に至り合資組織となり、三十五年株式會社となれるものなり、現在釜數二百六十四釜一ケ年の製絲高約五千貫目に達し常にエキストラ格を以て多くは先賣約定行はれつゝあり、木佐氏及當社が地方蠶業上に盡したる事蹟は小紙面の盡し得べきにあらざるも、今其一班を揭げんか、明治二十年木佐氏が養蠶傳習所を設立したる以來今日に至る幾多の變遷ありしも、蠶種の選擇と飼育の改良に於ては一貫して變らず、各種の方面に向て活動したるが、就中三十六年以來稚蠶共同飼育所設置の獎勵は著しく効果を奏せり、即組合員の成繭を全部會社に買收するを條件として飼育所に對し補助金を支給するの方法にして養蠶家亦之を便とし共同飼育所を設くるもの漸くに多く、四十二年度には八十箇所を以て算し　補助金額四千八百十七圓三十五錢を支出するに至れり、又每年製產繭を集めて品評會を開き每回三百圓內外の賞與を支給せり、而して一面蠶種の改良一定に就ては三十二年以來頗る意を注ぎ、鳥取其他各地方より良蠶種を購入し飼育試驗を行ひ三十六年に至りて稍其目的を達し、漸次良種の蕃殖を圖ると共に原蠶種製造所設立の議を縣廳に進言すること數回遂に其容るゝ所となるや、製造所用の建物は之を新築して提供する等縣當局と相待て繭質の統一に力を盡し、今や出雲全國は槪ね其一定を見るに至れり。

工場內の巡覽を卒へ、木佐社長の邸に於て晝餐の饗を受け、午後一時出發杵築に赴く、出雲大社の千家尊愛氏其他有志者數十名町外に迎へられ、午後三時旅館因幡屋に投ず。(未完)

蠶桑雜觀

▲屑繭の新精練法 富士瓦斯紡績會社專務取締役和田豐次氏は、今回屑繭を精練して立派なる絹絲を作る方法を發明し、目下特許局に特許權申請中とのことである。從來の絹絲紡績に使用する生絲屑物の精練法は六七貫夜を要するのみならず、光澤を失ひ絲質を害し、且つ解舒容易ならずして量目を減じ、徒らに多くの經費を要するのみなれば、これが改良の必要を認め苦心する處ありし結果今回此一發明を見るに至りしとは斯界の一新福音である、同氏發明の要點は工女繰絲の際に生ずる屑物を集めて冷水に投じ、然る後溫度百三十度内外なる鹵を煮たる湯を別桶に盛り前に冷水に浸せし屑物を取出してこの湯中に投じ、十二時間乃至十八時間を經たる後に引揚げて乾燥室に送り、乾燥したる後に貯蔵するものであるが、斯くせば前に失へる護謨質を回復するのみならず、前記の缺點を補ふこととなり、この方法によりたる屑物を以て紡績を製織せしに、純良の生絲を原料としたるものと毫末の差がなかつたとのことである。

▲京都蠶業講習所十周年記念式 京都蠶業講習所創立十週年記念式は去三日午前十時三十分より葛野郡衣笠村の同所講堂内に開き來賓職員講習生等一同着席、石渡所長は起つて同所十年經過の概要について一場の談話をなし、引續き芳賀農商務省蠶絲課長は、左の大浦農商務大臣の告辭を朗讀せられました。

告　辭

天長の佳辰に際し茲に京都蠶業講習所創立十周年記念式を擧行す抑も本邦の蠶絲業が長足の進歩を爲したるは固より當業者の精勵に因由する事少からずと雖ども亦も之が奬勵改良に任ずる諸種の機關與つて大に力ありしに依る顧ふに本所既往十年間の事績は斯業に貢獻したる事多大にして苦心經營の効空しからずと謂ふべし今や民力の涵養と國富の充實とは之を蠶絲業の改善に待つ切なるものあり是を以て本所は益々力を學術的研究と應用的試驗に盡し愈々講習生の教養に努め以て改良指導の中樞となり本所出身者は獨り學術技藝の普及を以て安んずる事なく進んで戊申詔書の聖旨を奉戴し誠心誠意其業に從ひ互に協心努力し以て斯業の發展を期せざる可らず一言以て告辭とす

明治四十二年十一月三日　　農商務大臣　男爵　大浦兼武

次に大森知事代理昌谷事務官本會頭男爵松平正直氏代松田農商務技師其他東京蠶業講習所長本多岩次郎氏等の祝辭祝文の朗讀ありて、式後茶菓の饗應にて正午散會せられたが來賓其他來會者二百餘名頗る盛況でありました。

▲世界生絲產額 佛國里昂生絲商組合の發刊したる第三十八回統計年報に依れば、昨年（千九百八年）中の世界各國生絲產額豫想高二千二百八十七萬基に對し其實收產額が二千四百八萬基に達したるは、同年の養蠶期末に於て東亞、就中日本絲の產出激增したる結果にして、同年度世界の生絲產額は極東に於て增加し、西歐及び東歐諸國は前年に比し却て減少したるものと云ふべく、又千九百五年に於て世界產額に幾少の減少を來せしと雖も、讀は特に伊國產額の減少と支那日本生絲の輸出最少額なりしに原因せしに外ならずして、之れを除外すれば世界の產額は常に漸增的に進歩を繼續しつゝあると同時に、歐米製絲家の使用もますます逐增して居る、今同年度の生絲產額豫想高と實收高との比較表を示さんに左の如くであります。

	實收產額（千基）	豫想產額（千基）
佛蘭西	六五六	六五六
伊太利	四,四八六	四,四八六
西班牙	七五	七五
墺洪國	三三四	三三八
西歐小計	五,五五一	五,五五五
アナトリア	六一五	五七五
シリア	一四九〇	六一五
サイプラス		
サロニカ	二八五	三一五
アドリアノープル		
ブルガリア、セルビア	二〇七	二一五
ルーメニア		
ギリシア	六五	六九
クリート		
高加索	三六〇	三六〇
波斯トルキスタン	五二六	五二五
東歐、中亞小計	二,六九三	二,六七〇
支那上海	五,六三八	五,〇七五
支那廣東	二,三七八	二,一五〇
日本	七,五七〇	七,一七〇
印度孟買カルカツタ	二五〇	二五〇
東亞小計	一五,八三六	一四,六四六
總計	二四,〇八〇	二二,八七〇

▲八田氏功績表彰會 本會學藝委員として又評議員として國家的に斯業の爲盡瘁せられつゝある八田達也氏が、山梨縣蠶絲業の爲にも貢獻せられたる功績甚大なりとて、十月十六日山梨縣品評會褒賞授與式後甲府市舞鶴公園内機山館に於て氏の功績表彰會が開かれた、會する者五百名彼八田氏夫婦の着席を待つて寺田忠三郎氏先づ起つて開會の辭を述べ小野光兵衞氏功績表彰文を朗讀し之れに同會よりの金杯一個を添へて八田氏に贈呈し、續いて熊谷知事の祝辭があつた、夫れから八田氏は席を離れて二三歩を進め懇切なる謝辭を述べ膣て小野會長の閉會の辭と共に、一同園遊會場に移り、各自十二分の歡を盡して散會せられたのが午後四時であつた、當日は功績表彰記念の爲氏の肖像及記念杯を來賓一同に頒つたとのことであるが氏の名譽の眞に甚大なりと謂はねばならぬ。

▲生絲檢査所月報 十月の横濱生絲檢査所の成蹟左の如くである。

檢査年月	檢査件數 原量	正量	品位	練減	計
本月	一三	四,四六七	七,四六九	—	一一,八九九
前月	一四八	四,三三三	七,六八七	三	一二,〇四一
昨年當月	—	四,九六五	七,八六五	—	一二,八三六
本年累計	一二六	四三,八二三	六二,一四〇	三	一〇六,〇九六
昨年當月迄累計	—	四五,二一六	四八,三四〇	八	九三,五六四

正量檢査

一檢査件數　四,三六七件
一總全量　三七〇,七二七斤
一總風袋量　六,七八四斤
一總原量　三六三,九四三斤
一總恒水量　三二二,四四二斤
一正量　三五七,九〇九斤

含水量百分比例
平均　一一,四二
最多數　一三,二二
最少數　九,〇八

品位檢査

絲別	檢査件數	再繰中切斷數	纖度 平均（デニール）	纖度 最大の差（デニール）	顆節 大顆（個）	顆節 小顆（個）	強力及伸度 纖度（デニール）	強力及伸度 強力（グラム）	強力及伸度 伸度（％）
細絲器械	一,二〇〇	八	一〇,四五	[illegible]	一	[illegible]	一〇,四五	[illegible]	[illegible]
同座繰撚造	一三	一四	一一,〇四	[illegible]	一	一八	一一,〇四	[illegible]	[illegible]
中細器械	一,一七四	六	一三,六八	[illegible]	一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
同座繰撚造	四四	一〇	一三,八八	[illegible]	一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
同座繰折返	[illegible]	一七	一三,八八	[illegible]	一一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
太絲器械	一,三六八	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
同座繰撚造	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
同座繰折返	七〇	一八	[illegible]	[illegible]	三	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
特太座繰器械	六八	一一	三一,〇一	[illegible]	一一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
同座繰撚造	一一	三	[illegible]	[illegible]	三	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一〇,一〇
同預付及雜	一三	—	[illegible]	[illegible]	—	—	—	—	—
同玉絲	一六八	一三	[illegible]	[illegible]	—	—	—	—	—

文藝

懸賞 俳句

花の本花翁宗匠選

秀逸

菅た上に又繭入を重れけり　豐後 狂花
山茶花に摺り替たる座敷設　八尾 梅榮
聞からたとは知らず鉢叩　武蔵 一嶋
貝燒や草庵隣かする實の旅籠　越後 大窓
山茶花や咲て打消す窓の寂　上毛 桜亭
餘入や管て寄らし盛うけりして見る　丹波 花外
鯨る廓に手なしゆる冬の月　羽前 一寸
貝燒や美人もなきは冬の一樂　安城 雅應
此上の靜けさは見る冬の月　丹波 梅香
貝燒や夜業終りの冬の月　陸前 白花
聞社た鶯から出たり書もの月　羽前 花明
山茶花や驛染の餘白に響し　武蔵 裳學
山茶花や懸技の師に向合ふて　信濃 巫香

寂光の世は静なり冬の月　丹波 古城
綿入や老の細く繩仕事　越後 登舟
寒さうに雲着つ脱つ冬の月　千葉 海居
山茶花や下た枝高き最合井戸　八尾 愛嶽
鉢叩きしても都の住居哉　出雲 鶴水
山茶花のちるや垣根の與依哉　下總 二學
貝燒の背中吹る寒さ哉　甲斐 花僊
綿入や鎧に富みし老夫婦　武蔵 一道
貝燒や盛り分ちたる家内中　信濃 白仁
鉢叩人の寛たる月夜哉　越前 白得
貝燒や世は様々の鬮白み　相模 晴嵐
木枯しの妻見せけり冬の月　羽前 三更
山茶花や一揃多き枝の儘　三河 東里
冬の月畠一と町は波の音　八尾 無擧
綿入や頭て分る腕殿　武蔵 歌子
歸省して母の手に成る綿子哉　下總 汀月

人

貝焼や濱を見下す麓茶屋　常陸　支峰

貝焼や足る事を知る老夫婦　入尾桑紙

夕晴に貝焼く蘆の丸屋哉　武蔵　松風

貝焼や同じ火なから出来不出来　選者　花翁

天

追加

地

武

懸賞募集　狂句（第一期投句）

金坊子選

▲秀　逸

[illegible]

▲天　賞

主人の冷遇　篁同盟龍　工なし　京都　大槻蛾眉人

▲選者吟

外れ篁　特殊の例と称　陽逃げ　金坊子

▲伊藤公を弔ふ

牡丹散て滿緑の地に響あり　金坊子

熱心の温度で篁よく進み　愛知　村上下川

▲地　賞

小の虫大の牛まで食つちまい　丹波　泉凸坊

▲天　賞

懸賞募集　俚謡（第二十一期投句）

高橋鬼川選

▲秀　逸

[illegible]

▲人　賞

丸の裸にしられたあとで　愛知　長坂蕉風

つらや身を賣るあの蝿

▲地　賞

お絹絲と紅葉の木蔭　山形　青木枯葉

山家三里は雪日和

▲天　賞

形ばかりか心の絲も
拗て解けない片輪繭　愛知 高瀬岬東

▲選者吟　鬼川

罪な業だよ絲繰工女
瞞し〳〵して繭をむく

◎

あやに絡んだあの繭でさへ
村の小町にや丸裸

▲伊藤公を弔ふ

立てし勳功はから紅に
胸を彩る大綬章

懸賞募集 一口噺（第二十一回披露）　高橋鬼川選

◎人間と蠶　岐阜 今井風月

甲『人間と蠶とは反對だね』乙『ナゼ』甲『人間は小兒の中が可愛いが蠶は大きくなる程可愛いから』

◎ステツキ　山梨 高野峰雨

官吏の子『僕のお父樣は外へ出る時、ステツキを持つて行くよ』按摩の子『おいらのちやんだつて始終持つて歩いてらア』

◎足相撲　滋賀 藤木蓉花

父『坊や炬燵の中で足相撲など取るものでないよ、毀れてしまうから』子供『四本柱があるから大丈夫です』

▲人賞

◎桑の名稱　長柄町 藤崎藤花

甲『蠶の中で何と云ふ名稱が一番古いかな』乙『そりや君又昔さ』

▲地賞

◎大きな頭　山形 井上源造

子供『お父さん昔の人はどんなに頭が大きいかつたでせう』父『ナゼ』子供『城を枕に討死した人があるから』

▲天賞

◎手品の名手　山形 蘆野露雲

『世界で手品の一番上手なものは誰だらう』乙『それは蠶さ』甲『ナゼ』乙『蠶は靑い桑の葉を喰つて白い絲を吐くから』

懸賞募集 五行文（第二十一回披露）　高橋鬼川選

△秀逸

◎銀の絲　京都 田鶴衣笠

澄み渡つた秋の日、若夫婦が差向ひになつて繭かきをして居る、取り上げた繭には美しい繭の花が輝く――恰度二人の間を繋いだ銀の絲の樣である、兩方から引つ張りやつて思はず莞爾した。

◎蠶仕舞　江州 未醉

秋蠶も首尾克く終つて今日は蠶室の大掃除、母と姉とは蠶室の拭き掃除、僕と弟とは蠶具の取片け、朝から晝にかけてやつと清潔に濟んだ、午後は此清き廣い蠶室で家内打揃つて祝の酒を酌んだ、風は涼しく虫が鳴いた。

◎蠶祝　山梨 長田泉澄

蠶が濟んで千兩近くの金は惠比壽の前に飾られた、今日は其祝にと母が心盡しの馳走に、晩、蠶の話を聞んだ一家族、酒に顏が赤らみ喜色滿面笑聲が家充滿に響き渡つた、鎭守の森から豐作を祝ふ太鼓が聞える。

◎月　山形 青木枯葉

夜桑が終つたのでお鉢は草の露を踏んで裏庭に出た、瘠せた白い顏を上げて茫と月を仰いだ『あゝ里の母さんは病床の破窓から此月を、姉さんは工場の二階から矢張此月を見て泣て居るだらう』と頬を傳はる熱い涙！

▲人賞

◎風呂の月　三河 伊藤樵夫

今給桑を終つてホッとした自分は「兄さんお湯」と云ふ弟の聲に向を見ると、風呂は氣持よく湯氣を立てゝ居る、山の端から二間程上つた十五夜の月は、影を其儘風呂に浮き出して居る、自分は其丸い月と共に入浴した。

▲地賞

◎來て見給へ　京都 梅垣素軒

來て見給へ靑葉の山に、躑躅が燃る頃杜鵑鳴く丹波路へ、靑い桑の葉が浪打つ其中に、小菅笠や姉樣冠が、彼地此地に浮模樣のやうになつて見える、そして絹のやうに艶のある唄が長閑に流れて甘いさゝやきも聞える。

▲天賞

◎蠶上簇　茨城 柴沼鬼外

上簇してもう七日、重荷を下したやうな氣で、さあ是から土浦へ行つて繭の相場を聞かうとスタ〳〵歩き出した、袂には雪のやうな艶よき繭一包、暖かい風は町充滿に吹渡るので身體が浮くやうに思はれた。

蠶海涓滴

△國家の元　勳伊藤公露國藏相と會見すべく哈爾賓に蒞り將に停車場を出でんとして突如韓人安應七の兇手に殪る洵に是れ晴天の霹靂國家の重大事件也。

△國家の柱　石として上陛下に仕へ奉り世界の大政治家として國運の發展に竭したる公の薨去は眞に國家の損害兇報傳へられて國民其色を失ふ寔宜なり。

△兇漢素と　是れ基督教の熱心家由來朝鮮に於ける基教信徒往々陰謀を企て統監政治に反對し排日策を講ず嚴に之を取締るなくんば噬臍の悔必ず來らん。

△基督開教　五十年記念式の席上牧師某吾人の心は日本魂に非ずして基督魂なりと叫ぶ嗚々何等の狂言ぞや男爵加藤弘之博士の耶蘇教を排す所以ある哉。

△養蠶は一　年只一囘の仕事秋蠶を養ふも二囘に過ぎぬ其性質最も危險の投機事に類すと熊谷農學士中央農事報に謂ふ農論も其度を過ぎて寧ろ滑稽なり。

△近時英國　船歐洲人を用ひず多く亞細亞人を雇ふ經濟的理由以外有色人種は訓練し易く溫順にして秩序的なること其理由の一なりと黄人の鼻稍高し。

△十月末現　在の貯金總額一億二千百九十四萬九千二百七十五圓此人員九百四十二萬九千八百九十八人也とは郵便貯金局の調査也貯蓄心の發達大に可也。

△大失體を　演じて天下に醜聞を流したる鹽屋の水產會社山を賣却して破產を免れたるも北海道の木材會社賣る山なくして窮迫すとは日々子の片々記事。

△絲價日に　暴落して上一番遂に八百十圓の相場となるも海外需要地の景況依然として面白からず實に困つた現象なれども物極れば必ず開く忍耐が肝要。

△繭質統一　は蠶界多年の宿題時運愈到來し主務者本會に諮問し本會慎重の態度を取り調査委員を舉て答申す此案實行の曉には生絲市場に燦光を認めん。

△津久井郡　立蠶業學校五十餘名の生徒佐藤校長の行爲に慊焉たるものありとて屢々ストライキを行ひ眞面目に就學せずとは奇怪也何とか速に解決せよ。

△横濱伊勢　佐木町署に於て檢舉中なる生絲窃取事件次第に步を進めて外國商館側に手を延ばし續々惡番頭等を拘引すと五十年來の惡習打破痛快又痛快。

AVIS.

1°. Le bulletin de l'Associations séricicole du Japon est l'organe des membres de cette societé qui compte actuselement plus de 30.200 membres.

2°. Cette Association a pour but de développer toutes les industries de la soie en publiant un rapport mensuel, dans lequel il sera mentionné tous le‹ faits et études sur la soie émanant de savants et intéressés.

3°. Dans de rapport sera inscrit dans une langue européennes le mouvement mensuel de la Condition des soies de Yokohama, lequel sera distribué aux intéressés étrangers.

4°. L'Association recueillera et publiera les essais et études faits par leés interessés étrangers en matière des soies.

La Direction de l'Association Séricicole du Japon.

NOTICE.

1) The report of the sericultural Association of Japan are intended to serve the interest of the members of the association, whose number is over 30.200

2) This association has for its object the development of all silk industries by publishing a monthly report containing the facts and studies on silk by specialists and persons interested in silk.

3) In this report the monthly statement of the Yokohama Silk Conditioning House will be published in a European language for distribution among foreigners interested in silk.

4) The association will collect and publish articles and studies foreigners of topics concerning silk.

The Direction of the Sericultural Association of Japan.

文藝懸賞募集

俳句（十二月分〆切十一月末日選來投書各月の課題は毎號其前月に〆切る）

▲選者 花の本花翁宗匠

▲課題 冬至。寒梅。雪。笹啼。卵酒。

▲懸賞 天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

▲規則 一題一句つゝ一人に付五句限り。用紙端書に限る。便宜上東京新宿北裏一二三松林花翁宛送らるべし。應募者は本會々員若くは會員外と記し住地の國郡町村番地姓名雅號共明記せらるべし。之れなき者は縦令其選に入るも贈賞せず

狂句（柳川）（原稿〆切毎月三十日限り）

▲選者 高橋鬼川先生

▲課題 蠶絲業に關係あるものならば何にてもよし

▲懸賞 天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

俚謡（都々逸）（原稿〆切毎月三十日限り）

▲選者 高橋鬼川先生

▲課題 蠶絲業に關するものにて女工などに唄はしめても差支なきもの（但し卑猥なるものは沒書とす）

▲懸賞 天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

一と口噺（原稿〆切毎月三十日限り）

▲選者 高橋鬼川先生

▲課題 何にてもよし但し卑猥なるものは沒書とす

▲懸賞 天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

五行文（一名寫生文）

選者 高橋鬼川先生

課題 蠶絲業に關する百般の事を見聞した儘面白く記すこと文體は隨意

用紙 端書一枚に一題限り一行二十字詰にして五行に記すこと

懸賞 天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

注意（狂句、俚謡應募者は用紙一枚に付き五句限り（一と口噺一人に付三ツ限り）▲用紙は郵便はがきに限る▲應募者は本會々員若くは會員外と記し住地の國郡町村番地姓名雅號共明記し大日本蠶絲會文藝係宛にて送らるべし住所氏名無き分は縦令其選に入るも贈賞せず）

大日本蠶絲會報廣告料

回數	特等 一頁	特等 半頁	特等 四分ノ一頁	並等 一頁	並等 半頁	並等 四分ノ一頁
一回乃至六回（一回ニ付）	貳拾圓	拾貳圓	七圓	拾五圓	八圓	五圓
七回以上（一回ニ付）	拾七圓	拾圓	六圓	拾貳圓	七圓	四圓

●會員は右料金の二割引とす●四分の一頁未滿は謝絶す●前金にあらされは掲載せす●一頁は一行二十七字詰七十二行とす

●本報定價 一部 金拾五錢 一ヶ年分前金壹圓七拾錢

明治四十二年十一月二十日印刷發行

編輯兼發行人 東京市神田區錦町三丁目十八番地 小池市松

印刷人 東京市神田區美土代町二丁目一番地 島連太郎

印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舍活版所

禁轉載

發行所 東京市神田區錦町三丁目十八番地 大日本蠶絲會（電話本局一四七三番）

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Soie. Silk. Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Noms des filateurs. Names of filatures.	Maximum du prix. Highest prices. Prix. Prices.
	Piculs.	*Piculs.*	*Piculs.*	*Piculs.*		*Yen*
1	764	658	24	—	Kisengumi.	960
2	688	763	11	983	Moritakan.	990
3	—	—	—	—	——	—
4	970	344	33	—	Rikukôkan.	950
5	826	780	19	686	Seiryokan	980
6	478	582	49	638	Mizutaniseishi.	990
7	778	689	85	—	Issikiseishi.	975
8	511	946	68	—	Hakusensha.	960
9	817	488	24	663	Hakusnikan.	975
10	—	—	—	—	——	—
11	1360	689	33	—	Kyôdôkinpai.	930
12	462	367	39	669	Kôshinsha.	970
13	576	524	15	594	Sudoseishi.	950
14	604	551	11	—	Kônansha.	980
15	749	499	23	—	Wadaseishi.	950
16	588	331	7	1340	Usuisha.	940
17	—	—	—	—	——	—
18	1287	519	5	—	Shirazurusha.	970
19	583	944	12	—	Sineikan.	900
20	588	562	4	—	Kanrasha.	940
21	390	601	36	670	Kônansha.	950
22	808	336	19	—	Kyôdôkinpai.	930
23	536	255	12	—	——	—
24	—	—	—	—	——	—
25	943	332	12	—	——	—
26	780	517	8	353	Tokôsha.	920
27	699	607	24	581	Hiramotoseishi	940
28	623	473	18	—	Tokôsha.	920
29	588	862	22	—	Yûkiseishi.	920
30	551	344	13	587	Irimaruseishi.	845
31	—	—	—	—	——	—
Total	18.547	14.017	626	7.764	——	—

1 yen want environ fr. 2.50. 1 Pical = 60 kilg environ.

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(Octobre 1909.)

	Report.	Brought over.	Arrivé. Arrived.	Vendu. Sold.	Exporté. Export.	Renvoyé. Sent back	Exportées.	Brought forward.
	Picul.	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*
Filature.	14.840	14.655	11.011	—	449	18.065		
Zagura.	3.848	2.763	2.284	—	150	4.177		
Kakeda.	507	1.019	638	—	27	861		
Autres.	56	80	84	—	—	52		
Total.	4.755	18.547	14.017	7.764	626	835		
1908.	18.776	17.840	14.038	14.834	678	7.046		

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(October 1909.)

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Citons sommairement la situation de notre marché au mois d'Octobre dernier.

Pendant les dix premiers jours, notre marché présenta un peu d'activité avec une légère progression des prix. Mais, entrant dans la dizaine suivante, les demandes nouvelles de l'Europe et de l'Amérique n'étant point arrivées, le marché est plongé dans la plus profonde accalmie. Dans la dernière dizaine, quelques demandes nouvelles sont arrivées tant de l'Europe que de l'autre côté du Pacifique; mais, malgre cela, l'accalmie a été toujours la note dominante de notre marché. Au fur et à mesure de l'accroissement des stocks, les prix ont baissé graduellement. Extra No 1 qui était de yen 865 au commencement du mois a fini par tomber à yen 845 à la fin du mois, et de plus il a présenté une tendance à baisser infiniment. Le nombre des balles traitées pendant ce mois a été de 7,316 balles présentant ainsi une diminution de 12,927 balles par rapport au mois correspondant de l'année dernière.

Les tableaux suivants indiquent d'ailleurs le mouvement de la soie durant la même période.

THE RAW-SILK MARKET OF YOKOHAMA.

The market was somewhat active during the first ten days of the month of October, and accordingly the quotations indicated an upward tendency. In the middle, however, there was a standstill in the receipt of new orders either from Europe or from America, necessarily causing a profound calm on the market. Coming to the latter part of the month, this stagnant condition was a little relieved by the arrival of a considerable amount of orders from abroad; but the state of actual transactions still remained in the same dulness. The gradual congestion of goods and the attendant decline of price were the inevitable result. Extra No. 1, which had been quoted at Y. 865 in the beginning, fell to Y. 845 at the close of the month, and indeed there was a sign of an excessive fall of its price. The amount of transactions conducted during the month under review, is returned as 7,316 bales, which, as compared with the corresponding period last year, regrettably indicate a remarkable decrease of 12,927 bales.

The following table shows the movements of silk during the relative period.